SHUFFLE! ～The bonds of eternity～

Undefeat

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＨＵＦＦＬＥ！　～Ｔｈｅ　ｂｏｎｄｓ　ｏｆ　ｅｔｅｒｎｉｔｙ～

【Ｎコード】
Ｎ３９４３Ｖ

【作者名】
Ｕｎｄｅｆｅａｔ

【あらすじ】
もしも、三人だった幼馴染が四人だったとしたら？
最後の一人が関わることで変化する未来。
これは、そんな“Ｉｆ”の物語。

その一　（前書き）

初投稿になります。
ご意見・ご感想ならびに誤字・脱字、この表現おかしくね？といったご指摘など頂けましたら幸いです。

その一

『柳』

『柳くん』

『柳ちゃん』

『また会おうな』

『また会いましょう』

『また会おうね』

『うん、また会おう！』

――それは、幼い少年少女達の間で交わされた小さな約束――

――あれから八年――

「あれ…？　これは…？」

――この町に残った少女の元に届いた一通の手紙から物語は始まる――

――これは、心優しき一人の少年と心強きもう一人の少年、そしてその仲間達の織り成す物語――

ＳＨＵＦＦＬＥ！　～Ｔｈｅ　ｂｏｎｄｓ　ｏｆ　ｅｔｅｒｎｉｔｙ～

――開幕――

その一　（後書き）

オリキャラの設定は本編中にて徐々に明かしていきます。

その一（前書き）

オリキャラ以外の設定です。

その一

舞台設定

時期：ＳＨＵＦＦＬＥ！　Ｅｓｓｅｎｃｅ＋本編開始（６月１３日）から約二ヶ月半後

状況：稟は誰ともつきあっていないが、ヒロイン全員にある程度フラグが立っている

しかし各ヒロインの抱える問題は解決されていない

プリムラは芙蓉家に住んでいるが、バーベナには通っていない（少しづつだが感情を表に出すようになっている）

稟は裏シアとはまだ出会っていない

世界観：Ｔｙｐｅ－Ｍｏｏｎ、とらいあんぐるハート３及び魔法少女リリカルなのは（アニメ版）の世界観を含む（登場するのは一部のキャラのみ）

“魔族”と“魔”はイコールではない（後述の理由による）

神族・魔族・人族はかつて同一種族から枝分かれした種族である（故に混血が可能）

その他：稟達が通っているのは国立バーベナ学園高等部、桜が通っているのはストレリチア女学院高等部である（故に稟は１７才）

その一（後書き）

他にも色々ありますがそれらは本編で。

その一（前書き）

ここから本編に入ります。

その一

「……朝か……」

まだ余韻の残る頭で考えながら時計を見る。

六時半。

八月ももう終盤だが外は既に明るく、セミが鳴き始めている。本来ならそのまま二度寝するところだが、すっきりと目が覚めてしまっていて、そんな気が起きない。

「久々に懐かしい夢を見たな……。あいつ、元気にしてるかな……」

目を閉じて、しばし思い出にひたる。八年前、この町を離れた幼馴染と過ごした日々を。

「よし、起きるか」

ベッドから降りると、時計は七時前を指している。どうやら思っていた以上に時間が経っていたようだ。苦笑しつつ、顔を洗うため部屋を出た所で、階段を登ってきた彼の幼馴染兼同居人、芙蓉楓と目が合った。

「おはようございます、稟君」

「ああ、おはよう、楓」

こんな時間に稟が起きていることに驚きつつも、しっかりと挨拶をしてきた同居人に苦笑しつつ、挨拶を返す。

「ちょっと待っててくださいね。すぐに制服を出しますから」

「へ……？」

素頓狂（すっとんきょう）な声を出した稟に楓は微笑んでこう言った。

「今日は登校日ですよ。忘れて休んだりしたら、新学期に大変なことになりますよ？」

主に彼等の担任である熱血教師の手によって。

「……ああ、そういえばそうだったな……」

くすくすと笑う同居人を見ながら頭を掻く稟。よく見れば楓も制服姿だ。

「んじゃ、顔洗ってくる」

「はい。制服、出しておきますね」

「ん……頼んだ」

そんな会話をした後、稟は階段を降りていった。

＊　＊　＊　＊

「……楓……。……今日は、雨……」

「え……でも、天気予報では……」

「……稟が、起きてる……」

制服に着替えてリビングに入った稟を待っていたのは、楓と芙蓉家の居候二号（一号は言うまでもなく稟）ことプリムラ――通称リム――のそんな会話であった。

「今日は登校日だからな」

「……登校日……？」

「生徒達が先生方に元気な姿を見せるために登校する日のことですよ」

朝食をテーブルに並べ終え、エプロンを外しながら楓が答える。夏休み中の登校日の意義はいくつかある。今楓が話したような生徒達の状態確認や、放置されることになる学校施設の清掃、課題の進捗状況の確認、休み中には（特に親しい場合を除き）ほとんど顔を合わせないであろうクラスメイトとの交流、はたまた、だらけているであろう生徒達に渇を入れる、などである。生徒達からすればかったるいものだろうし、そうなればサボる者もいる。しかし、稟や楓の所属する２－Ｃにはそんな不届き者はいない。別に皆が真面目なのではなく、いまどき珍しい熱血教師が担任であるからだ。

「まあ、授業のある日とは違って早く終わるしな」

いただきます、と手を合わせて朝食に手を伸ばす稟。

「お昼前には終わりますから、すぐに帰ってきますよ」

同じように手を合わせる楓。プリムラもそれに続く。

「……ん……分かった……」

とある事情によって感情をうまく表せない少女、プリムラ。しかし、この二ヶ月ほどの同居生活で、少しずつではあるものの、感情を表すことができるようになってきている。あとは何かきっかけがあれば歳相応な表情をみせてくれることだろう。

＊　＊　＊　＊

「それではリムちゃん、お片づけをお願いしますね」

「……うん。任された」

「それじゃ、行ってくるな」

「行ってきますね」

「……行ってらっしゃい」

朝食の後片付けを自ら買ってでたプリムラに任せ、二人は家を出た。

「あ、稟くん、カエちゃん、おはよー」

「稟様、楓さん、おはようございます」

二人が前庭から道路に出た所で、二つの声が響いた。見れば、稟達のクラスメイトであり、両隣に住んでいる二人の少女が笑顔で佇(たたず)んでいた。

「おはよう、シア、ネリネ」

「おはようございます、シアちゃん、リンちゃん」

「今日も朝から暑いねー」

「でも、稟様のお顔を見れば暑さも吹き飛んでしまいます」

ネリネの台詞に苦笑いを浮かべながら、

「そういえば二人とも登校日のことはちゃんと覚えてたんだな」

きれいさっぱり忘れていた稟は感心したように言う。

「あ、あははー、実は昨夜カエちゃんから電話をもらうまで完全に忘れてました」

「あー、うん、それはよかったな」

「あ、リンちゃんはちゃんと覚えていましたよ」

「あうっ」

フォローを入れようとして逆に追い討ちを掛けてしまう楓。

「あ、あの、そろそろ行きませんか？」

ネリネの言葉に賛同し歩き始める四人。

稟は今日も暑くなりそうだ、と夏の青空を見上げた。

＊　＊　＊　＊

「元気だな」

どこか年寄りじみた口調で言った稟の視線の先には、残り少ない夏休みを満喫しようとばかりに遊びまわる小学校低学年くらいの少年達がいた。物思いに耽っていると、

「稟様？　どうかされましたか？」

「ん……ああ、いやちょっとな」

聞いてきたネリネに返事をする。

「そういえば稟君、今朝は早起きでしたけどなにかありましたか？」

「あれ？　そうなの？」

「はい、いつもより三十分くらい早かったので」

苦笑しつつ答える。

「懐かしい夢を見たからな」
「え……それってもしかして柳君のことですか？」
驚いて楓を見る稟。
「どうして分かったんだ？」
「私も今朝、柳君の夢を見ましたから」
「そうか……」
二人して空を見上げる。
「柳君、元気でしょうか」
「さあな。まあ、便りが無いのはいい便り、っていうからな。元気にしてるんじゃないか？」
「ふふ、そうですね」
「あのー、二人の世界に入ってるところ悪いんだけど……」
「ああ、悪い悪い」
完全に蚊帳の外に置かれた二人に謝る稟。
「その、“柳君”という方は一体？」
そして、稟と楓はシアとネリネに説明する。

「俺と楓と桜が幼馴染なのは知ってるよな？」

「うん、さっちゃんとは前にも会ってるし」

「はい、とてもきれいな方ですよね」

（まあ、そういうネリネだって充分以上にきれいだけどな）

稟の内心の台詞はさておき、説明を続ける。

稟が楓と友達になり、楓から紹介された桜とも友達になった後、三人で遊んでいた時に出会った少年。他人を寄せ付けない雰囲気をもちながらも、どこか寂しげな姿。そんな少年に声を掛けたのは土見稟という少年の性質から言えば至極当然のことだった。

「まあ、始めのうちは警戒してたけどな、少しずつ心を開いていってくれたよ」

まるで懐かない猫を相手にしているみたいだった、とは稟の弁。

次第にその少年は稟達と仲良くなり、三人だった幼馴染は四人になった。

「でも、八年前にシアやネリネと出会う前に親の仕事の都合でこの町を離れたんだ」

今でもはっきりと思い出せる。別れの日に交わした約束を。

ふと楓を見ると、彼女も同じなのか、穏やかな微笑みを浮かべていた。

「そっかぁ、ちょっと羨ましいかも」

「ええ、そうですね」

語り終えた二人にシア・ネリネは言った。

「連絡は取れないの？」

「ああ、桜なら何か知ってるかもしれないけどな」

「桜ちゃんは柳君としばらく手紙のやりとりをしていたようですけど」

「帰ったら電話してみるか」

「そうですね」

――二人は知らない。電話をする必要など一切無い、ということを。

なぜなら――

その一（後書き）

この調子だとオリキャラの登場までは少し時間がかかりそうです。

その二（前書き）

オリキャラ、声のみ登場です。

その二

その日、八重桜はご機嫌だった。

ちょっと散歩に出かけた先で可愛いぬいぐるみを発見、ひと目で気に入り、相場よりも控えめな値段だったことも手伝って即決で購入――彼女風に言えば保護――したからである。しかし、彼女の足取りが軽いのはそれだけが理由ではない。

「懐かしい夢、見ちゃったな。　それに……ふふっ」

昨夜見た夢を思い出し、また今日のことを思うと自然に笑顔になってしまう。その笑顔をみた通行人の若い男性の目がハートマークになっていたのは全くの余談である。

時間は二日前に遡（さかのぼ）る。

＊　＊　＊　＊

「あれ？　これは……？」

帰宅した桜は自宅の郵便受けに入っていた自分宛の手紙を見てつぶやいた。今日は彼女の在籍するストレリチア女学院の登校日だった。名門お嬢様学院だけあって、登校日といえどサボる者など皆無だと言っていい。もっとも八重家はごく一般的な家庭なのだが。

「誰からだろう？」

頭に疑問符を浮かべながら封筒を裏返した桜の目が驚愕に見開か

れる。そこに記された差出人の名前は彼女にとってだけではなく、彼女の幼馴染達にとっても懐かしいものだったのだから。逸(はや)る心を抑えつつ急いで自分の部屋に戻り、制服姿のまま封を切る。内容はいたって簡潔なものだった。

『桜へ
勝手に手紙の遣り取りを打ち切った人間がなにを、と思われるかもしれないが、もしまだ俺のことを友人だと思ってくれているなら、下記の番号へ連絡してほしい。そうでないならこの手紙は焼き捨てるなりなんなりしてくれてかまわない』

そんな文面の下に携帯電話のものと思われる十一桁の数字、そのさらに下には送り主の名前が署名されていた。

「これだけ……？」

いささか拍子抜けしたような声がもれる。

（もしまだ俺のことを友人だと思ってくれているならって……当然でしょう？）

八年前、彼がこの町を離れてからしばらくの間、桜は彼と手紙の遣り取りをしていた。当時はまだ携帯電話の普及率もそこまで高くはなく、彼らにとって連絡の手段といえば固定電話か手紙くらいのものであり、また、当時まだ小学生だった彼らにとって長電話というのは褒められたものではなく、結局手紙という手段しかなかったのである。
実はこの手紙の遣り取りは桜にとってはかなりの支えになっていた。彼がこの町を離れてから半年ほど経った秋のある日、土見家と芙蓉家を襲った悲劇、そして変わってしまった稟と楓の関係……二

人の間で板ばさみになってしまった桜……どうしていいか分からず、手紙で頻繁に彼に相談した。それでなにかが変わる、ということも無かったが、同じ想い（稟と楓に元通り仲良くしてほしい）を抱える彼の存在は当時の桜にとってとても頼もしいものだった。

しかし、その手紙の遣り取りも三年程で途絶えた。定期的に届いていた彼からの手紙が来なくなったのだ。心配になり、電話をしようにも番号が分からない。なぜ聞いておかなかったのかと後悔した。その後も手紙を送っていたのだが、ある時から宛先不明で返ってくるようになってしまい、そのまま手紙を出すことを断念せざるをえなくなったのである。

それらを思って感傷に耽（ふけ）っていた桜だが、ふと我に返り、手紙に書かれていた番号を注視する。この番号にかければ彼と話せる。八年ぶりに。妙な緊張感があった。よく考えれば稟以外の男の子に電話をするのは初めてだ。そんなことを思いながら自分の名前と同じ桜色の携帯電話を手に取った。

番号を見ながらキーを押そうとするが手が震える。少し落ち着こうと携帯電話を置くと同時にまだ制服姿なのに気づく。

（こんな姿を滑稽って言うのかな）

そんなことを思いながら着替える。少し時間をおいてから再度手紙と携帯電話に向き合う。

「……よし！」

気合を入れつつ番号を押す。震えはもう無かった。

『……もしもし？』

数回のコール音の後に声が聞こえてきた。思わず背筋を伸ばす。

「もしもし……あの……柳ちゃん？」

『！　桜か！？』

息を呑む音のすぐ後に答えが返ってきた。

「うん……久しぶりだね」

『ああ……本当にな……』

話したい事はたくさんあるはずなのに、言葉が出てこない。どうしよう、と桜が思っていると、

『良かった……』

「え？　なにが？」

『いや、もし電話が来なかったらどうしようかと思ってたからな』

と、そんな言葉が返ってきた。

「どうしてそう思ったの？」

『理由も話さずにいきなり、しかも一方的に手紙の遣り取りを打ち切ったからな……正直うらまれててもおかしくないって思ってたから』

そんなに冷たい人間だと思われてたの？と反論すると、ごめんごめん、という声が返ってきた。

「誠意がこもってないよ」

と少し不機嫌な声で返す。

『えっと……どうすれば機嫌が直るのでしょうか』

「……あれからどうしてたのかちゃんと話しなさい」

『了解。ああ、でもな』

「ん？　どうしたの？」

『話せない部分がいくつかあるんだがそれでもいいか？』

「うん。いいよ」

本音を言えば聞きたかったが、彼の口調に辛そうなものを感じたのでやめておいた。

『ありがとう』

簡潔に言うと、手紙の途絶えたのと同時期にある事件に巻き込まれ、さらに翌年、父親を事故で亡くし精神的に余裕が無くなっていたためだという。手紙が宛先不明で返ってきたのは、この間に引越しをしていたからだという。連絡ができなかったのは、彼の家族全員に余裕が無かったためである。今はもう落ち着いているが。

「そっか、大変だったんだね」

『でも、そっちも大変だったんだろう？　今はどうなってるんだ？』

桜も近況を話す。中学の時に楓の誤解が解け、稟と仲直りしたこと。自分は夢を追うため、二人とは違う進路を選んだことなどだ。そこで桜はあることに気づく。

「ねえ柳ちゃん。思い出話と近況報告をするためにあんな手紙を出したの？」

『ああ、実はな……』

それから彼の口から聞かされたことは桜にとっても、また稟や楓にとっても喜ばしいことだった。電話を切り、少し余韻にひたる。

「柳ちゃん、帰ってくるんだ」

そう、彼が八年ぶりにこの町に帰ってくるのだ。稟も楓もこれを聞けば驚き、そして喜ぶだろう。しかし、そう言った桜に彼は待ったをかけた。どうせなら驚かしてやろう、というのである。そういえば彼は昔からそういうサプライズが好きだった。と同時に自分にもいたずら心が湧いてくる。あのことは黙っていよう。つい二ヶ月と少し前、稟達に訪れた騒動のことは。

＊　＊　＊　＊

そして今日、彼がこの町に帰ってくる。一度家に帰り、荷物を置いて再度家を出る。その際、おめかしすることも忘れない。彼は昼過ぎに駅に到着するという。今からなら充分に余裕がある。ちなみ

に母親と妹の到着は明日だと言う。仕事先でトラブルが発生したためらしい。

「じゃあお母さん、柳ちゃん迎えに行ってくるね」

「行ってらっしゃい。よければうちにも顔を出すように頼んでおいてね」

「はーい。行ってきます」

そうして桜は家を出た。足取りはとても軽い。八年ぶりの再会はもう間近だった。

その二（後書き）

申し訳ありません。前回の後書きで嘘つきました。次でオリキャラが登場します。

その三（前書き）

その二でつじつまの合わない箇所があったので修正しました。

その三

「あと二駅か……」

車内のアナウンスを聞きながらつぶやく。もしここに彼の妹がいたならツッコミを入れていることだろう。なぜなら、一駅過ぎるたびに『あと四駅か……』『あと三駅か……』と口にしているのだから。彼も少し緊張しているのだろう。もうすぐ幼馴染と八年ぶりに再会できるのだから。

＊　＊　＊　＊

八重桜は困っていた。

「いいじゃん。遊びに行こうよ。いい所知ってるんだ」

「人を待ってますから。ごめんなさい」

「えー、君みたいな可愛い子を待たせる奴なんかほっとこうぜ」

いかにもなナンパ男に目を付けられていたためである。

桜の容姿は“十人中九人の男が美少女と判断する”と某セクハラダイナマイツに認定されるほどのものであり、なおかつしっかりとめかし込んでおり、さらに笑顔を浮かべながら駅前に佇んでいたため、周囲の若い男性の目をこれでもかと言わんばかりに惹きつけていた。もっとも今はナンパ男のおかげでその表情は翳（かげ）っているのだが。

「いいじゃん、行こうよ。ね、おごるからさ」

そう言って桜の手を取ろうとした時、

「やれやれ、こういう奴らって本当にどこにでもいるもんだな。ゴキブリみたいに」

そんな声が響いた。

「だっ誰がゴキブリだっ……」

怒鳴ろうとした男だが振り向くと同時に目に入った少年の冷たい視線を受けて言葉に詰まる。

「ナンパをするのは結構だがな、しつこい男は嫌われるぞ？　あと、周囲の視線というものも気にしたほうがいい」

我に返った男が周囲を見回すと、明らかな非難の視線が自分に集まっているのに気づく。いたたまれなくなったのか、

「おぼえてやがれー！」

という台詞とともに走り去っていった。

「もうちょっとオリジナリティのある台詞を考えつかないものかねぇ」

桜は呆然とその少年を見ていた。そんな桜に気づいた彼が振り返り、

「久しぶりだな、桜」

先程のナンパ男に向けていたのとは比べ物にならない笑顔で言った。

「柳ちゃん……」

それ以上の言葉が出ない。まるで八年前に戻ったかのようだ。

「お帰り」

必死に言葉を探し、出てきたのはそれだけだった。

その、短くもたくさんの想いがこめられた言葉に、彼はうれしそうに微笑んだ。

「ただいま」

＊　＊　＊　＊

「やあ稟ちゃん、ちょうど良かった」

帰宅した稟達を待っていたのは痩身だが鍛えられた肉体をもつ優男風の男性であった。

「魔王のおじさん、どうしたんですか？」

「いやなに、ちょっとプリムラに用があってね。少しつれていきた

いんだけどかまわないかい？　ああ、心配しなくともちょっとした野暮用でしかないから夕飯までには帰ってこれるよ」

「はあ、わかりました」

「あの、リムちゃんのお昼は……」

「ああ、それも大丈夫。こちらで済ませるから」

そう言って魔王はプリムラとともに芙蓉家を出て行った。

「それじゃ、俺達も昼にするか」

「はい、何にしましょうか」

「うーん、素麺とかでいいんじゃないか？」

「それじゃ、すぐに用意しますね」

＊　＊　＊　＊

どうせだから何か食べていこう、という提案により駅前のレストランで思い出話に花を咲かせながら食事を摂った後、二人は八重家を訪れていた。

「まあまあ、柳ちゃん大きくなったわねえ」

「お久しぶりです、椿（つばき）さん」

彼は八重椿――桜の母親――の歓迎を受けていた。

「聞いてはいたけど、草司さん、亡くなったんですってね。大変だったでしょう」

このあたりの事情は桜から聞いていたのだろう。

「ええ、でも母さんも妹もいましたから」

「そう……でも柳ちゃん、本当にいい男になったわねえ。私があと二十年若かったら放っとかないわよ」

「ちょっとお母さん！」

なにやらとんでもない事を言い出す母親に慌てる桜。

「いえ、俺なんかまだまだ子供ですから」

口ではそう言ってもいつまでも子供でいるつもりはさらさら無いが。

彼のそんな内心を感じ取ったのか、椿は目を細めて笑った。

「もっとゆっくりして行けばいいのに」

「いえ、まだ引越しの荷物の片付けとかもありますから。それに稟や楓にも挨拶しに行かないと」

それに今日はまだ彼一人しかこちらに来ていない。やはり正式な挨拶には一家揃っていたほうがいいだろう。そうして彼は桜と共に

八重家を出た。

＊　＊　＊　＊

ピンポーン

「ん……誰だ？」

昼食後、リビングでくつろいでいた稟の耳にチャイムの音が届いた。

「はーい」

「いや、俺が出るよ」

洗い物の途中だった楓を制して玄関に向かう。

「はい、って桜？」

「こんにちは稟君、楓ちゃんは？」

「ああ、今ちょっと……」

「桜ちゃん？」

洗い物を終えた楓が玄関に出てくる。

「実はね……二人ともちょっとこっちにきて」

「なんだ？」

「どうしたんですか？」

サンダルを履き、前庭に出てきた二人。そこに声がかかる。

「よう、久しぶり」

「へ？」

「え？」

そこにいたのは稟とほぼ同じくらいの身長に黒い髪に黒い目、ジーンズにシャツというラフな格好、そして両手には黒いフィンガーレスグローブをした少年だった。顔立ちは十人中六～七人は美形と判断するくらいには整っており、精悍（せいかん）というよりは綺麗という表現が似合っていた。

「柳……か……？」

「柳君……ですか？」

「八年ぶりだな……元気にしてたか？」

それには答えず、稟は楓と顔を見合わせる。こんな偶然があるものなのだろうか。

「どうしたんだ？」

彼の問いに稟が答える。
「いや、俺も楓も今朝同じ夢を見てな」
「はい、八年前のあの時の夢です」
「え？二人もなの？」
「ん？も、ってことは桜もか？」
桜が頷く。
「なんだよ、俺だけ仲間外れか？」
「それより、中へどうぞ。積もる話もたくさんありますし」
「いや、悪いけど……」
もうじき引越しの荷物が届く時間だ、という彼に、
「引越してきたんですか？」
「ああ、母さんがこの町に仕事の拠点を置くことになってな」
「連絡ぐらいくれればよかったのに」
「いやまあ、桜には連絡したんだがな。驚かせようと思って」
「そういうところ、変わってないな」

そんな会話の後、稟と楓は引越しの手伝いを申し出た。まあ人手はあったほうがいい、ということで最初から手伝うつもりだった桜に稟と楓を加えた四人で彼とその家族の新居に向かうのだった。

「なあ、柳」

「柳君」

「ん？　どうした？」

聞いてきた彼に稟と楓は笑顔で言った。

「お帰り」

「お帰りなさい」

それを聞いた彼も、

「ただいま」

笑顔で答えた。

その三（後書き）

桜の母親の名前は作者の独自設定です。
よく考えたら本編中ではまだ一日目……。
一日目はまだ続きます。

その四（前書き）

ここでようやくオリキャラの名前が出てきます。

その四

午後三時。

――俗に言う“三時のおやつ”の“おやつ”とはこの国の古い時刻表記で言う“昼の八つ”すなわち“八つ時”（午後二時～午後三時）に休憩をし、軽食をとる習慣（江戸時代頃から始まった）からきている。その頃はまだ朝夕の二回しか食事をとらなかった農民達の体力維持のためのものだった。仕事の合間のカロリー補給の意味合いが強く、甘い物や炭水化物が主である。一日三食が一般的になった現代では朝・昼・夕または晩の食事以外の間食全般をさすようになっている。――Ｗｉｋｉより

そんな薀蓄（うんちく）を披露して、彼は紅茶を口に含んだ。

現在、四人は彼の家の荷物を整理し、そして午後三時になったのを見て休憩しているところだ。ちなみに彼らが飲んでいるのは香り高いダージリンの紅茶――ではなく、コンビニで買ってきたペットボトル入りのもの（冷）を紙コップに注いだだけのものである。この家の家具はほとんどが造りつけであるため、荷物の量はそこまで多くはないとはいえ、率先して力仕事に精を出し、汗をかいていた稟にとっては最高級のワインにも等しいだろうが。

「柳は今日の夕飯はどうするんだ？」

楓に二杯目を注いでもらいながら、（私がやります、と言って聞かなかった）稟が訊ねる。

「まあ俺一人しかいないし、適当に外で済ませようかと思ってるが」

キッチンの整理を優先して行い、ガス・水道も問題なく使えるが（バス・トイレも同様）自分一人なため外食で済ませようとするよ

うだ。その言葉に稟は楓を見ると、彼女は微笑んで頷いた。

「じゃあ今日は芙蓉家で食べないか？　まだまだ積もる話もあるしな」

「いいのか？」

「ええ、かまいませんよ。桜ちゃんも一緒にどうですか？」

「うん、それじゃご一緒しようかな」

「それじゃありがたくお呼ばれしようか」

そんな会話を交わした後、四人は再び作業に戻った。

＊　＊　＊　＊

午後五時を過ぎた。キッチンの整理は終わり、リビング・ダイニングもあらかた終了、後は個人の荷物の整理のみとなったところで四人は作業を切り上げ、芙蓉家に向かっていた。

「稟」

「ん？　どうした」

前を歩く楓と桜を見ながら聞く。

「お前、楓と付き合ってるのか？」

「……いや、付き合ってはいない」

「にしては熟年の夫婦みたいなアイコンタクトっぷりだったが？」

休憩の際、彼を夕飯に誘った時のことを言っているのだろう。いくら幼馴染で同居しているとはいえ、見事なまでのツーカーぶり。勘繰られても仕方ないと言える。

「本当に楓とは何もないんだって」

「はいはい、そういうことにしとこう」

「まったく……」

出会ったばかりのあの頃、彼がこのようになるなど一体誰が予想しただろうか？　だが稟は知らない、いや気づいていないと言うほうが正しい。彼がこのようになった原因の多くは稟にある、ということを。そしてそのことを彼は深く感謝しているということを。

「稟」

「ん？」

今度はなんだ？　と言わんばかりの口調で答えた稟。しかし、彼の口からでたのは稟の予想だにしない言葉だった。

「すまなかったな、大変な時期に近くにいられなくて」

「……何言ってるんだ。親の仕事の都合だろう？」

「それでもだ。何かできることはあっただろうからな」

「……」

「悪いな、嫌なこと思い出させちまったか？」

「いや……そんなことはないさ」

それに、と続ける。

「桜とは手紙の遣り取りしてたんだろ？　自分からは言わないけど、桜も結構きつかっただろうからな」

当時、桜は稟と楓の間で板挟み状態だった。きっとつらい想いをしただろう。彼との手紙の遣り取りが支えになっていた部分もあるだろうことは稟にも察することができた。

「とはいえ、それも俺が一方的に打ち切ったんだけどな」

そう言って苦笑する。稟も楓もそのあたりの事情は今日聞いていたが二人に彼を責めることなどできなかった。肉親を失う悲しみやつらさを、二人ともよく知っているから。

＊　＊　＊　＊

「しかし、でかい家だな」

彼は芙蓉家の両隣に立つ、片や西洋風の館、片や和風の屋敷を見てそんな声をもらした。

「一体どういう連中が住んでるんだ？」

「まあ、すぐに分かると思うぞ」

「？」

頭に疑問符を浮かべた彼に三人は小さく笑った。

「あれ、鍵が……」

「楓？　どうした？」

「鍵が開いてるんです。ちゃんと戸締りしたんですが」

楓はよく“完璧超人”などと呼ばれるが、こと稟が関わることとなるとよくドジをすることで有名なのだが、戸締りを忘れるようなミスをすることはまず無い、と言っていい。

「リムちゃんが帰って来たんでしょうか？」

「楓ちゃん、シーッ！」

「リムちゃん？」

「ああ、いや、なんでもないんだ」

「と、とりあえず中に入りましょう」

そしてそこに待っていたのは彼のみならず稟達三人も驚く人物だった。

「み、幹夫おじさん！？」

「お、お父さん！？」

「やあお帰り楓、稟君。それに桜ちゃん、久しぶりだね」

「お、お久しぶりです」

芙蓉幹夫。

楓の父親であり、愛する妻、芙蓉紅葉と学生時代からの親友である土見鉢康・紫苑夫妻――稟の両親――を事故で失った後、里親として稟を引き取った人物である。ちなみに稟と楓の仲を全面的に応援しており、今年の六月半ばに三～四ヶ月間の長期出張に出る際には、『親公認だからがんばるように』という台詞を残している。

「おや？　君は……もしかして柳哉君かい！？」

「はい。お久しぶりです、幹夫さん」

「いや、大きくなったね。見違えるようだ」

「ありがとうございます。でも稟と楓が何か驚いているようですが」

幹夫によると出張先での取引が難航しており、しかも長引きそうなのでやることの無い自分は一時帰宅してきたのだという。連絡しなかったのは稟達を驚かせるためらしい。なんで自分達の周りには

こんな人達ばかりなのかと頭を抱える稟。自分のことを棚に上げている時点で稟も同類だということには気づいていないようだ。

「さあ、上がって。ちょうどお隣さん達も来ているところだよ」

幹夫のまさかの帰宅に動揺していた稟と楓はその言葉の意味に気づいていなかった。

＊　＊　＊　＊

芙蓉家のリビング。そこには二ヵ月半前からもはや当たり前になってしまった光景が広がっていた。鍛えられたがっしりとした体躯を和風の着流しに包んだ神族の男性と痩身だが鍛えられた肉体を持つ優男風の魔族の男性が杯を酌み交わし、茶色の髪と瞳を持つ神族の少女と蒼い髪に紅い瞳を持つ魔族の少女が苦笑しながらそれを眺め、紫色の髪と瞳を持つ神族らしき少女が無表情でスルメをかじるというシュールな光景。

「よう、稟殿に楓の嬢ちゃん。先に始めてるぜ」

「おや、そこにいるのは確か桜ちゃんと言ったね。稟ちゃんの知り合いには綺麗なお嬢さんが多いねえ。いいことだよ」

「稟くん、カエちゃん、お帰りー。あ、さっちゃんも来たんだ」

「稟様、楓さん、お邪魔しています。桜さんもお久しぶりです」

「……お帰り……いらっしゃい……」

そしてこの場では唯一事情を知らない彼が完全に硬直していた。
その視線は男性二人に向いていた。

「お？　見ねえ顔だな」

「うん？　私達の顔に何かついているかな？」

「……すみません。別にお二方をないがしろにするわけではありませんが……少しだけお待ち頂けますか？」

そう言うと彼は稟の肩をがっしと掴み、

「稟……正直に答えろ……」

「あ、ああ」

以外な反応に動揺気味の稟。

「何故（なにゆえ）に神界と魔界の最高権力者が芙蓉（ここ）家に居られるのか説明しろおおおお！」

叫ぶと同時に稟の肩をガクガクと容赦無く揺さぶる。

「ちょっ……まっ……これっ……しゃべっ……！」

さすがにこんな状態では話もできない。精神を落ち着けようと稟の肩を離し、呼吸を整える。

「だ、大丈夫ですか？　稟くん」

「柳ちゃんもちょっとやり過ぎだよ。分からなくもないけど……」

何事かと見守っていた二人の男性が言う。

「ふむ。彼はどうやら私達の事を知っているようだね」

「それに稟殿達とも関係あるみてえだな」

「とりあえず自己紹介といこう」

幹夫の一言でどうにかその場は収まった

＊　＊　＊　＊

「では改めまして……水守柳哉（みなかみりゅうや）と言います。稟・楓・桜の幼馴染で八年前までこの町に住んでいました」

「稟ちゃん達の幼馴染だったんだね。私の名はフォーベシィ。ここにいるネリネちゃんの父親で魔王もやっている」

「俺っちはユーストマ。そこにいるシアの父親で神王もやってる。ま、よろしくな！」

「えっと、一応神界の王女でリシアンサスって言います。長いのでシアって呼んでほしいっす」

「魔界の王女でネリネと申します。よろしければリン、とお呼びく

ださい」

「……プリムラ……よろしく……」

それぞれに自己紹介を終える。どうやら幹夫は既に自己紹介を終えているようだ。

「しかし、君は我々の事を知っていたのかい」

「おう、それは俺っちも気になってたところだ」

柳哉は答える。

「ええ、先の三世界平和式典の席で遠目からですがご尊顔を拝謁させていただきました」

「そうだったか。てえかおめえさん、そんな堅っ苦しくすんなよ。肩がこっていけねえ」

「そうだね。私達は確かに王ではあるけれど、今はプライベートだからね」

「……了解しました。それでは、ユーストマ殿、フォーベシィ殿とお呼びしても？」

「おう、かまわねえぜ」

「ふむ、なかなか新鮮だね」

柳哉の意図を察したのか承諾する両王。

「えっとそれで……」

残る三人の少女を見て微笑む柳哉。

「俺の事は好きに呼んでもらって構わないから」

「んー、じゃあ柳哉くんって呼ばせてもらうっす」

「それでは、柳哉さん、と呼ばせて頂きますね」

「……柳哉……」

とりあえず三人からの呼び名が決まったが……。

「あー、俺は呼び捨てにさせてもらってもいいかな？　もちろん嫌ならやめるけど」

どうにもちゃん、とかさん、とか名前の後につけるのは苦手で……あと、同年齢っぽいし。

「あ、構わないっすよ」

「はい、わたしもです」

「……構わない……」

「あ、あとネリネはフルネームでいいか？　稟と混同しそうだし」

「あ、はい」

「よし。そんじゃ、乾杯といこうぜ！」

「いいね。柳ちゃんは洋酒、日本酒どちらがいいかな」

「いや魔王のおじさん、未成年にアルコールを勧めないでくださいよ！」

至って常識的な事を指摘する稟だが、

「そうですね、今日は日本酒な気分です」

「っておい柳！？」

柳哉の台詞に驚愕し、

「お。柳哉君、いける口かい？」

「幹夫おじさーん！」

幹夫の台詞に絶句し、

「おう、ちょうどいいポン酒があるぜ」

神王の台詞でとどめを刺され、がっくりと膝をつく稟。

「稟君、大丈夫ですか？」

「柳ちゃん、お酒飲めたんだ」

「えっと……どうしましょう」

「あはは、なんか収拾つかなくなりそう……」

「……」

ドン引きするお酒飲めない組だった。（プリムラ除く）

その四（後書き）

長くなったので分割します。
稟の母親の名前も独自設定です。

その五（前書き）

ようやく一日目が終了です。

その五

「それでは、懐かしき友との再会と新しき出会いに……」

「「「「「「「「「「「「乾杯！」」」」」」」」」」」」」」

魔王の音頭とともにグラスが合わされる。神王・魔王・幹夫・柳哉の四人は酒、他の六人はジュース又はウーロン茶というラインナップである。なお、プリムラが酒に手を出そうとしていたが、稟と楓により止められていたのは余談。

「おお、柳殿いい飲みっぷりじゃねえか」

「付き合いとかで飲む機会が多かったんで」

「うんうん、美味い酒が飲めるというのはとてもいいことだよ」

「いや、でも柳哉君、本当に大きくなったなあ」

さっそく酒飲みの間でそんな会話が交わされていた。それを眺めながらため息をつく稟。いつもなら酒を勧められる立場を交代してもらったようなものだが、その相手が自分と同年齢の幼馴染だということははたして喜んでいいことなのだろうか？　というか、あの中に混ざっていてもまるで違和感のない柳哉の姿にちょっと頭痛がしてくる稟だった。

「えーと、なんか聞いてたよりずっと……なんていうか……こう……」

「そうですね……なんと言えばいいか……」

「シア、ネリネ、正直に言ってくれても全然構わないからな」

「柳君、何かいろいろはっちゃけてしまったような……」

いろいろとあきらめ気味の稟に、無自覚に遠慮のない楓の台詞が続く。

「で、でも、根っこの部分は変わってないよね」

桜のフォローも若干自信がなさげだ。と、そこへ声が掛かる。

「よう稟、聞いたぞ？　なんでもシアとネリネの二人と婚約してるそうじゃないか」

「婚約なんてまだしてない！」

声高に否定する稟だが、

「ふむ。まだ、ということはいずれする、ということか？」

「そうなんですか稟君！？」

「そうなの稟君！？」

幼馴染二人が食いつき、王女達が赤面する。

「いや、そうじゃなくてな！？」

「じゃあどうなんだよ」
「いや、だから、ってお前もう酔ってるだろ！？」
どうにか話をそらそうとする稟に苦笑する柳哉。
「まあ確かに少し酔ってはいるがな」
「酔ってない、とは言わないんですね」
「ん、酔っ払いの“酔ってない”発言はまるで当てにならないしな」
自分で言うか、というツッコミはさておき。
「稟、お呼びだ。とっとと来い」
見れば、三匹の親馬鹿（神王・魔王・幹夫）がこちらを見て笑っていた。
「っておい！　引っ張るな！　ちゃんと自分で歩くから！」
「つー訳で、ちょっと稟を借りるぞ」
稟は引きずられていった。
「お手やわらかにー」
「お父様、あまり稟様に負担はかけないようにしてくださいね」
「り、稟君。がんばってくださいね」

「あはは……」

ちなみにこの間、プリムラはただ黙々とつまみを口に運んでいた。

＊　＊　＊　＊

しばらくして、柳哉が楓達の方へ来た。三人の相手を稟に任せてきたようだ。押し付けた、とも言うが。

「どーも」

「あ、柳ちゃん。あっちはもういいの？」

「ああ、近況の報告とかは済ませたし、それにまだあまり話もしてないしな」

そう言ってシア・ネリネ・プリムラを順に見る。たしかに自己紹介の時以来、三人とはほとんど話していない。

「というかプリムラ……はともかく、シアとネリネはあんまり驚いてなかったな。俺のこと」

「実は今朝、登校中に稟君と夢の話をしていた時に……」

「うん、教えてもらった」

「でもまさかその日のうちに、とは思いませんでしたけど」

楓の言葉を引き継ぐシアとネリネ。
「夢って俺を仲間はずれにして見たっていうやつか？」
不満げなふりをして言う。
「あはは、別に仲間はずれにしたわけじゃないんだけどね」
「ま、いいけどさ」
「ところで柳君は学校はどうするんですか？」
楓がたずねる。
「ああ、それも話そうと思ってな」
と、グラスの中身を飲み干しながら言った。
「新学期からはバーベナ学園の高等部二年に編入するから」
「そうなんですか」
「一緒のクラスになれるといいね」
そう言った二人だが、
「まあ、あのお二方がこれを知った以上、別のクラスになることはまずないだろうけど」

稟を交えて騒ぐ親馬鹿どもを横目にしながらの柳哉の台詞に苦笑いを浮かべた。額に汗が浮いていたのはきっと気のせいではないだろう。

水守柳哉。彼はこの短時間で既に神王・魔王の性格をある程度把握したようだった。

「そういえば柳ちゃん」

「何だ？」

「うん、妹さんはどうするのかなーって」

「ああ、そうだ。菫（すみれ）はストレリチアの中等部三年に編入するから面倒みてやってくれるか？　高等部と中等部じゃちょっと難しいかもしれんが」

「あ、そうなんだ」

「妹さんがいらっしゃるんですか？」

ネリネが聞く。

「ああ、菫って言うんだ。よかったら仲良くしてやってくれ」

「菫ちゃんに会うのも楽しみですね」

「写真とかないの？」

「ああ、見るか？」

「うん、見たい見たい！」

そう言うシアに柳哉は携帯電話の写真機能で撮った画像を見せる。

「わー可愛い」

「あ、見せて見せて」

「本当に可愛いですね」

シア・ネリネ・桜が群がる。楓はこっくりこっくりと船を漕いでいたプリムラに膝枕をしているため動けなかった。

＊　＊　＊　＊

三時間程で宴はお開きとなった。主催者達（神王と魔王）はもう少し騒ぎたかったようだが、明日は柳哉の家族が到着することや引越しの荷物の整理に編入手続きなどがあるため、涙をのんだようだ。

「それでは幹夫さん、明後日にでも」

「ああ、決まったら連絡してくれ」

「それではおやすみなさい」

「おやすみ」

幹夫と挨拶を交わし、桜と共に歩き出す。桜を家まで送り届ける

ためだ。神王・魔王両父娘と楓はそれぞれの自宅前で彼らを見送っていた。稟は酔いつぶれ（結局飲まされた）プリムラは既に自室のベッドで就寝中だ。

「柳ちゃん、さっき幹夫おじさんと話してたことって……」

歩き出して少ししたところで桜が聞いてきた。

「ああ、墓参りの事。土見家と芙蓉家の」

「そうなんだ」

「あれっきりだからな」

実は水守家は八年前、幹夫から事故の話を聞いた翌日から数日だけだが光陽町に帰ってきていた。もちろん弔問のためだが、同時に葬儀の手配や弔問客への対応、さらには事故に関しての警察の事情聴取などを一人でこなさなくてはならない幹夫の手伝いのためである。実際には八重家や近所の人も手伝ってくれたため一人ではなかったのだが、それでも幹夫にとってはありがたいことだった。

「ところで桜」

「え？」

言葉を発したのは柳哉のほうだったが、

「……いや、何でもない」

「？」

結局その会話はそこで終わった。八重家がもう間近でもあったこともあるが。

「それじゃおやすみ、桜」

「うん。おやすみ、柳ちゃん」

桜が家に入ったのを見届けた後、柳哉は歩き出す。

（稟と楓……もう仲直りしたって話だが……）

ならば二人の間に感じたこの妙な違和感は何なのか。

（まあ、今は見守るしかないか、それに……）

もう一つの懸案事項に想いを馳せる。

（まさか、とは思うが……）

もしそうなら、その時自分はどうするべきか？

（なるようにしかならない、か）

そう結論し、全体の四分の一ほどが欠けた月を見上げる。前とは違う。今、自分は彼らの近くにいる。それに、

――忘れないで。キミは独りじゃないんだから――

“彼女”の言葉を思い出す。不安はもう、消えていた。

＊　＊　＊　＊

時間は少し戻る。

「で、まー坊。どう思う？」

「現時点では情報が少なすぎるね。他人の空似、ということも充分ありうる」

娘達を先に家に戻らせ、両王は話し合っていた。その顔に浮かんでいるのは稟達の知る親馬鹿のそれではなく、一世界の最高権力者としての表情だった。

「少し探りを入れてみるか」

「それには賛成だけど……」

「？　何か問題でもあるのか」

渋い表情の魔王が言う。

「彼はとても勘が鋭い。でもそれ以上に……」

「ああ、それは俺も感じた」

「とりあえず、事は慎重に運んだほうがよさそうだね」

「……そうだな」

それでなくとも今は大事な時期なのだから。

そんな彼らを、柳哉も見上げていた月の明かりが照らしていた。

その五（後書き）

最後の会話は今後の伏線になっています。
……ちゃんと回収できるようにがんばります。
水守家は酒に弱い家系ですが、柳哉は珍しく酒に強いという設定です。

その六（前書き）

タグに“要原作知識”を追加しました。

その六

――翌日――

「ここ、か」

そうつぶやき、柳哉は来月から通うことになる校舎を見上げた。

国立バーベナ学園。

五年前に開校したばかりで歴史・建物・設備のいずれもが新しい。十年前、全人類を驚愕させた“開門”をきっかけに世界は大きく変貌し、それに対応するために急遽作られたのがこの学園だ。神族・魔族・人族の三種族が同じ空間で共に勉学に励み、交流を深めている。授業内容はほとんどが普通の学校と同様だが、歴史では人界だけではなく神・魔界のそれを習い、また魔法や錬金術について学ぶ魔法学など独自のものがある。似たような学園は各地で作られつつあるが、そのすべての見本となっており、まさに三種族共存のモデルケースであると言える。

柳哉がいまだ夏休み中のこの学園を訪れたのは転入手続きのためだ。既に必要な書類等は送ってあり、あとは残るいくつかの手続きや購入した教科書や制服の受け取り、そして担任との顔合わせを残すのみだ。

「あのお二方が無理なこと言ってなきゃいいけどな……いや、いまさらか」

昨夜の宴会で聞いたこと――親馬鹿共が娘達の恋の成就のためにごり押ししまくった――を思い出す。この学園の上層部は非常に胃の痛い想いをしたことだろう。いや現在進行形でか。そんな益体(やくたい)も無いことを考えながら柳哉は学園の受付に向かった。

＊　＊　＊　＊

受付で名前と用件を告げ、職員室へ向かう。その場で待つ、という選択肢もあったが却下。日差しも強いし。

「失礼します。二学期からこちらに転入する水守と申しますが、紅薔薇教諭はいらっしゃいますか？」

ノックをして入室し、そう告げる。

「ああ、こっちだ」

長身の女性教師が手を挙げて答える。

（美人さんだな。というかこの人が担任だと生徒は色々と悩ましいことになるんじゃ……）

主に思春期的な意味で。

「何か今、不愉快な電波を受信した気がするんだが……」

「気のせいでは？」

危ない。かなり勘が鋭いようだ。ただ単に言われ慣れているだけかもしれないが。

「改めまして、水守柳哉と申します。ご指導・ご鞭撻（べんたつ）のほどよろし

くお願いいたします」

頭を下げる。

「あ、ああ。私が君の入る２－Ｃの担任、紅薔薇撫子だ。よろしく」

「？　どうかされましたか？」

「ああ。いや、ちょっとな」

言いよどむ撫子。心当たりは……ありすぎるほどあった。

「すみません。身内、というわけではありませんが、あのお二方が……」

「どういう関係なんだ？」

言葉を遮りながら若干強い口調で問う撫子。

「あのお二方とは昨日が初対面だったんですが、何故か気に入られたようです。むしろ関係があるのは稟と楓のほうでして……二人とも紅薔薇教諭のクラスなんでしょう？」

「ああ……つっちーと芙蓉から聞いたのか？」

「いえ。ただ昨日のお二方の様子から見て、こうなるんじゃないかなーと予想はしていました。あとあの二人とは幼馴染です」

八年も前のことですけど、と付け足す。

「君は変わっているな。どこがどう、というわけではないんだが」

「えーと、褒められてるってことにしときます」

「まあなんにせよ、だ。問題だけは起こさないでくれ。無駄かもしれんが」

「……善処します」

疲れたように言う撫子。その姿にどこか哀愁が漂っていたのはきっと気のせいだろう、と思いたい。

＊　＊　＊　＊

「それではまた新学期にな」

「はい、よろしくお願いします」

諸手続きを終えた後校内を簡単に案内し、教科書や制服を渡したところで今日の用件は終了。柳哉は撫子に挨拶し、帰っていった。次に会うのは新学期だ。

「しかし、本当に不思議な奴だ」

撫子は一人ごちる。その理由は先程まで交わしていた会話にあった。

「歳に似合わないあの落ち着きぶり……というよりは老成ぶり、か

？」

普段から接している生徒達はみな年下であるため、どこかこちらが手加減して話さなければならないものだが、彼との会話ではそれがほとんど必要なかった。それはつまり彼の精神年齢が実年齢よりもかなり上であることを意味する。事前に知っていた“事情”故のことかとも思ったがそれだけでは根拠としては弱い。

「水守柳哉、か……」

“あの”土見稟と芙蓉楓の幼馴染。彼の様子を見る限り、八年も離れていたとはいえその仲は良好のようだ。ならばそこまで心配することもないだろう。さらにもう一人、頼りになる幼馴染がいるようだし、どこか危なっかしい稟と楓だが彼らが近くに居れば安心だろう。特に根拠はないがそう思えた。

＊　＊　＊　＊

「ただいま」

「お帰りなさい」

帰宅した柳哉は玄関で妹と遭遇した。どうやら夕飯の買い物に行くようだ。

「片付け、終わったのか？」

「はい、だいたいのところは」

「そうか。今夜から“あれ”を再開するぞ。いい場所が見つかった」
「分かりました。時間はいつも通りですか？」
「ああ」
彼らと彼らの関係者にしか分からない会話を交わした。

＊　＊　＊　＊

「お墓参りのことなんだけど」
「何か都合でも悪くなったんですか？」
夕食後、母親である水守玲亜（みなかみ れあ）の言葉に長女であり柳哉の妹、水守（みなかみ）菫（すみれ）が返す。
「ううん、荷物の整理もほぼ終わったし、明日の午前中に行こうかと思って」
「学院には午後から行きますから大丈夫ですよ」
「それじゃ、幹夫さんに連絡しとこうか」
「いいわ、私が連絡するから」
そう言って玲亜は電話に向かう。

（桜にも連絡しとくか）

桜と同じストレリチア女学院に転入する菫を気に掛けていて欲しいと昨日頼んだこともあるし、顔合わせをしておくべきだろう。そう思って柳哉は携帯電話を手に取った。

＊　＊　＊　＊

光陽町内のとある寺。その中にある墓地にいくつかの人影があった。稟に幹夫・楓の父娘、椿・桜の母娘、そして水守家の三人と住職の九人だ。隣接して立っている土見家と芙蓉家の墓前には新しい花とウイスキーのボトル、板チョコに草餅などが供えられ、辺りにはお経が響いている。水守家の三人は心の内で近況報告をしながら手を合わせていた。やがて読経が終わり、住職は一礼して本堂へ戻って行った。しばらくの間、思い出話に花が咲く。再会の挨拶は既に済ませていた。昼近くになり解散しようとしていたその時、水守兄妹が“それ”に気づいた。

「大丈夫ですよ」

「それに、稟も楓も独りじゃありませんから」

誰もいない方に向けて二人は言った。知らない人が見たら首を傾げるだろう。しかし目には見えないが二人にはしっかりと“そこ”にいるのが感じられた。今なお稟と楓を見守り続ける三人の存在を。

その六（後書き）

玲亜・菫の外見については次回以降にて。

その七（前書き）

原作の台詞等をそのまま使用している部分がいくつかあります。

その七

八月三十一日。

世間一般では八月の最終日という認識でしかないが、一部の学生達から見れば“夏休みの最終日”という重要な日である。なぜかと言えば……。

「よくぞ集まってくれた戦友たちよ。　信じていたぞっ！　きっと終わらせていないとっ！」

「当たり前じゃない土見くん！　私達、仲間よ！」

「誰一人、仲間を見捨てるなんてことはないッス！」

ガッチリと固い握手を交わす三人。そこには、少しの迷いもない真実の絆があった。

「まあ、結局は負け犬の集まりなわけだけどね」

芙蓉家ではそんなやり取りがなされていた。要するにいまだ手付かずの夏休みの課題を片付けるために集まったのである。おそらく全国各地で似たような光景を目にすることができるだろう。これもある意味、夏の風物詩といえる。

ピンポーン、というチャイムの音。

「あ、私出ますね」

そう言って楓が玄関に向かう。

「誰か来たの？」

そう聞くのは右目が赤、左目が青というオッドアイと残念なまでの貧乳が特徴の少女、麻弓＝タイムだ。ちなみに成績はほぼ常に低空飛行を続けている。一学期の期末試験の結果によって夏休みのほぼ半分を奪われたのは記憶に新しい。

「いや、おそらくネリネだろ」

いくら楓と言えど一人では厳しかろう、と応援を頼んだようだ。

「それは強力な援軍ッス！」

「三人もの美少女に囲まれる一日……夏休みの最後に相応しい、素晴らしい青春の一ページを刻めそうだね」

そんな煩悩丸出しの台詞を口にするのは緑葉樹。『女の遅刻には空より広く、男の遅刻には猫の額の心で挑め』をスローガンとして掲げるほか、『全世界の女性の宝』を自称する、三度の飯より女好きな少年である。そんな彼だが、学園でも最高峰の頭脳を持っているあたり、世の中とは分からないものだ。

「どーせその中には私は入っていないんでしょ？」

「当然」

麻弓の問いに樹が答える。怒りでぷるぷると震えだす麻弓。ちなみに揺れはない。何が？と聞いてはいけない。

外でやれ、とあきれ気味に言う稟に声が掛かった。

「なんというか……予想通りだな」

「柳！？」

振り返った稟の視線の先にいたのは柳哉だった。

「誰？」

「誰なんだい？」

「そういえば二人は初めてだったな。こいつは……」

紹介しようとする稟だがそれを制して口を開く。

「水守柳哉だ。稟と楓の幼馴染で八年前までこの町に住んでた。まあよろしく」

「あ、ええと麻弓＝タイムって言います。土見君達とはクラスメイトで……」

「麻弓、どうしたんだい？　そんな猫をかぶったような声を出すなんて。気持ち悪いよ？」

どもり、なおかつ丁寧な口調な麻弓に樹が余計な事を言った。

「えびっふりゃー！」

「あ、新しい世界が見えるっ、かもしれないっ！？」

「なあ、なんだこれ？」

「気にするな、いつものことだ」

で、どうしたんだ？　と聞く稟。ある程度想像はつくが。

「こうなってるんじゃないかなと思ってな。もっとも、さすがにアレは想像しちゃいなかったが」

どこからともなく取り出されたロープで文字通りエビフライ状態になっている樹とそれを満足そうに眺める麻弓。

「あ、あの……」

柳哉の後ろから聞こえてくる声、ネリネだ。どうやら一緒に来たらしい。正しくは、芙蓉家の前で鉢合わせただけなのだが。

＊　＊　＊　＊

「まあ、結局予想通りだったわけだ。楓はともかく稟が終わらせてる可能性は低いと見てたし」

「それはともかく、声も掛けてないのに自動的に来るとは、空気の読み過ぎもいいとこだろう」

「いやあ、夏休み最終日といえば恒例だしね。多分あつまってるんじゃないかと思っただけさ」

柳哉と稟の会話に樹も入ってくる。自己紹介は先程済ませた。

「ふむ、この分なら俺も力になれるだろう」

楓から借りたノートを閉じて柳哉が言った。バーベナ学園の授業の進み具合を確認していたようだ。

「もしかして柳哉くんって頭いい？」

「……シア。ちょっと表出ようか？　なに、少し“お話し”するだけだ」

「えっ？　そうなのですか？」

「お前もか、麻弓」

彼の通っていた風ヶ丘高校は同市にある聖祥学園高等部にこそ劣るものの、かなりの優良校であり、また文武両道をモットーとしていた。そんな学校で常に上位の成績を修めていた柳哉である。このくらいなら問題なかった。

「あはは……ほら、稟くんの幼馴染だから……」

「いや、分からなくもないが……」

「って分からなくもないのか！？」

稟の反論。しかし、

「言い訳がきく状況か？」

と、課題の山を指す。
「申し訳ございませんでした」
「あ、あの稟様。私もお手伝いしますから」
「そうですよ。がんばりましょう、稟君」
「……二人の優しさが心に染みるよ」
稟のフォローに入る楓とネリネ。
「モテモテだなあ、稟」
「稟、殴っていいかい？　俺様の拳が赤く光ってうなるぐらいに！」
「却下だ！」

＊　＊　＊　＊

「ところで」
「ん、なんだい柳哉」
「お前達も稟と同じクラスなんだろう？　さっき麻弓が言ってたけど」
「ああ、そうだよ。それだけでなく、シアちゃんにリンちゃん、楓

ちゃんというバーベナ三大プリンセスが揃う、という素晴らしいクラスだよ。男共はどうでもいいけど」

「正直だねえ」

稟・シア・麻弓の三人がネリネ・柳哉・樹の力を借りて課題を片付けている合間にそんな会話を交わす。ちなみに稟にはネリネ、シアには柳哉、麻弓には樹がサポートについている。この組み合わせに樹はひどく不満をもらしていたが、くじ引きの結果であるためおとなしく従っていた。楓は後ろ髪を引かれながらもプリムラと一緒に昼食の準備中だ。

「新学期からは俺もそこに加わるからな、まあよろしく頼む」

「え？　水守君うちのクラスに入るの？」

「ああ、担任は紅薔薇撫子教諭だろう？　転入手続きの時に聞いた」

「ふむ、それはおかしな話だね。俺様達のクラスにはこの夏、シアちゃんにリンちゃんの二人が転入してきている。この状況でさらに転入生がこのクラスに入るのは不自然というものだね」

「無理を通せば道理が引っ込む。ってことだ」

どういうことだい？　という問いに返す。

「要するに権力という奴さ。この町に帰って来たその日に芙蓉(ここ)家で二世界の王様方と出会ってね、なんか気に入られたらしい」

麻弓と樹が理解する。どうやらあの王様達は娘達のクラスメイト

の間でもよく知られているようだ。

「あはは……」

「えっと……すみません」

「謝ることはないって。おかげで皆と同じクラスになれるわけだから。むしろ感謝してるくらいだ」

二世界の王女達の顔に笑顔が浮かんだ。

＊　＊　＊　＊

「終わったー！！」

「終わったッスー！！」

夕暮れ時、芙蓉家に歓声が響く。

「おめでとうございます、麻弓さん」

「おめでとうございます、シアちゃん」

「やれやれ、俺様への感謝の言葉くらいあってもいいと思うんだけどね。まあ無理か、麻弓だし」

余計なことを言った樹が麻弓のかかと落としを食らっていた。雉(きじ)も鳴かずば撃たれまいに。

稟はというと二人より一足早く課題を終え、ソファーに突っ伏していた。そんな稟をプリムラがちょんちょん、と突っついている。

「さてさてそれでは、水守君への質問ターイム！」

「いやそれは明日にしようぜ？　そろそろ夕食時だし」

麻弓の発言に若干引き気味の柳哉。課題が無事終わったことでハイになっているようだ。

「あれ？　もうこんな時間なのですか？　うむむ……」

どうやら何か事情があるようだ。

「皆さん、夕飯はどうしますか？」

とそこへ楓が声を掛ける。

「あー、私は今日は家に帰るッス」

「はい、私もです。　せっかくのお誘いですが」

王女二人が返答する。

「楓ちゃんの手料理ならば喜んでいくらでも！って麻弓なにをすっ……」

「はいはい、えびふらいえびふらい。あ、楓。私達も帰るから」

こちらも帰るようだ。若干一名、不服なようだが。

「ん、俺も帰るわ。誘ってくれてありがとな」

芙蓉家の食卓は今夜はいつも通りのようだ。

「それじゃ皆、また新学期に、と言っても明日なんだけどな」

柳哉の言葉を皮切りにそれぞれが家路につく。シアとネリネはすぐ隣の家に、麻弓も自宅に向けて歩き出す。エビフライ状態の樹を引きずっているのは……見なかったことにしよう。

「騒がしくなりそうだ」

そうつぶやいて、柳哉も家路につく。明日が楽しみだ。

その七（後書き）

ちょっと端折り過ぎな気もしますが、大目に見てやってください。
次回からは新学期です。

その八（前書き）

最後にある事実が発覚。
二つの意味で反響が怖いです。
あと今までで最も長いです。

その八

早朝、六時前。朝の日課を終え、家に戻った二人を玲亜が迎える。

「あら、今朝はもう終わり？　少し早いようだけど」

おはよう、の挨拶に続いて言うと柳哉も、

「ああ。今日は初日だし、早めに切り上げた」

挨拶をしつつ返す。

「お母さん、朝食の用意をしてくれたんですか？」

やはり挨拶をしつつ玲亜に聞いたのは菫だ。

「ええ。少し早く目が覚めたものだから」

水守家で朝食を担当するのは基本的に柳哉か菫だ。別に玲亜が料理が苦手という訳ではなく、仕事の都合上、家にいる時間が不定なせいだ。

「それではシャワーを浴びるのは後にしますね」

そのまま食卓につく。三人揃って食事ができる機会は前述の理由からあまり無いため、三人とも大切にしていた。

＊　＊　＊　＊

朝食後、菫の後にシャワーを浴びて出るとストレリチア女学院中等部の制服に身を包んだ菫と鉢合わせる。

「もう行くのか」

「はい、桜さんが迎えに来てくださいましたから」

それを聞いて玄関に向かう。

「おはよう、桜。ありがとな、わざわざ来てもらって」

「あ、柳ちゃん。おはよう」

別に気にすることないよ、と微笑む桜。

「それではお母さん、兄さん、行ってきます」

「行ってらっしゃい。桜ちゃん、菫をお願いね」

いつの間にやら玲亜も玄関に来ていたようだ。

「はい。ええと……」

「別に、行ってきます、でいいと思うぞ？」

なにやら逡巡（しゅんじゅん）した桜に柳哉が言った。

「うん。それじゃ、行ってきます」

「行ってらっしゃい」

そんなやりとりの後、桜と菫は学院へ向かった。

「さて、俺も準備するかな。母さんは今日は仕事は？」

「今日は昼前からだから少しのんびりしてるわ。それにしても……」

と、玲亜が笑う。いつもの柔らかな笑みではなく、にやり、と形容するしかない笑みだ。

「なんだ、その嫌な予感しかしない笑いは」

「桜ちゃん、可愛くなったわよねぇ」

「確かにな。先に言っとくけど桜は稟のことをずっと思ってるみたいだが？」

一応釘を刺しておく。

「あらら、ならしょうがないわねえ。他にいい娘いないの？　楓ちゃんとか」

「楓は桜と同じだし、他にいなくもないけどな。まあ、みんな稟に行ってるし」

前に会った王女二人を思い出して言う。

「って稟君どれだけモテてるの？」

「さあ？」

確かに稟の現在の境遇は異常としか言いようがない。

「でも……」

「まだ何かあるのか？」

若干面倒になりながら玲亜を見る、しかしそこにあったのは純粋に我が子を心配する母親の顔だった。

「分かってはいるんだけどね。でも……」

「はい、ストップ」

続く言葉を遮る。

「心配してくれるのは嬉しいけどさ、こればかりはそう簡単にはいかない。母さんにもそれは分かるだろ？」

「まあ、ね……」

さて、と柳哉が伸びをする。この話はここまで、ということだろう。

「それじゃ、俺も準備するかな。初日から遅刻なんて黒歴史は残したくないしな」

そう言って柳哉は自室に向かった。

＊　＊　＊　＊

柳哉が家を出た後、水守家のリビングには玲亜の姿があった。

「草司さん……」

写真に写っている逞しい体躯をした男性に語りかける。三年前に亡くなった彼女の夫、水守草司（みなかみ そうじ）の写真だ。そのまま、物思いに耽る。

あの事故以来、家族を支えるため必死になっていた。それゆえに気づけなかった。特に柳哉に起きていたことに。“彼女”のおかげで事なきを得たが、もしそうでなかったら、と思うと寒気が走る。

「私は、母親失格かもしれない……」

子供たちの前では決して口に出さない弱音がこぼれた。その時だった。

（何言ってるんだ。最初っから完璧な母親なんかどこにもいやしないぞ？　それにお前の想いはちゃんとあいつらに届いてるぞ。何せ俺とお前の子供達なんだからな）

はっとして周囲を見回す。誰もいない。でも、今の声は……。

（そうね、大切なのは“同じ失敗を繰り返さない”ことだものね）

生前、夫がよく言っていた台詞だ。よし、と自分に気合を入れる。気が付けば柳哉が家を出てから一時間近く経っている。私もそろそ

ろ準備をしなくては。
そんな玲亜に写真の中の草司が微笑んだように見えた。

＊　＊　＊　＊

その日の朝、芙蓉家には意外な来客があった。
「土見くーん、楓ー、おっはよー」
「麻、麻弓ちゃん！？」
「ど、どうしたんだ麻弓！？　もしかして夏休みが終わってしまったショックでどっかおかしくなったか！？」
「……稟……楓……うるさい……」
麻弓が芙蓉家を訪れるのは別に珍しいことではない。昨日も来てたし。問題は時間である。現在、午前八時。ほとんどの場合、学園にはぎりぎりの時間に登校する麻弓がこんな時間に芙蓉家に来るなど前代未聞だ。
「つ・ち・み・くーん。そーんなこと言うとー、次の学校新聞にー、とーんでもない記事が載っちゃうかもよ？　“衝撃！！　土見稟の爛れた朝・芙蓉家編”　みたいな？」
「完全に捏造じゃねーか！」
「事実にして欲しい？」

そう言う麻弓の背中からはロープのようなものが見え隠れしていた。下手を打てば樹と同じ目に遭う。

「申し訳ございませんでした」

「素直でよろしい」

オチもついたところで楓が口を開く。

「でも、本当にどうしたんですか？」

「ほら、昨日時間がなくて結局ほとんど話聞けなかったじゃない？それで今日は土見くん達と一緒に登校するんじゃないかと思って」

柳哉の事だろう。二人の顔に理解が浮かぶ。要するに学園につくまでに独占取材をするつもりなのだろう。実に麻弓らしいと言える。とそこへチャイムが鳴った。来たようだ。玄関にいた麻弓がドアを開ける。

「おはよう！　そして独占インタビュー！　なのですよ！」

「おはよう。で、何事？」

さすがの柳哉も少し引いているようだ。

「なるほどね。まあ俺は構わないけど」

事情を聞いた柳哉が苦笑しながら答える。

「それでは、と」

そして麻弓によるインタビューが登校しながら始まった。

＊　＊　＊　＊

――誕生日は？

――１月２１日

――血液型は？

――Ｏ型

――家族構成は？

――母と妹

――趣味は？

――釣り・読書・映画鑑賞・散歩・家事全般・他多数　あと稟いじり

「おいちょっと待て！」

スルー。

「おいいっ！？」

――好きな食べ物は？

――甘い物　よく以外だって言われる

――嫌いな食べ物は？

――辛い物は苦手　あとは基本的に無い

――好きな女性のタイプは？

――ロリコンではない、とだけ言っておく

――巨乳派？　貧乳派？

――特にこだわりは無い

――いわゆるエロ本は何冊持ってますか？

――ノーコメント

――初体ｋ――いい加減にしろ

でこピン。

――痛っ……えーと今、恋人はいますか？

――……いない

――今の間は？

――もう一発いっとくか？

――ごめんなさい

＊　＊　＊　＊

「まあこんなところかな」

「もういいか」

「ご協力感謝！　なのですよ。　でもでこピンはちょっと……」

「当然の報いだろう？」

シアとネリネを芙蓉家の前で加えた一行が賑やかに歩いていると、自然に周囲の登校中の生徒達の視線を集めることになる。ちなみにシアとネリネも麻弓がいることに驚いていたが割愛する。

「目立ってますね」

ネリネの台詞に柳哉が答える。

「見知らない顔が混じってるからだろうよ」

「それだけじゃないと思いますけど」

「もしかして、土見くん二号？」

「自画自賛っていうのはあんまり好きじゃないけどな、お前達には及ばないがそれでも人目を引く容姿をしている自覚はあるぞ？」

「……違ったみたいッス」

「どういう意味だ？　シア」

自覚なしのフラグメイカー。その名を土見稟。

そんな会話をするうちに学園が見えてきた。何か余計なものと一緒に。

『土見稟！』

『今日こそは！』

『貴様に！』

『制裁を！』

『下さん！』

「何だあれ」

バーベナ学園の校門前、二十人ほどの学生達が終結していた。なんか変なマスクを装着して。

「土見くんに嫉妬する親衛隊の面々なのですよ」

麻弓が答える。

「親衛隊って……シアとネリネのか？」

「楓のもいるけどね。ちなみに非公認」

バーベナ学園には本人非公認の親衛隊が存在する。その中で最も古い歴史を持ち、なおかつ最大の勢力を誇るのが楓ちゃん親衛隊、ＫＫＫ――正式名称“きっときっと楓ちゃん”――である。そして今年の夏、シアとネリネが転入したことによって新たな親衛隊が発足した。それがシアちゃん親衛傭兵団、ＳＳＳ――正式名称“好き好きシアちゃん”とリンちゃん突撃護衛隊、ＲＲＲ――正式名称“らんらんリンちゃん”である。どこの秘密結社か。というか、護衛隊が突撃していいのだろうか？

「なるほど。それで稟はその三大組織のブラックリストのトップに挙げられている、って訳か」

「そういうこと」

そんな会話を交わしていると、この集団のリーダー格らしい男子生徒が言い放った。

「土見稟！　楓ちゃんはおろかシアちゃん、リンちゃんにまでその魔の手を伸ばした報いを今日こそ受けるがいい！　皆の者、行くぞ！」

『楓ちゃんバンザイ！』

『シアちゃんＬＯＶＥ！』

『リンちゃんハァハァ』

どうやら混成部隊のようだ。というか明らかにおかしいのが混じっている。呆れる柳哉だが次の瞬間、表情を引き締めた。

「稟様に仇なす者は許しません！」

ネリネだった。その手にはバスケットボール大の魔力球ができている。どうやら彼女は稟の事に関しては沸点が低いようだ。親衛隊の表情に恐怖が浮かぶが、その時だ。

シュウウ、という音と共に魔力球が掻き消えた。

「え？」

ネリネは何が起きたのか、と困惑する。同時に柳哉が自分のすぐ隣に立っていることに気づいた。

「ネリネ」

「え……あ痛っ」

先程麻弓にも食らわせたでこピンを今度はネリネに使用する。痛みを堪えながら柳哉を見た瞬間、痛みを忘れる。そこにあったのは柳哉の恐ろしく真剣な表情だった。

「あ、あの……」

「稟、いつもこうなのか？」

ネリネを無視して稟に聞く。

「あ、ああ」

そうか、と頷き再びネリネと向き合う。

「ネリネ、今自分が何をしようとしていたか分かっているのか？」

「……」

返答が無い。

「今の魔力球は相当の破壊力を持っていた。そんなものをこんな所でぶっ放して、ただで済むと思うのか？　下手を打てば死者が出るぞ」

「で、でも……」

今までそんなことは無かった、だから今回も大丈夫、と思っているならそれは大間違いだ。あくまでもそれは結果論に過ぎない。

「お、おい柳「お前は黙ってろ」……」

稟が助け舟を出そうとするがそれを遮る。こればかりは見過ごせない。

「ネリネ、お前はもう少し自分の力を理解しろ。それは容易に人の命を奪える力だ。実際、そこらのチンピラの十人や二十人、あっさり皆殺しにもできる。実行するしないは関係無しにだ。それに……」

――お前は人を殺した手で稟に触れることができるのか？――

柳哉の言葉を聞きはっとなるネリネ。

「わ、私は……」

「気持ちは分からんでもないが、もう少し自制することを覚えろ。王女という立場にいる以上、必要なことだろう？」

「はい……」

うなだれるネリネ。少し言い過ぎただろうか？

「理解できたならそれでいい。でこピンの侘びと言うのはなんだが、手本を見せよう」

え、という表情のネリネに笑いかけ、右手の人差し指をぴんと立てると、そこに野球の硬式球大の魔力球が生まれる。先程のネリネのものとは比較にならないぐらい魔力量は少ない。

「女性陣はスカートを押さえておくことをお勧めする」

そう言って柳哉は右手を親衛隊に向けて軽く振ると、魔力球は呆然としている彼らの中央付近に放物線を描きながら飛んで行った。そして彼らの胸の高さ辺りまで落下した所で柳哉が指を鳴らす。と、同時に二十人あまりの親衛隊は全員が吹き飛んだ。

「あの、今のは……？」

「圧縮した空気を魔力でコーティングしただけ。あとは任意で魔力を散らせば圧縮した空気が開放されて強風が吹く。あんな風に呆然としてるところで食らえばそりゃ吹っ飛びもする」

何でもないように柳哉が言った。女性陣はスカートを、のくだりは風の影響を考えてのことだろう。親衛隊に遮られたため、そよ風程度しか彼女達には感じられなかったが。

「いえ、あの、そうではなくて」

「何で俺が魔法を使えるのかって？」

「はい」

柳哉の外見はどう見ても人族のそれだ。人族はその魔力の少なさ故に魔法が使えない。極稀に魔法が使用可能なくらいの魔力をもつ者もいるが、それでも純粋な神族や魔族のそれには大きく劣るものだ。

「理由はいたって簡単。俺は神族と人族のハーフだからだ」

沈黙。そして数秒後。

「「「「「ええーっ！！！」」」」」

稟達の絶叫が辺りに響いた。

その八（後書き）

説教はあまり好きではないのですが、ちょっと見過ごせないところなので。

その九（前書き）

柳哉の両親の事がいくつか判明します。
ようやく無印ＳＨＵＦＦＬＥ！のヒロインがほぼ全員登場しました。
Ｅｓｓｅｎｃｅ＋のヒロインも順次登場させます。

その九

「それで、『善処する』と言った割には初日から問題を起こしてくれた訳だが……」

「申し訳ありませんでした」

頭を下げる。さすがにまずかったか。

「まあ、本来ならここでタイヤ付きグラウンド五十週かウサギ跳び階段三十往復のどちらかを選ばせるところなんだが……」

「が？」

「ネリネの暴走を事前に止めた、という功績もあることだからな。今回は不問とする」

「それはありがたいんですが。そんなに頻繁に起きていたんですか？」

「いや、回数そのものはそう多くはない。ただ被害のほうがな……」

今回は柳哉によって被害は親衛隊のみにとどまっているが、以前のそれはさらに周囲への被害もあったことだろう。柳哉は知らないが一度体育館が消滅している。

「一応ネリネには言い聞かせておきましたが……」

「そうか。良ければ今後ともよろしく頼む」

「……いいんですか？」

「ああ。表立っては言えないが」

柳哉への処分が不問なのもそのあたりにあるのだろう。いわゆる大人の事情、というやつである。

「了解しました」

あの様子ならネリネも今後は自重するだろうが、一応気に掛けておくべきだろう。それに気になる事があるし。そう結論して柳哉は答えた。

＊　＊　＊　＊

「でも柳の奴がまさかなあ……」

「驚きましたよね」

「うん、まさかって感じ」

「この麻弓＝タイム、一生の不覚！　なのですよ」

教室に向かいながらそんな会話を交わす。柳哉はあの後、詳しい話はまた後で、と言って職員室へ向かっていた。

「あの、リンちゃん？　どうかしましたか？」

「あ、いえ……」

「柳哉に言われたことか？」

「はい……」

どうやら校門前での事をまだ引きずっているようだ。

「まあ、やってしまった事はもうしょうがない。大切なのは同じ失敗を繰り返さないってことだ」

受け売りだけどな、と笑う稟。

「ありがとうございます、稟様」

そして２－Ｃの教室前。

「シア、ネリネ、楓、あとついでに麻弓。下がれ」

「ついでに、とはなんなのですか！」

無視して教室の戸を開ける。

「シアちゃん、リンちゃん、楓ちゃん、俺様の胸の中でグッドモーニング！」

「残念、はずれだ」

「稟……俺様の無念の中でバッドモーニング……」

２－Ｃ、いつもの朝の風景だった。

＊　＊　＊　＊

始業式を終え、教室に戻る。柳哉も参加していたはずだが、稟のいる所からは見えなかった。麻弓の席に女子が集まっているのは転入生（柳哉）の話でもしているのだろう。

「よーし、全員席につけ」

チャイムが鳴り、撫子が教卓の前に立つ。

「もう知ってる奴もいると思うが転入生を紹介する。入って来い」

教室の戸が開き、柳哉が入って来ると同時に女子達から小さな歓声が上がった。

「よし、まずは自己紹介からだ」

はい、と答え黒板に名前を書く。

「水守柳哉といいます。稟と楓の幼馴染で八年前までこの町に住んでいました。まあ、よろしくしてやってください」

軽く頭を下げると、拍手が起きる。それが終わると生徒達の好奇心に満ちた視線が集まる。

「分かった分かった。特に連絡事項は無いからな、ここからは転入生への質問タイムだ」

はあ、と小さくため息をつきながらも空気を読んでそう言う撫子だった。

＊　＊　＊　＊

そして昼休み。

ちなみにバーベナ学園は始業式の後にも授業がある。

「それで稟ちゃん、彼が噂の転校生？」

昼食を摂るため屋上に上がった稟達を待ち受けていたのは、短い緑の髪に黒のリボンをした上級生、時雨亜沙と長い金髪におっとりとした雰囲気をもつ同じく上級生、カレハの二人だった。

「ええ、そうですけど。もう三年のほうでも噂になってるんですか？」

「そりゃそうよ。なんたって“あの”土見稟と芙蓉楓の幼馴染なのよ？　噂にならないほうがおかしいじゃない」

「亜沙ちゃん、それだけではないでしょう？　授業中もずっとそわそわしておられましたのに」

「カ、カレハ！」

「照れている亜沙ちゃん、可愛いですわ。まままぁ♪」

スイッチオン。

「なあ稟」

「これもいつも通りだ」

疲れたような声で答える。
気を取り直して自己紹介。

「水守柳哉と言います。よろしくお願いします、先輩方」

「ボクは時雨亜沙。稟ちゃん達とは中学時代からの付き合い。よろしくね」

「カレハと申します。よろしくお願いいたしますわ」

一つ気になる点があったが今は聞かないでおこう。いただきます、と昼食開始。

「で、だ。柳」

「ああ、今朝の事だろ？」

「何の事？」

どうやら亜沙は今朝の騒動は知らないようだ。

「俺が神族と人族のハーフだって事です」

「！」

「まあ、そうなんですか」

稟達が二人に今朝の出来事を話す。その間、亜沙が若干険しい表情をしていたことに気づいていたのは柳哉だけだった。

「でも、どうして教えてくれなかったんだ？」

稟の疑問はもっともだ。

「出会った当時のこと、覚えてるか？」

「はい」

忘れてなどいない。当時の柳哉は他人を寄せ付けない雰囲気を持ちながら、どこか寂しげだった。当時はまだ“開門”前。神族や魔族の存在なんてあくまで物語の中だけのものでしかなかった。半分だけとはいえ神族の血を引き、魔力を持つ柳哉が異端視されるのはごく自然な成り行きと言える。さらに当時の柳哉はまだ幼く、自身の持つ魔力の制御がうまくいかず、一種のポルターガイスト現象を起こすこともあった。実際それが原因で化け物呼ばわりされたからというのが光陽町に転居してきた理由であった。

「別に稟達のことを信用してなかったわけじゃない。でもやっぱり不安はあったからな」

結局話さないまま光陽町を離れることになったわけだ。

「そうか、悪かったな」

「その、すみませんでした」

「何言ってる、謝るのはむしろ俺のほうだって」

と、懐(ふところ)から右手で懐中時計を取り出し、時間を確認する。

「ん？　もしかしてそれは魔法具かい？」

樹が時計を指差す。

「ああ、父さんの形見でもある」

「少し見せていただいてもよろしいですか？」

頷き、ネリネに時計を渡す。

「お父様、亡くなられておられるのですか？」

「ええ、三年前に」

暗くならないように、と明るめに返す。と、わあ、という歓声が上がる。時計を見ていたシアとネリネだ。どうした、と聞く稟にシアが答える。

「すごいよこの時計」

「はい、これほどの物は魔界にもそんなにありませんよ」

「そんなにすごいのですか？」

麻弓が時計を眺めている。よく見れば意匠こそ若干古めかしいものの、アンティークショップに持って行けば相当の値が付きそうなぐらい凝った作りをしている。

「やらんぞ」

「あはは……」

「目が泳いでるよ、麻弓」

「う、うるさいのですよ」

それはさておき。

「いったい誰の作品なんでしょうか？」

「うん、ちょっと気になるね」

“開門”以来、人界で最も発展した技術の一つが魔法具である。人界に移住してきた神族や魔族の魔法具職人によってその技術が伝えられ、人族の使う魔法“錬金術”の発展にも大きく貢献した。

と、柳哉が苦笑して言った。

「稟や楓はその本人と会ってるんだがな」

「へ？」

「え？」

「俺の父さんだよ」

一拍おいて、

「マジか？」

「本当ですか？」

「事実だ」

「ということはお父さんが神族なの？」

シアの問いに頭（かぶり）を振る柳哉。

「母さんのほうが神族。まあいわゆる“神隠し”で人界（こっち）に来て、右も左も分からず彷徨（さまよ）ってるところを父さんに保護されたってわけ」

かつて何らかの原因・要因により、異なる世界へ渡ってしまった、あるいはこの世界に渡ってきてしまった人々がいた。それらの現象をこの国の伝承になぞらえて“神隠し”と呼んでいる。柳哉の母、玲亜もまたその一人であった。

「稟や楓は覚えてないか？　母さんのトレードマーク」

「ええと……」

「あの、もしかしてバンダナですか？」

「そ、耳を隠すために」

柳哉の父、草司も驚いただろうが、害は無いと判断したのだろう。当時の玲亜が美少女だったことも関係しているだろうが。ちなみに“玲亜”とは草司の考えた当て字である。

「でもすごいですね。人族の方でこれだけの魔法具を作れるなんて」

ネリネが感心したように言う。やはり魔法に関する知識や技術の面では人族は劣る。その中でもこれだけの魔法具を作れるのは相当な事だ。

「まあ元々父さんは手先の器用な人だったし、母さんからのアドバイスもあったみたいだからな」

実際草司は“開門”前から魔法具らしき物を趣味で自作していたようだ。

「この時計は父さんが俺のためだけに作ってくれた物でな、以前は魔法を使う時には欠かせなかった。今は使わなくても制御できるしな」

そう言って時計をしまう柳哉。

「ねえ柳ちゃん」

「どうしたんですか？」

ずっと黙っていた亜沙が口を開いた。

「小さい頃、魔力制御ってうまくいってなかったんだよね？」

「ええ、そうですね。よく体調を崩して学校を休んでましたし。それで母さんを恨んだこともあります。どうしてこんな体に産んだんだって」

今はそのことを後悔してますが、と苦笑い。

「……っ、魔法が嫌いになったりしなかった？」

「そうですね。結構早い時期から魔力制御の訓練は始めてましたけど、完全にサボってた時期もあります」

「でも今は普通に魔法を使うんだよね？」

「あくまで必要と判断した時だけですけどね」

妙に食いつく亜沙に少し戸惑いながら答える。稟達も戸惑い気味だ。いくら亜沙が魔法嫌いとはいえこれはちょっと、なレベルだ。

「どうして？」

「どうして、とは？」

「嫌ってたんでしょ？」

ふむ、とあごに手をやる柳哉。

「逆に聞きますが、時雨先輩にとって“魔法”とは何ですか？」

「人族であるボクにはいらない物、不必要な物」

即答。どうやら彼女の魔法嫌いは相当のもののようだ。

「柳ちゃんにとっては？」

「あの、亜沙ちゃん？」

声を掛けるカレハだが、

「ごめん、カレハ。ちょっと黙ってて」

と言う亜沙に口をつぐむ。

「俺にとって魔法とは道具（ツール）ですね」

「道具（ツール）？」

「ええ、使い方次第でどうにでもなる。それこそ守る力にも、奪う力にもなる物です。そして……」

「そして……？」

「生涯、付き合わなければならない物。たとえ嫌おうが憎もうがこの魔力（ちから）は無くなりはしない。なら、逃げずに向き合おう。俺はそんな風に思ってますよ」

「……」

沈黙する亜沙。

「時雨先輩？」

「ううん、何でもない。あと、ボクのことは亜沙でいいよ」

「ええ。わかりました、亜沙先輩。それと……」

言いながらカレハを見る柳哉。続いて亜沙も。そこには心配そうに亜沙を見るカレハがいた。

「ああ、うん。ごめんね、カレハ」

「亜沙ちゃん、もう大丈夫ですか？」

「うん、ありがとう」

亜沙が感謝を述べるとカレハは笑顔になった。

（過去に魔法がらみで何かあった、あるいは現在進行形で何かある、か）

何やらまた懸案事項の増えた柳哉だった。

その九（後書き）

本編内での一日が長い長い。余計な描写が多すぎでしょうか？

その十（前書き）

アクセス数が一万件、ユニークが二千件を突破しました。
ありがとうございます！

その十

「柳ちゃん、今帰り？」

「ええ、掃除当番だったので」

放課後、帰宅しようとしたところで柳哉は亜沙と遭遇していた。

「あれ？　どうしたの、ボクのことそんなに見つめちゃって。もしかして惚れちゃった？」

「どこをどう解釈すればそういう結論に達するのか小一時間ほど問い詰めたいところですね」

別にそういう意味で見ていた訳ではない。

「まあ、昼の事もあったので」

「あー、あれはさっさと忘れちゃって。ボクもちょっと熱くなっちゃってて」

どうもあまり触れられたくないようだ。いくつか聞きたい事もあったがこの様子では聞けそうにない。とそこへ声が掛かった。

「亜沙先輩、柳哉さん、今お帰りですか？」

蒼い髪に小柄な体、ネリネだ。

「こんな時間までどうしたんだ？」

彼女は今日、掃除当番では無かったと思うが。
「いえ、実は朝の件で……」
「ああ、呼び出しか。で、どうだったんだ？」
「はい、とりあえずは注意と、あと自重するようにと」
どうやらそこまで強くは言われていないようだ。
「それとあの、柳哉さん」
「ん？」
「今朝はありがとうございました。それと申し訳ありませんでした」
居住まいを正し、頭を下げるネリネ。
「別にそこまでかしこまらなくても……」
「大切なことですし、それに……」
朝はちゃんと言えませんでしたから、と笑う。
「リンちゃんと何かあったの？」
「今朝の騒動の時にちょっとお説教を。まあ俺はそんなに立派な人間じゃありませんけど」

「そんなことはないです。今まで気づいていなかったことに気づかせていただいたんですから」

亜沙の疑問に答えつつ苦笑いする柳哉。何故か柳哉を持ち上げるネリネ。三人は校門に向けて歩き出した。

「おい聞いたか？　校門の所ですっげー美人の親子が誰か待ってるらしいぞ」

「まさかまた土見じゃないだろうな」

「稟ならもう帰ったはずだけど」

なにやら噂話をしている二人組を見ながら言う柳哉。

「美人の親子ね……誰を待ってるのかな」

「……一応、心当たりはありますが」

苦笑気味の柳哉。ネリネが首を傾げている。そうこうするうちに校門前に着く。そこにいたのは肩にかかるくらいの紫の髪に黒い瞳を持ち、バンダナをした三十代後半くらいの女性と、同じく紫の髪にこちらは茶色の瞳を持ち、背中の中ほどまで伸ばした髪を蝶をあしらったバレッタで纏めた十代半ばの少女だ。女性の方は成熟した魅力を持ち、少女の方は落ち着いた清楚な雰囲気を持っており、ネリネや亜沙にも劣らない美少女だ。

「確かに、男子が騒ぐはずよね」

「あの人達はまさか……」

少女の姿を見たネリネは二人の正体に気づいたようだ。

「リンちゃん、知ってるの？」

「はい、女の子の方は柳哉さんの妹さんかと」

柳哉と初めて会った日に見せてもらった画像を思い出す。

「ということはその隣にいるのは」

「柳哉さんのお母様だと思います」

二人のそんな会話を聞きながら柳哉は言った。

「何やってんの。母さん、菫」

「兄さんこそ、美少女を二人も侍らせて何をしているんですか？」

「あら、柳哉。お帰り、と言うのもおかしいかしら」

聞けばどうやら、二人は帰り道で偶然会い、どうせだからと柳哉を迎えに行くことにしたようだ。

「柳哉の母で水守玲亜と言います。息子がお世話になると思うけどよろしくね」

「妹の菫と申します。兄がお世話になります」

「えと、柳ちゃんの先輩で時雨亜沙と言います」

「柳哉さんのクラスメイトでネリネと申します」

自己紹介を終えた四人。ネリネが魔界の王女だという事実に驚いたりといったやりとりが行われる中で、

（この人が……）

亜沙は玲亜の横顔を注視していた。自分の母とよく似た境遇にある人。この人の目に自分はどう映るのだろう。

（でも、これはボクが自分で決めた事なんだから）

軽く頭を振って浮かんだ考えを追い出し、話に加わる。彼女は気づいていなかった。その間、柳哉がずっと自分を見ていたことに。

＊　＊　＊　＊

ネリネと亜沙の二人と別れ、帰路に着く三人。

「二人とも可愛かったわねえ。ねえ柳哉？」

「亜沙先輩はともかく、ネリネは稟の婚約者候補らしいぞ？」

「婚約者候補、ですか」

二人に説明する柳哉。説明が進むにつれ、二人の顔に驚きと一種の呆れが浮かんでくる。

「確かに稟君は昔から楓ちゃんや桜ちゃんにモテてたけど、まさか神界と魔界の王女様にまでとはねえ」

「天然ジゴロ、というやつでしょうか」

「本人にはそういう自覚は無いようだけどな」

「兄さんとは違って、ですか？」

「お前も言うようになったな……」

兄さんの妹ですから、と笑う菫。しかしすぐに真顔に戻る。

「それよりも……」

「亜沙先輩のことか？」

「はい」

「うん、何かやけに真剣な目で見られてたわね」

どうやら亜沙が玲亜を注視していたことには三人共気づいていたようだ。

「菫はともかく母さんが気づくとはね」

「伊達にあなた達の母親はやってないわよ」

自慢げな玲亜。とりあえず無視する。照れくさいので。

「どうも魔法関係で何かあるみたいだ」

今朝の騒動と昼休みの出来事を話す。あれほどまでに魔法を嫌うとはよほどのことがあったのだろう。

「そういう訳だから、一応頭に入れといて」

「うん、了解」

「分かりました」

そう言う柳哉に頷く二人。柳哉にはある程度の予測がついているのかもしれないが、確証のない事は基本的には口にしない。二人は柳哉のそんな性格を熟知していた。

「で、夕食は何にする？」

話題を変える。

「んー、そうねえ」

「久しぶりに外食、というのもいいのでは？」

「ふむ、それもいいか」

「そうしましょうか」

そうして三人は夕暮れの町を歩いて行った。

その十（後書き）

第一章はこれで終わります。
次の章へ行く前にオリキャラ設定を入れようと思います。

その一（前書き）

タイトル通りです。
第一章で明らかになった設定のみ掲載しています。
一部例外が有りますが。

その一

オリキャラその１

名前：水守（みなかみ）　柳哉（りゅうや）
身長：１７２ｃｍ
体重：６８ｋｇ
誕生日：１月２１日
血液型：Ｏ
髪の色：黒
眼の色：黒
家族：母親・妹（父親は他界）
職業：学生、国立バーベナ学園高等部２年Ｃ組
備考：稟・楓・桜の幼馴染だが八年前の春に親の仕事の都合で光陽町を離れた　　幼少時に光陽町に引っ越してきたが当時は体が弱く、体調を崩しがちなうえに人見知りが激しく、独りでいることが多かった
そこで幼少時の稟達と出会い友達になり、また稟達を通じて友達が増え、人見知りはあまりしなくなった
そのことで稟達にはとても感謝しており、いつかこの恩を返そうと思っている
光陽町を離れた後も桜とは手紙で連絡を取り合っていた
八年前の事件（柳哉が光陽町を離れてから約半年後）の際には土見夫妻及び芙蓉紅葉（楓の母親）の葬儀に出席するため数日ではあるが光陽町に戻って来たが、その後の事については桜からの手紙である程度までは知っている
その後も桜とは手紙を遣り取りしていたが柳哉自身に起きた事件や父親の死等によって精神的に余裕が無くなり、疎遠になっていた
顔立ちは十人中六～七人くらいは美形と判断するくらいのレベルで、

かっこいいというより綺麗と表現されることのほうが多い
両手の黒いフィンガーレスグローブがトレードマーク
属性“鈍感”は非所持
年齢にそぐわない落ち着きを持ち、人の心境を察する能力に長け、
観察力、洞察力にも優れる
また、直感等の第六感にも優れる
以前に通っていた学校（風ヶ丘高校）が“文武両道”を信条として
いたため身体能力は高く、成績も学年内で十位以内に常に入っていた
実は神族と人族のハーフであり、神族である母親から高い魔力を受
け継いでいる
幼い頃体調を崩しがちだったのは魔力制御がうまくできなかったた
め（元々体があまり丈夫でなかったことも理由の一つ）
また、人見知りが激しかったのも魔力制御がうまくいかずポルター
ガイスト現象を引き起こしてしまい、化け物呼ばわりされたため

オリキャラ設定２

名前：水守（みなかみ）　菫（すみれ）
身長：１５７ｃｍ
体重：標準より少し上
スリーサイズ：８２／５９／８３
誕生日：２月１日
血液型：Ｂ
髪の色：紫
眼の色：茶
家族：母親・兄（父親は他界）
職業：学生、ストレリチア女学院中等部３年Ｄ組
備考：柳哉の実妹
髪は背中の中ほどに届く長さでそれを蝶をあしらったバレッタ（魔

力制御のための魔法具　草司作）で纏めている
柳哉同様、年齢にそぐわない落ち着きを持つ
柳哉のことは“兄さん”と呼び、誰に対しても基本的には敬語で話す
若干辛辣な所があるが、冷たい人間という訳ではない
誰に対しても敬語で話すため若干敬遠されがちだが、意外と社交性
に長けており、友人は多い
実はかなりのブラコンだが柳哉はそれに気づいていない
これは柳哉が鈍いのではなく菫の隠し方が巧妙なためである（母親
にはバレているが）
だが決して柳哉に対して恋愛感情を抱いている訳ではなく、単純に
妹として兄を慕っているだけである（早くに父親を亡くしている事
も関係している）
光陽町に住んでいたころに稟達と出会っているがそこまで親しくは
なかった
以前は聖祥学園中等部に所属しており、成績も常に上位だった
柳哉同様神族と人族のハーフで高い魔力を持つが、体が丈夫なため
柳哉のように体調を崩しがちになる、ということは無かった

オリキャラ設定３

名前：水守（みなかみ）　玲亜（れあ）
身長：１６２ｃｍ
体重：標準より少し下
スリーサイズ：８７／６２／８８
誕生日：１１月２４日
血液型：Ａ
髪の色：紫
眼の色：黒
家族：息子・娘（夫は他界）

備考：柳哉・菫の母親であり、“ＳＨＵＦＦＬＥ！”世界では珍しい“美熟女”なお母様（笑）
髪は肩にかかるくらいの長さで、トレードマークのバンダナをしている（耳を隠すためでもある）
今だ亡き夫を想い続ける一途な女性
夫亡き後、家族を支え続ける良き母親だが、時折はっちゃけるのが玉に瑕
純粋な神族であり、“神隠し”によって人界へやって来た
右も左も分からずに彷徨っていたところを草司によって保護され、その後草司と結婚した
“玲亜”は草司の考えた当て字
“ある理由”により、“開門”後も神界へは戻っていない

オリキャラ設定４

名前：水守（みなかみ）　草司（そうじ）
身長：１８４ｃｍ（死亡時）
体重：７６ｋｇ（同上）
誕生日：６月２１日
血液型：Ｂ
髪の色：黒
眼の色：茶
家族：妻・息子・娘
職業：魔法具職人
備考：柳哉・菫の父親で玲亜の夫
物語開始の三年前、飛行機事故で死去（享年３５）
生前は逞しい体躯を持ち、家族想いの良き父、良き夫であった
性格はかなり軽い所があり、妻と共に悪ノリすることもよくあったが、締めるところはきっちり締める

“開門”以前から玲亜の協力の下で魔法具の研究を行っており、また技術力やセンスにも恵まれ、“開門”後は腕のいい魔法具職人として有名だった
柳哉・菫が使用していた魔力制御を補佐する魔法具も彼の作である

その一（後書き）

次からは第二章に入ります。

その一（前書き）

第二章に入ります。

その一

日曜日の朝、芙蓉家に柳哉の姿があった。幹夫が中断していた出張に戻るため、その見送りに来たのである。前日に盛大な壮行会、という名の宴会が行われ、柳哉も参加していた。その席でも結構呑んでいたが二日酔いの気配は無い。若干顔が青い稟とは対照的だ。

「それじゃ稟君、楓をよろしくな」

「よろしくされるのはむしろ俺の方な気がしますが」

「はっはっは。前にも言ったが親公認だからがんばるように」

「お、お父さん」

照れる娘を微笑ましく見つめる幹夫。亡き妻、紅葉の面影を強く受け継ぐ楓に注ぐ愛情は神王・魔王の二人にも引けをとらない。

「柳哉君、二人を頼む」

「はい」

力強く頷く柳哉に草司の面影を見て取り、破顔する。

（鉢康、草司、お前達の息子達はいい男に育っているぞ）

心の中で亡き友人達に語りかける。二人の照れくさそうな表情が見えるかのようだった。

「それでは、行って来るよ」
「行ってらっしゃい、幹夫おじさん」
「行ってらっしゃい、お父さん」
「行ってらっしゃい、幹夫さん」
そうして幹夫は出かけていった。

＊　＊　＊　＊

芙蓉家、稟の部屋にて。
「さて、と」
そう言って柳哉は部屋を見回す。
「何をするつもりなんだ」
嫌な予感しかせず、ジト目で見る稟を気にする事無く言い放つ。
「そりゃあ、思春期男子の部屋に来たからにはやることは一つだろ？」
予感的中。というかお前は亜沙先輩か。麻弓なんかもやりそうだが。

「先に言っておくがお前が喜びそうな物は無いからな」

「……お前、いつの間に俺の趣味の傾向を知ったんだ？　まさか、引越しの時か？」

「いやそうじゃなくて」

いわゆるエロ本の類の事だろう。

「……持ってないのか？」

「持ってない！」

「……お前、まさか……」

「行っておくが「同性愛の趣味があるんじゃ……」違う！　俺はいたってノーマルだ！」

「エロ本の一冊も持ってないなんて普通ありえないだろう」

思春期男子として。まあ柳哉も人の事は言えないのだが。

「芙蓉（うち）家には楓とプリムラがいるんだからな。下手にそんな物見つかってみろ。壮絶に気まずくなるだろうが」

「気まずくなるのはお前だけだと思うが」

確かに。楓は妙な理解を示しそうだし、プリムラにいたってはそういう知識があるかどうかも疑わしい。

とそこへノックの音。

『稟君、柳君、掃除機をかけたいんですがいいでしょうか』

部屋の外から楓の声がする。

「ああ、分かった」

そう言ってドアを開ける稟。

「失礼しますね」

「稟、お前自分の部屋くらい自分で掃除しろよ」

反論しようとする稟だが、

「いいんです。私が好きでやってる事ですから」

楓の台詞に言葉を飲み込む。

「柳、下に行こう」

「ああ」

リビングのソファに座る。

「確かにあれじゃ無理だな」

「分かってくれてありがたい」

「いつもあんな感じなのか」

頷くことで肯定する稟。

「もしかして家事関係は全部楓がやってるのか？」

再び肯定。考え込む柳哉。

「……桜からはどれくらいまで聞いてる？」

「仲直りした、ってところまでは」

ということはその後のことはほとんど聞いていないのだろう。もしくはあえて聞かなかったか。

「罪滅ぼし、か？」

「いや、気にするな、とは言ってるんだけどな」

さすがにそれは無理だろう、と柳哉は思う。桜から聞いてはいるが、あくまでもそれは桜の視点からの話でしかない。実際は相当ひどい目に遭っていただろう。この幼馴染は。それに……。

「どうした？」

「いや、何でもない」

その後は楓やプリムラも交えておしゃべりに興じた。

（何なんだろうか？　どこか暗いこの感情は……）

＊　＊　＊　＊

夕方、そろそろ帰ろうと柳哉は腰を上げる。夕食に誘われたが既に昼食もご馳走になっている。さすがにこれ以上は気が引けた。帰ることを伝え、その前にとトイレを借りる。出るとキッチンから声が聞こえた。

「稟君は座っていてください」

「いや、でもな」

「いいんです、私がやりますから」

「いや少しぐらい……」

「稟君のお世話をするのは私の生きがいなんです！　ですから……」

私の生きがいを奪わないでください、と言う楓に根負けしたのか、稟は諦めたようだ。

「稟、楓、それじゃ帰るわ」

「あ、ああ」

「あ、はい」

稟が見送りに出る。楓は料理から手が離せず、プリムラはそのサポートに付いている。

「それじゃ、また明日な」

「ああ、また明日」

そう言って柳哉は芙蓉家を辞した。

その帰り道。

（まただ。一体どういう……？）

柳哉は昼にも感じたどこか暗い感情に悩まされていた。しかも少し大きくなっている。

（嫉妬ってわけじゃなさそうだが……）

最初に考えついたのがそれだった。しかしそれなら、この感情は稟に向くはずだ。しかし実際にはそれは楓に向いているように思う。だが自分には楓に嫉妬するような理由など無い。ならば一体なんなのか。答えを探しながら柳哉は歩いて行った。

その一（後書き）

ちなみに有名なロシアの小説とは関係ありません。

その二（前書き）

短めです。

その二

翌週、月曜日。

このよく分からない感情を解明するため、柳哉は楓を観察することにした。もっとも、じろじろ見たりするのではなく、何気なく楓の言動に注意を払う程度だが。昼休みはそれにはうってつけの時間だ。食事中というのは人が無防備になりやすい時でもあるのだから。

「ねえねえ、柳哉くんのお弁当って誰が作ってるの？」

柳哉の弁当を覗き込みながらシアが聞いてきた。

「今日のは自作だが」

「あれ、柳ちゃん料理できたんだ」

柳哉の返答に亜沙が驚いたように言った。

「意外ですか？」

「うん、意外」

「そう言えばインタビューの時、趣味に家事全般があったのですよ」

「こういう事に関しては麻弓の記憶力は高いね」

「ふふん、社会に出てからは使う機会の無い事を覚えるよりよほど有意義なのですよ」

樹の皮肉に麻弓が返す。典型的な勉強しない学生の言い訳である。

「今日のは、ということはいつもは違うのでしょうか？」

「水守（うち）家の人間は全員、家事全般ができるので。基本的には俺か菫が作って、時々母さんが作る、といった具合です」

カレハの疑問に柳哉が答える。玲亜が時々、というのは前にも出たが、仕事の時間が一定ではないからだ。

「うらやましいです……」

「ネリネはできないのか？」

ネリネの弁当はなかなか豪勢だが、手作りのようだ。

「はい……やろうとすると……」

放火、爆発、出血、溶解……と続いたところで止めた。それはもはや料理じゃないだろう。

「ってことはお母さんが？」

「いえ、実は……お父様です」

「えーと」

「柳、受け入れろ。あのおじさんはそういう人だ」

家庭的な魔王って……どうツッコミをいれるべきか。個人の趣味

に関してはいちいちどうこう言うべきではないが。

「まさか……？」

シアを見る。察したのかシアが言った。

「あはは、うちのお父さんは手伝うくらいかな。基本的には私かお母さん達がやるし」

「達って……ああそうか、神界は一夫多妻制だったな」

神族は女性の比率が高い（約七割が女性）ため一夫多妻制を布い（し）ている。そのため複数の女性が一人の男性を好きになっても、喧嘩などはほとんど起きないそうだ。

「あの、柳君」

「ん？　何だ」

それまでずっと会話に参加せず、何かを考えていた楓が口を開いた。

「確か柳君は左利きでしたよね？」

「よく覚えてたな」

「私もですから。でも……」

皆が柳哉を見る。右手で箸を持つ柳哉を。

「右だね」

代表して樹が口を開く。

「矯正したのか？」

「いや」

稟の疑問を否定し、箸を左手に持ち替えて食事を続ける。その動きはいたってスムーズだ。続いて右手に持ち替える。ぎこちなさは一切無い。

「訓練して右もしっかり使えるようになった。それでも握力は左の方が上だけどな」

以前、左手を怪我して難儀した経験からしい。それだけが理由ではないが。

「つまりは両利き、と。何かかっこいいのですよ」

どーも、と答える。ちなみに菫も両利きだったりする。

「で、だ。さっきの話に戻るが」

「？」

「家事うんぬん、の話。この中でできないのはネリネと麻弓と稟と……樹はできるのか？」

「一応はね」

「というか何でナチュラルに私の名前が入っているのですか！？」
「「できるのか！？」」
稟と柳哉の合唱。麻弓がどう思われているかがはっきり分かる。
「何でそんなに意外そうなのですか！？」
「仕方ないだろう？　事実できないわけだし」
樹が追撃する。
「あの、麻弓さん。がんばればきっとできるようになりますよ」
「リンちゃん……」
「あ、でもリンちゃん料理以外はすごく上手だよね」
「うわーん！　皆敵なのですよおおお！」
ネリネがフォローを入れるがシアの台詞で台無し。
「樹の弁当はやけに可愛らしいな？」
「今日のは一年生だね。あの初々しさが何ともいえないよ」
「……今日のは？」
柳哉の疑問に樹が答える。

「日替わり弁当、というものがあるだろう？」

それはそういう意味じゃない。ツッコミたかった柳哉だった。

＊　＊　＊　＊

帰り道。柳哉は一人考えていた。

（今日はぜんぜん感じなかったが……）

柳哉自身にもよく分からない“あの感情”。一体何なのだろうか？

（何か条件でもあるのか？）

思考錯誤を繰り返す。別に気にしなければいいのだろうが、柳哉自身の勘がそれを許さない。この勘、というものもなかなか厄介なもので、根拠というものがまるで無い。それ故に迷信とされたりもする。だが柳哉はそれを軽んじることはしない。それによって助けられたことも多いのだから。

（ただでさえ考えなきゃならない事が多いってのに）

はあ、とため息をつく。心配事も多い。ただの考えすぎならいいのだが、そうはいかない。そんな気がする。

（ま、今の所は心に留めておくだけにしておくか）

そう考えると少し気が楽になった。と、携帯電話がメールの着信を知らせる。菫からだ。

『少し遅くなりそうなので夕飯の準備をお願いします。無理なようなら連絡をください』

簡潔な文面。苦笑しつつ了解、と返信する。

（さて、何にしますかね）

冷蔵庫の中身を思い出しながら買い物に向かう柳哉を美しい夕焼けが照らす。明日もいい天気になりそうだ。

その二（後書き）

繋ぎの回です。
一応伏線も張ってます。

その三（前書き）

少し長くなったので分けます。

その三

始まりはなにげない質問からだった。

「……ねえ、楓……」

「はい？」

「ファーストキスってどんな味だった？」

唐突に浴びせられた麻弓からの質問に楓は思わず床に倒れた。

「あ、今日は明るいピンクなんだ」

「こ、声にしないでください！」

スカートを押さえながら、慌てて起き上がる楓。顔が真っ赤だ。

「いきなりどうしたんだい、麻弓」

「いやー、ちょっと隣のクラスの友人と話してて議論になりまして」

樹の疑問に答える。

「恥ずかしながら、私まだ経験ないのよねー。それで、楓だったら知ってるだろうなあって」

「……」

無言の稟。どうやら聞こえなかったふりをするようで、次の授業の予習を始めている。しかし、殺気に満ちた視線を感じ、手を止める。

「……樹……なんだ、その殺気に満ちた目は……」

「大丈夫だよ。俺様だけじゃないから」

周囲を恐る恐る伺う。クラス中の男子の視線が稟に向いていた。空気が重い。

「わ、私だってありません！　そ、そんなキス……だなんて……」

クラス中の耳が楓と麻弓のやりとりに集中している。男子生徒はみんな目の色が違っていた。この会話の後、はたして稟は無事でいられるのだろうか？　おそらく無理だろうが。

「えー、まだないわけ？　土見くん、甲斐性が無いのか度胸が無いのか責任逃れなのかはっきりしといた方がいいわよー」

「激しく余計で大きなお世話だ」

（柳、早く戻ってきてくれ！）

心の中で幼馴染の早期帰還を祈る。

「他に経験ありそうな子かあ……」

そう言って辺りを見回す。その目が小柄な姿を捉えた。

「リンちゃんはどう？」

「え……あ、あの……私、ですか……？」

ネリネがチラリと稟を見る。少し顔が赤い。

「その……していただけたら、とは思っていますけれど……」

稟に向けられる視線にはっきりとわかるぐらいの殺気がこもり始める。

（頼むからもう終わってくれ。頼むから！　それで柳、早く！）

心からの祈りを込めて、ある席を見た。……いない。今は教室から出ているようだ。胸を撫で下ろす。あいつがいたら事態はさらに深刻になるところだ。と、教室のドアが開く音がした。柳哉が戻ってきたのだろうか、とそちらを見て稟は絶句した。

「あれ？　みんな何話してるの？　なーんか、クラスの雰囲気が怖いけど」

シアだった。

（お約束すぎるだろう！　神はいないのか！）

一応いる。あてにはならないが。

「キスって、どんな味なのかなあって。このクラスはどうにも清純奥手派だらけのようでして、誰も知らないのですよ」

水守くんも恋人いないって言ってたし、とため息をつきつつ麻弓が言う。

（止まれ！　ストップだ！　思いとどまれシア！）

どうやら稟には心当たりがある様子。そんな稟の内心を知らず、シアの口から爆弾が投下された。

「キスの経験？　私あるけど」

祈りは届かなかった。天を仰ぐ稟。

「へー、シアちゃんあるんだ。結構意外……」

樹の言葉が途中で止まる。自分が何を言ったのか理解したのだろう。

「……」

『な、なんだってええええーーーーっっ！！』

そこにいたクラス全員（稟・シアを除く）による大合唱が学園全体を包み込んだ。よく窓ガラスが割れなかったものだ、とは稟の感想。

「シ、シアちゃん！？　それ本当！？」

「うん♪」

常に所持しているデジカメを構えながら詰め寄る麻弓に、シアは

照れたような笑顔ではっきりと頷いた。

「……」

「……」

ネリネや楓にとっても今の発言は驚きだったらしく、言葉を失いシアをじっと見つめていた。さあどうやってごまかそうか、と考える稟。

「いつ!?　どこで!?　相手は!?　やっぱり神族!?　レモンの味した!?」

矢継ぎ早にシアに質問を浴びせる麻弓の姿に、

（無理だな……）

そう結論し、静かに席を立ち、そのまま音を立てないように教室の後ろのドアへ歩いて行く。幸い、クラス中の興味がシアの元に集中している。このままいけば……。恥ずかしそうではあるものの、嬉しそうに語るシアを横目にしながら、時間はあまり無さそうだと判断し、若干足を速める。

「あの……八年前、この街で、稟くんと」

訂正。あまり、というかほとんど無かった。シアに注がれていた視線が、一斉に稟に向く。

「まあ、こうなることは分かっていたわけで……」

教室から全速力で離脱。

「逃げたぞ！　追えー！！」

「他のクラスにも応援を求めろ！　過ぎたこととはいえ、一撃くらいは食らわさんと気がすまん！！」

「放送室だ！　全校放送で呼びかけて、学園中に警報を発令しろ！」

逃走を開始した稟の耳にそんな声が届いた。

「こ、こら楓、だからしっかりしなさい！」

「楓さん、幼い頃の綺麗な思い出ですから。それほど気にすることもありませんよ」

倒れた楓を慌てて介抱する麻弓。フォローを入れるネリネだが、

「そういうリンちゃんも、教科書逆さまだから！」

「え……あ、あの……これは……」

おもいっきり気にしているようだった。

＊　＊　＊　＊

「ん？　何だ？」

飲み物を買いに学生食堂まで来ていた柳哉はやけに騒がしいことに気づいて首を傾げた。

「あー、多分いつものアレじゃないかな」

「親衛隊ですか？」

「当たらずとも遠からず、ですわね」

たまたま一緒になった先輩二人の言葉にさらに首を傾げる。その時だった。

『えっと、放送します』

特徴的なチャイムと共に校内放送が始まった。

「稟ちゃんらしいというか何というか……」

「まあ、分からんでもないですが」

「まままぁ♪」

放送の内容を聞いて亜沙が苦笑いし、柳哉が呆れ、カレハは……いつも通りだった。

要約すると“過ぎた事とはいえシアのファーストキスを捧げられた土見稟にせめてもの制裁を”という内容だ。わざわざ要約したのは嫉妬や私怨によるものと見られる部分が数多くあったためだ。放送を依頼した生徒が付け加えたか、あるいは放送をした女生徒（声から判断）の独自のものか。

「……ちょっと放送室まで行ってきます」

「あれ？　稟ちゃんを助けに行くんじゃないの？」

「これも試練、ということで」

多分大丈夫だろう。結構頻繁にやってるようだし。二世界の王女の婚約者候補である稟だ。そんなにひどいことにはならないだろう。何より稟はそこまで弱くない。

「ままままぁ♪　稟さんはもうそこまで♪」

とりあえずカレハは放置し、柳哉は放送室へ向かった。そこである出会いをすることになる。

その三（後書き）

さて柳哉は誰と出会うのか？

……バレバレですが。

その四（前書き）

色々詰め込んでたら時間掛かりました。
その分（少しですが）長めです。

その四

「ん？　あれは……」

放送室へ向かう途中、柳哉はその人物に気づいた。姿勢のいい、長身の女生徒だ。亜麻色の長髪が目を引くその姿は見覚えがある。始業式の時にも見たこの学園の生徒会長だ。もしや、と思い声を掛ける。

「会長さん、放送室へ行かれるのですか？」

「！？」

どうやらかなり驚いたようだ。理由は分からんでもないが。

「すみません。驚かせてしまったようですね」

「い、いえ。こちらこそ失礼しました」

さすがこの学園の生徒会長を務めているだけあり、すぐに動揺から立ち直る。

「で、放送室へ行かれるので？」

「はい。どうしてお分かりになったのですか？」

「さっきの放送の内容はさすがにどうかと思われますから。生徒会長として注意に行かれるのではないかと」

どうやら当たりのようだ。感心するような目で見られている。

「私の事をご存知ですか？」

「ええ、始業式の時に」

目はいいので、と補足し、居住まいを正す。

「自己紹介がまだでしたね。水守柳哉と申します。この二学期からバーベナ学園に転入してきました」

「ふふ、ご丁寧にありがとうございます。私は瑠璃＝マツリと申します。ご存知の通り、このバーベナ学園で生徒会長を務めております。もし何か不便等ありましたら生徒会までご連絡ください」

「いえ、むしろ迷惑をかけに行くはめになるかもしれません」

「おやおや」

「ご存知かもしれませんが“あの”土見稟と芙蓉楓の幼馴染なので」

瑠璃がクスリと笑う。始業式の朝、校門前であった出来事を知っているようだ。生徒会長である彼女に報告が行くのは当然だろう。

「それじゃ、放送室へ行きましょうか」

「？　水守さんも放送室に用件が？」

「用件、というか文句を言いに。さっきの放送はちょっと……」

「ふふ、それでは行きましょうか」

そう言って歩き出す。幼馴染を悪しざまに言われて怒っているのかとも思ったが、言葉通り文句を言うだけなのだろう。そうこうするうちに放送室に到着。瑠璃がノックをし、名前を告げ、どうぞ、の声の後ドアを開ける。

「！！」

そこにいたのは紫の髪を肩に届くかどうかくらいに伸ばし、左側頭部のあたりで髪の一部を花のバレッタで留めた神族の少女だった。

「あ、あのー。会長さんがどんな用件でしょうか」

「先程の放送ですが……」

瑠璃が放送の事で注意をする。少女はしゅんとしていた。

「水守さん」

「あ、はい」

「私の用件は済みましたが……どうされました？」

いえ何でもないです、と答えもう一度少女を見る。やはり似ている。気のせいか？　いや……。

「何か言いたいことがあるのでしょう？」

「いえ、会長さんに全部言われてしまったので特に言う事が無くな

りましたから」

「あの、こちらの方は？」

少女の疑問に瑠璃が答える。

「彼は転入生ですよ。この二学期から……」

「！　なるほど。あの土見稟の幼馴染だという……」

瑠璃の言葉を途中で遮り、柳哉を睨み付ける少女。

「あー、一応自己紹介をしとこうか。水守柳哉だ。そちらは？」

「……デイジーと言います。一応、隣のクラスです」

同学年っぽいと思ったがその通りのようだ。というかあからさまに敵意を向けられている。

「……もしかして稟が何かしたのか？」

少なくとも自分がこの少女の恨みを買うようなまねをした覚えは無い。

「……」

無言。そして少し顔が赤い。

「いや、答えなくていい。何となく分かったから」

稟にラッキースケベでも提供してしまったのだろう。

「あいつには充分言い聞かせておくから、少しは怒りをおさめてくれるとありがたい」

「……分かりました」

「あ、でも……」

「どうかされましたか？」

「はい、あの事件は稟ど……いえ土見さんには落ち度はほぼ無いかと」

実際にはシアを放送部に勧誘しようと突撃したところ、勢いあまってシアに体当たりしそうになり、それをかばった稟と一緒に転倒、結果として自分の股間を稟の顔に押し付けるはめになった、というのが事の真相だ。

「……」

「……」

柳哉、デイジー共に無言。まあある意味自業自得とはいえ、なかなか割り切れないのが乙女心というものなのかもしれない。

「ま、一応稟には注意するように言っとくよ」

「……お願いします」

微妙な空気のまま柳哉と瑠璃は放送室を後にした。

＊　＊　＊　＊

「シア……もといリシアンサス様を放送部に勧誘、という事でしたが……」

「いえ、かまいませんよ。愛称でお呼びするように言われているのでしょう？」

「それでは、シアを放送部に勧誘って事でしたけど本人は何と？」

「お断りされたようです。勉学をおろそかにされたくはないようですので」

そう言う瑠璃はどこか誇らしげだ。自分達の世界の王女が頑張っている、というのはやはりうれしいものなのだろう。実態をある程度知っている柳哉は苦笑いしているが。

「しかし、シアを放送部に、ねえ。似合いそうではありますけど」

「確かに。それに放送部は部員が足りていませんから」

シアが放送部に入部すれば入部希望者が殺到する、という狙いもあるのだろう。

「なるほど。ところで、彼女以外の部員は……」

「いえ、彼女一人です。それも理由なのでしょう」

「確か規定では……」

「はい、部員数が五人以上でなければ部としては認められません。彼女は奨学生で、とても頑張っているので生徒会としてもどうにかしてさしあげたいのですが……」

「奨学生なんですか」

毎年神界・魔界から五名ずつしか選ばれないという奨学生制度がバーベナ学園にはある。その枠に入っているということは彼女がそれだけ優秀だということだ。奨学生へは部活への入部が強く勧められる。放送部に在籍しているのもそのあたりが理由なのだろう。ちなみにデイジーは寮住まいだ。

「シアに少し話してみましょうか」

「いいのですか？」

「成績に関してはシアの周りには優秀な人がいるので」

なんなら自分がシアの勉強を見るのもいい。シアの苦手とする英語・歴史は柳哉の得意分野だ。

「それに……」

「？」

「彼女はどこか人付き合いが下手そうなので」

それは瑠璃も薄々感じていた事だ。思わず笑いが漏れる。

「何か？」

「いえ、見かけによらず、お人好しな方だと思いまして。土見さんの幼馴染だというのが少し分かります」

「褒め言葉、と受け取っておきます」

ひとしきり話した後、二人は各自の教室に戻った。

＊　＊　＊　＊

（彼が……）

教室に戻る道すがら、瑠璃は先程まで話していた下級生の事を考えていた。“あの”土見稟と芙蓉楓の幼馴染。だがそれだけではない。神王ユーストマからも気に掛けておくようにとの通達があった。どういうことなのだろうか。土見稟だけならばまだ分かる。何せ王女リシアンサスの婚約者候補だ。しかし、あくまでも彼は一般人なのだ。本当によく分からない。

（一体どういうことなのか……いや）

軽く頭を振り、考えを追い出す。考えることは大事だが考え過ぎるとかえって良くない。

（今は私の成すべきことを成そう）

それに、彼は害になるような存在ではない。これはただの勘だが、彼の立ち位置はむしろ自分のそれに近いように思える。ならばそこまで心配することは無いだろう。

「瑠璃ちゃん？　どちらへ行かれますの？」

「え？」

親友であるカレハの声に振り向く。どうやら教室を通り過ぎてしまっていたようだ。苦笑しつつ、

「ちょっと考え事をしていまして」

「そうだったんですか。てっきりいつもの……」

「カ、カレハちゃん！」

慌てて教室に入る瑠璃だった。

＊　＊　＊　＊

一方。

柳哉も教室に戻りながら考えを巡らせていた。もっとも、瑠璃に関してはそれほど心配していない。どこか観察するような目を向けられていたが、神王から何か言われているのだろう。立居振る舞いを見るにかなりの実力者、おそらく彼女はシアの護衛だ。そもそも

一国の（この場合は一世界の、だが）王女を護衛も無しに学園に通わせるなど本末転倒というものだろう。ネリネにも同様に護衛が付いているはずだ。問題はそれよりも、

（彼女はまさか……いやだとしても辻褄が合わない。一体どういうことだ？）

デイジー、と名乗った神族の少女。彼女は柳哉の知る女性とよく似ている。血族だと言われれば納得できそうなほどに。

（話し合う必要性がある、か……）

この町に戻って来ることが決まった時は考えも付かなかった問題が次々に浮上してきている。その中でもこれは最たるものだ。もう自分一人で判断が付けられる領域ではないのかもしれない。

（父さん、母さん、俺は約束を破ることになるかもしれない）

窓から空を見上げる。柳哉の心とはうらはらに、空は青く澄み渡っていた。

その四（後書き）

伏線の回です。
いまさらながら全部回収できるか不安になってきた……。

その五（前書き）

今回、オリキャラは空気です。

その五

「やあ稟ちゃん、楓ちゃん、待っていたよ」

「魔王のおじさん？」

「どうしたんですか？」

帰宅した稟達を魔王が迎えた。

「いやなに、プリムラをね」

「いつもの検査ですか？」

「ああそうだ。いつも通り四～五日程度で済むから。それに結果次第では……」

「？」

「いや何でもないよ。それではプリムラ、行こうか」

「……うん……行ってきます」

「行ってらっしゃい」

「行ってらっしゃい、リムちゃん」

そうして魔王はプリムラと共に芙蓉家を後にした。

＊　＊　＊　＊

その夜。

「ただいまー」

近くにジュースを買いに行って来た稟が帰宅した。

「こんなことなら家に居りゃ良かったか……」

じっとりと汗をかいて濡れたシャツを見ながらぼやく。九月に入ったとはいえまだ残暑が厳しいうえに湿度も高く、エアコンで除湿しなければ寝苦しい夜になりそうだった。

（あー、やっぱりクーラーは人類の至宝だよなあ）

その涼しさを全身で満喫しつつソファに座る。ジュースのプルタブを開け、一気に口に流し込む。内側から冷やされる感覚に、ほう、とため息をつき、ソファに背中を預けた。しばらく涼んだ後、着替えを取りに自室へ向かう。汗を流すためだ。準備を終え、脱衣所の扉を躊躇無く開ける。

「……」

「……あ……」

思考が一時停止する。

「……」

「……稟……くん……？」

その声に停止していた思考が動き始めた。

「あー……その……なんだ……」

「は、はい……」

「ま、まあ……一緒に住んでいればいつかは起きてもおかしくないトラブルではあるわけで……」

最近は無かったものの、久しぶりすぎて若干混乱しているようだ。言い訳にもならないが。

「そ、そうですよね……」

「わざと……ということは決してない。信じてくれるか？」

「わ、分かってます……」

「……だから、えーと……それで……」

とっとと謝って外に出ろ、と彼の幼馴染ならツッコンでいるだろう。

「わ、悪い楓っ！　すぐ閉めるから！」

叫ぶように謝り、脱衣所の扉を閉める。しかし、

「ふう……」

「……あ」

「……」

「……え、えーと……」

残ってどうする！　と彼の幼馴染なら以下略。

「あ、あの……稟、くん……？」

「……閉めたって……俺が残ってちゃ意味ないよな……」

「はい……」

いや気づけよ！　と彼の以下略。

「本気でごめんなさい！！」

脱衣所を逃げるように飛び出し、リビングへ駆け込む。着替えを覗いただけでなく内部に留まるという二重のお約束をかますとは。土見稟、一生の不覚である。

「ま、まあ……楓の裸くらい何度か見たことあるもんな。今さら見たって……」

ＫＫＫのメンバーが聞いたら問答無用で抹殺されるであろう台詞を口にする。というかそれは子供の頃の話だろう。

「しかしあいつ……随分と成長してたんだな……あれでどのくらいのサイズなんだろうか。結構大きかったような……っていかんいかん！」

ぶんぶんと頭を振る。何を考えているのか。楓は居候先の恩人で、大事な幼馴染だ。そういうことを考える対象として見るのは……。

「やっぱりスタイルいいんだな……ってだからそうじゃなくて！」

土見稟、現在絶賛混乱中。どうやら今夜は二重の意味で眠れない夜になりそうだ。

＊　＊　＊　＊

翌日、金曜日。バーベナ学園は第二・第四土曜日が休みなので今日を乗り切れば二連休になる。そんな中で、

「……ぼー……」

「どうかしたのか、楓？　なんかボーッとしてるけど」

「あ、いえ、何でもないんです」

「？」

楓と柳哉がそんな会話を交わしていた。楓の顔が若干赤い。

（やっぱり怒ってるのか？　昨日のこと……）

昨日は気まずさから、そのまま部屋に引きこもってそのまま寝てしまった稟。

「もう一回、ちゃんと謝った方がいいかなあ……」

「謝んなきゃいけないようなことをしたわけ？」

「いや、あくまでも偶然だったわけなんだけどな……」

「ふーん。ぜひとも詳しく聞きたいねえ、そのあたり」

まあ、簡単なことなんだけども……と続けようとしたところで、

「ふんふん」

「それで？」

二人の悪友の存在に気づく。麻弓と樹だ。空気のように現れたため、一瞬違和感が無かった。

「……ちょっと待て。どうして俺が自白せにゃならん」

「ああ、私たちのことはお気になさらず」

「そうそう。それで、簡単に何をしたんだい？」

ならば簡単に言おう。

「帰れ」

麻弓と樹の顔に苦笑が浮かんだ。

＊　＊　＊　＊

「よし、今日はここまでだ。明日から二連休だが、休みだからといってはめを外し過ぎないように。少なくとも犯罪行為はするな。分かったな緑葉」

「先生、それに関しては俺様よりもさらに危険な人物が約一名いると思いますが」

「そっちは超法規的措置でなんとでもなるんだよ。お前の場合はヤクザの娘にでも手を出して問題起こすだろうが」

「大丈夫ですよ。それに関しては上手く処理しましたから」

女好きもいいところだろう。しかも優秀な頭脳を持つ分、さらに性質が悪い。

「……休みだからといってはめを外し過ぎないように。少なくとも犯罪行為はするな。特に緑葉！」

思っていた以上に侮れない男、緑葉樹。命も惜しまぬ節操の無さはもはや賞賛に値する……かもしれない。

「よし、本日は解散だ。日直、号令」

起立、礼、の号令の後、教室を出て行く撫子。ほぼ同時に開放された生徒達が家路に付き始める。

「楓、帰ろうぜ」

「え……あ、は、はいっ」

「今日は何か買ってく物あるのか？　付き合うぞ」

いえ、今日は特に、と言いかけた時だった。

「きゃあっ」

稟に合わせようとして慌てたのか、カバンを持って駆け寄ろうとした楓の足が大きくもつれ、稟を巻き込みながら床に倒れ込んだ。

「痛てて……楓、大丈夫か？」

「は、はい」

一緒に倒れ込んだせいで至近距離に楓の顔があった。楓も気づいているのか、顔が紅潮している。

（こんなに近くに、稟くんが……）

そんな思考が楓の頭をよぎる。と、稟が身を起こそうとしている。早くどかなければ。

「あ……」

しかし、そんな考えとはうらはらに、楓の体は動かなかった。稟が不思議そうに楓を見ている。

（稟くんのこの唇に、シアちゃんが……）

私も、とそう思った時、楓の体は勝手に動いていた。

「ん……」

「！！」

楓の唇が稟のそれに重なっていた。柔らかな感触に稟の思考が完全に停止した。数秒後、楓の唇がゆっくりと離れた。その顔は夢でも見ているかのような甘い表情を浮かべている。そのまま楓は稟の顔を見つめ続ける。

「……楓……？」

「あ……」

稟の声に自分が何をしたのか気づいたようだ。赤かった顔がさらに赤くなり、小さな声を漏らす。

「あ、あの……私……その……」

「……」

「ご、ごめんなさいっ！！」

謝罪の後、楓は脱兎のごとく教室を飛び出していった。後には、
唖然としたクラスメイト達が残されていた。

その五（後書き）

一応原作沿いに進んでいます。
原作そのままな部分が結構あります。

その六（前書き）

やけに気分が乗っているので連続投稿します。

その六

「ありがとう。助かったよ、柳」

「どういたしまして」

帰り道、感謝する稟と苦笑してそれを受ける柳哉がいた。あれからクラスメイトだけではなく、ＫＫＫのメンバーも参加しての土見稟に対する事情聴取、という名の弾劾裁判、あるいは精神的拷問が開かれるところを柳哉が阻止したのだ。説得はまず不可能、ということで力づくでだが。

「でも柳、あんなに強かったんだな」

「ま、鍛えてるからな」

柳哉はクラスメイト達はともかく、ＫＫＫに対してはあまり良い感情を持っていない。実力行使をすることに躊躇いは無かった。

「それにああいう連中は基本、一人じゃ何もできないから群れてるわけだからな。俺はそういうのは嫌いだし、それに……」

「それに？」

「一対一ならまだいい。だが一人に対して複数でかかるような奴も嫌いだ」

まあ、圧倒的な実力差があるなら話は別だけどな、と言って笑う。

「で、話は変わるが……」
「……楓のことか？」
「ああ、何か心当たりは？」
「……ああ、昨日な……」
少し逡巡したが話すことにしたようだ。口調こそ軽いが柳哉の表情が真剣だったこともある。
「ふむ」
「どう思う？」
「まあ、その場の雰囲気に流されて、というのもあるかもしれない」
あんな暴露話（シアのファーストキス話、しかも相手が稟）のすぐ後だ、意識もするだろう。
「そういうものなのか？」
「女って生き物はそういうものらしい。あくまでも予測だからな？」
女は酒にではなく、ムードに酔わせろ、なんて言葉を聞いたこともある。あながち間違ってもいないだろう。
「それに楓のお前への想い……気づいていないわけじゃないだろう？」

「……ああ、でも……」

「距離が近すぎてそういう対象には成り得ない、か？」

「……」

当たりらしい。

「ま、あまり思い詰める前に誰かに相談しろよ。俺でもいいし、あとは桜とか亜沙先輩とかな」

「ああ、ありがとう、柳」

柳哉に感謝する。八年前の事件にはこの幼馴染は自分達三人とは違って直接的には関わっていない。桜からの手紙である程度までは知っているだろうが、それも十一歳頃までの話だ。その後の話は桜からも聞いているようだが。

「？　亜沙先輩が知ってるって何で知ってるんだ？」

「ああ、中学時代からの知り合いだって言ってただろう？　自己紹介の時に。違ったか？」

「いや、違わないけど。やけに鋭いな」

「お前達同様、色々あった、ってことだ」

それを稟達が知るのはかなり先のことになる。

＊　＊　＊　＊

その夜、夕食後。

「稟くん、牛乳を切らしちゃったので買って来ますね」

「ああ、俺も行くよ」

「一人で大丈夫ですよ？」

「ちょっと買いたい物もあるし、護衛も兼ねてな」

そう言って稟は楓と共に家を出た。

＊　＊　＊　＊

買い物を終えて、家路に付く。結局稟は何も買わなかった。そもそもそれはただの口実でしかない。

「なあ楓、ちょっと寄り道しないか」

「はい、いいですよ」

そう言って光陽公園へ向かう。楓と話をするためだ。

柳哉と分かれ、帰宅した稟を待っていたのはいつもと変わらない様子の楓だった。あまりにもいつも通りなので拍子抜けしてしまい、話すタイミングがつかめなくなったのである。

「……いい風ですね」

「……ああ、そうだな」

しばし、風に身をゆだねる。残暑が厳しいとはいえ、秋の到来を感じさせる。そんな風だった。沈黙の後、稟が口を開いた。

「楓、昼間のことだけど、どうしてあんな……」

「好きだからしました」

「……」

即答され、言葉に詰まる稟。

「あれは、多分私の願望だったんだと思います。稟くんのことが好きで好きでたまらないのに……だけど一歩下がってしまっていた私の……」

今まではそれでも良かったのだろう。しかし、

「その……昨夜の件で……意識するようになってしまって……」

「昨夜って……あの時の……？」

はい、と頷く楓。顔を赤らめている。恥ずかしいのだろう。

「私は、稟くんのことが好きです」

まっすぐな告白。だが、

「俺は……」

答えられない。少なくとも楓に対して好意を抱いているのは確かだ。しかし本当に一人の男として楓を愛しているか、となると自信が無い。こんな中途半端な想いで楓の告白を受け入れてもいいのだろうか？　葛藤する稟。

「答えてくれなくてもいいです。いえ、むしろ答えないでください」

「？　どういう……」

「一人の男性として……この地球上でただ一人の相手として……芙蓉楓は土見稟くんを愛しています。」

ですから、と続けて、

「私を、好きにならないでください」

困惑する稟。当然だろう。愛している、という告白の後に、自分を好きになるな、とはどういうことなのか。

「私には、稟くんに愛してもらう資格なんて無いんです。勝手なことを言っているのはよく分かっています。稟くんが怒っても仕方のないことだと思います。でも……」

好きでいさせてください。そう言った楓に稟は何も言えなくなってしまった。

＊　＊　＊　＊

あれから、どうやって帰ってきたのか全く記憶が無い。気づけば自室のベッドの上だった。明かりを点けてさえいない。

（……どういうことなんだ……？）

楓の考えていることが分からない。愛している、でも好きになるな？　明らかな矛盾だ。

（……）

八年前のことが関係しているのだろうか？　いやでもそのことは気にするな、と言っている。

（……分からない……）

ふと喉の渇きを覚える。不思議なもので、自覚した途端に水分が欲しくなる。少し気分を変えよう、とキッチンへ向かう。冷蔵庫から麦茶を出してコップに注ぎ、一気に煽（あお）る。ついでに軽く顔を洗う。煮詰まっていた頭が冷えていく感覚があった。

『あまり思い詰める前に誰かに相談しろよ』

それと同時に今日、柳哉が言っていたことを思い出す。時計を見る。午後九時半。大丈夫だろう。

（……よし）

柳哉に話す時が来たようだ。予想外に早かったが、結局遅かれ早かれ話すことになっただろう。両頬を軽く叩いて気合を入れ、電話機に向かう。

（こんな時携帯電話があれば便利なんだろうな）

意外かもしれないが現在、芙蓉家で携帯電話を所有しているのは幹夫だけだ。居候の身でそこまでの贅沢はできない、というのが稟の言い分であり、稟くんが持たないのなら私も、というのが楓の言い分である。

（アルバイトでもするかな）

そんな事を考えながら受話器を取った。

その六（後書き）

ちなみに“ＳＨＵＦＦＬＥ！”本編中では携帯電話を使用する描写がありません。
もっとも、作者が見逃しているだけかもしれませんが。

その七（前書き）

ユニーク件数が４０００件を突破しました！
ありがとうございます！

その七

「ん？」

「どうしました？　兄さん」

それには答えず、携帯電話を取り出し、ディスプレイを見る。表示されているのは芙蓉家の電話番号だ。この時間なら稟だろうか？

「もしもし」

『もしもし、柳か？』

やはり稟だ。

「ああ、というかどうしたんだ？」

『悪い。ちょっと相談があるんだが、今大丈夫か？』

「時間だけの話か？　それとも……」

『良ければ直接会って話したい』

「ん、分かった」

場所を決めて電話を切り、菫に詫びる。

「すまないが今日は一人でやってくれ」

「それは構いませんけど……稟さんですか？」

「ああ。どうやらかなり深刻みたいだ」

「そうですか」

時刻は九時半過ぎ。友人とはいえ呼び出すには少し遅い時間だ。それだけ深刻なのだろう。

「それじゃ、ちょいと行ってくる」

「はい」

そう言って柳哉は待ち合わせ場所の緑公園へ向かった。

＊　＊　＊　＊

「ていっ」

近くから聞こえた掛け声に気づいて顔を上げると、何かが顔面に向かって飛んできた。慌ててそれをキャッチする。

「あっぶないな」

親衛隊との鬼ごっこである程度慣れているとはいえ、顔面に向けて何かが飛んでくればやはり驚く。

「こんばんは。それは差し入れみたいなものだ」

と、先程キャッチしたものを見る。紙パック入りのジュースだ。柳哉の手にも同じものがある。

「ありがたくいただくよ」

「おう、それで少し頭を落ち着けろ」

「気づいてたのか」

「そりゃな。お前の周りだけ、夜だってのにそれ以上に暗かったからな」

そんなに暗かっただろうか？　まあ今の状態では仕方ないのかもしれない。柳哉がジュースを投げてきたのもそんな空気を変えるためなのだろう。

「んで？　こんな時間に呼び出してどうしたんだ？」

聞きながら柵に座り、パックにストローを刺す。稟もそれに倣う。ちなみに稟はブランコに座っている。

「……いきなりだな」

「言えた義理か？」

確かに。少し苦笑いをして、稟は事情を話し始めた。

＊　＊　＊　＊

「愛しています、だから私を好きにならないでください、か……」
「どう思う？」
んー、と考える柳哉。色々と推測を巡らせてみる。
「それだけじゃ何とも言えないな。判断材料が足りない」
「……」
「でもまあ、おそらく……」
「？」
「八年前の件が絡んでるのは確かだろうな」
というかそれ以外考えられないし、思いつかない、と柳哉は言う。
「楓には気にするなって言ってるんだぞ」
「いや無理だろう。気にしないわけがない」
「いや、でも……」
「考えてみろ。もしお前と楓の立場が逆だったとして、楓に“私は気にしていないですから稟くんも気にしないでください”って言われて“分かった、気にしない”って言えるか？」

「！　それは……」

「ま、言えるわけないな」

「……」

内心で胸を撫で下ろす。もしここで稟が“言える”と答えたなら、稟との付き合い方を根本的に変えなければならなくなるところだった。

「なあ稟」

「……何だ？」

「桜からある程度まで聞いちゃいるが……結局どういう経緯でそうなったんだ？」

「……正直、あんまり気持ちのいい話じゃないぞ？」

「俺が自分の意思で聞くんだ。気分が悪くなったとしてもそれはあくまでも俺の自己責任だ」

その言葉を聞き、稟は話し始める。八年前の事件の内容とその後の出来事を。

＊　＊　＊　＊

「……なるほどね」

「……笑わないのか？」

「どこに笑う要素があった？」

呆れる要素ならいくつかあったが。稟はどうやら“子供の浅知恵”あるいは“馬鹿な事をした”と思っているようだ。

「その時はそれが最善だと思ったんだろう？　それに、過去の事に関してなら誰にでも最善策が言えるもんだ。自分が関わってない事をああだこうだ言うつもりもない」

絶対に正しい対処法などというものは存在しない。例えば“１＋１＝２”という数式でさえ絶対に正しいわけではない。世の中には“１＋１＝２”という数式が成立しない世界が確かに存在している。日常生活の中では触れる機会が無いだけの話なのだ。

「しかし、お前は本当、相変わらずだよな」

「どういうことだ？」

「相変わらず馬鹿だってことさ。しかも底抜けのお人好しときてる」

「いや馬鹿って……」

「褒めてるんだよ」

全く褒められている気がしない。

「ま、どうにか糸口は掴めた」

「本当か！？」

「ああ、とはいえまだ確証があるわけじゃない。言ってしまえば俺の妄想でしかない」

ほぼ確信だとは思うが。

「だからこそ、だ」

桜と亜沙先輩にも聞きに行く、と言った柳哉に渋い顔をする稟。

「わざわざあの二人に聞かなくても……」

「お前の言いたいことは分かる。二人に迷惑掛けたくない、とか特に桜には辛い記憶を思い出させたくない、とかそんなところだろ？」

図星を指されたのだろう。黙り込み、ストローに口をつける。

「稟、お前はあの二人のこと、好きか？」

「！？」

不意打ちを食らって思いっきり吹き出す稟。

「おまっ……何を……」

文句を言おうとするが、柳哉の真剣な表情を見て口をつぐむ。

「異性として、じゃなく人として好きかどうかを聞いてる」

「……そりゃあ好きに決まってる」

「そうだな。同様に二人もお前のことが好きなわけだ。そして」

「そして？」

「好きな人の力になりたい、と思うのはおかしなことか？」

別におかしくなどない。むしろそれが普通だろう。実行するかしないかは別として。

「でも、迷惑じゃないのか？」

「確かにな。うざい、とか面倒くさい、とか思う時だってあるだろう」

「なら「でもな」……」

「まあ、しょうがないか、っていう風にも思える」

――友達とか仲間っていうのは、そういうものだろう？――

「！」

そう言った柳哉の顔には柔らかな笑みが浮かんでいた。

その七（後書き）

ちなみに最後の柳哉の台詞は某ＰＣゲームの某キャラの台詞をちょこっといじったものです。

その八（前書き）

初投稿から一ヶ月が経ちました。
ＰＶ数２９３５０件、ユニーク数４４１８件、お気に入り登録件数１８件。
ありがたい限りであります。

その八

翌日、土曜日の昼過ぎ。亜沙は光陽公園に来ていた。

「桜！」

「あ、亜沙先輩。お久しぶりです。お元気でしたか？」

「うん、ボクはこの通り元気、元気」

光陽学園時代からの知り合いで同じ町に住んでいるとはいえ、通っている学校が違うこともあって、夏休み中は海に行った時以外ではほとんど顔を合わせていなかった。

「？　柳ちゃんはまだ来てないの？」

「はい」

「むう。女の子を呼び出しといて遅れるなんて。何か美味しいものでもおごってもらわないとね」

亜沙の発言に苦笑いの桜。待ち合わせの時間まであと三十分は優にある、という事実はどうやら完全に無視されているようだ。

「では何をご所望ですか？」

「！！」

「！！」

突然、しかもすぐ近くから聞こえてきた声に驚く二人。声の主はもちろん柳哉だ。

「もう！　びっくりするじゃない！」

「それが俺のアイデンティティの一つなので」

「あはは……」

抗議する亜沙と全然悪びれていない柳哉、そして苦笑する桜だった。

「それで、何にしますか？」

「何が？」

「忘れてるならそれでも構いませんが」

「えっと、何か美味しいものでも〜の件（くだり）じゃないですか？」

桜の台詞に、

「え？　おごってくれるの？」

「いやなら別に構いませんが？」

「そんなわけないじゃない！」

結局、光陽公園内に出ていたアイスクリームの屋台でおごること

になった。
「ん～美味しい！」
「本当ですね」
「おごりならなおさら、と」
亜沙はチョコミント、桜はストロベリー、柳哉はオーソドックスなバニラを選択した。
「柳ちゃんはバニラ好きなんだ？」
「そうですね。まあ、基本的に甘い物は好きなんで」
「ふーん。ちょっと意外……ってこともないかな。柳ちゃんってよく見ると女顔っぽいもんね」
「よく言われます」
肩をすくめる柳哉。
「昔からだもんね。甘い物が好きなのも、女の子に間違われるのも」
「さすがにこの歳じゃもう間違える奴はいないけどな」
「ていうか間違われてたの？」
「小さい頃ですけどね」

稟達と出会ってからこの町を離れるまでの間、柳哉は稟達と一緒にいることが多かったのだが、男の子二人と女の子二人、ではなく、男の子一人に女の子三人、と見られることが大半だった。おかげで稟は大人たちから、『三人の内誰が本命なんだい？』などと聞かれることもあった。そのたびに稟は事情説明に追われ、時には悪ノリした柳哉に『誰が本命なの？』などという質問をされることもあった。

「ぷぷぷ……ちょっと見たかったかも」

「亜沙先輩はさらに引っ掻き回しそうですね」

「というか収拾がつかなくなるんじゃ……」

そう言う桜も口元が笑っている。当時のことを思い出したのだろう。

アイスクリームを食べ終わり、ゴミを始末した後、柳哉は二人を見る。

「それで、今日わざわざ二人を呼び出した理由なんですが」

「うん」

「……もしかして……楓のこと？」

「ええ、そうです」

よくわかりましたねの言葉に、三年の方にも話が伝わって来たから、と返す。

「楓ちゃんがどうしたの？」

「ああ、昨日と一昨日のことなんだが……」

＊　＊　＊　＊

「そっか、そんなことが……」

「楓ちゃん……」

シアのファーストキス話、脱衣所での出来事、放課後のキス事件、そして『好きにならないでください』の発言、それらの全てを柳哉は話した。

「おそらく、楓の言動の原因は八年前の事件に関連してると思われるので、二人に話を聞きたい、というのが呼び出しの理由です」

「……」

「……ねえ柳ちゃん、それを聞いてどうするの？」

口を開いたのは亜沙だった。

「……」

無言の柳哉。どうやら言葉を探しているようだ。

「友達の力になりたい、という理由では納得できませんか？」

「……」

「昨夜の九時半です。稟から話があるから会いたい、という電話が来たのは。それだけ稟も切羽詰まっていたんでしょう。実際、表情にも余裕が無かった」

「稟君、そこまで……」

「それだけ頼られたんなら、答えなきゃ男が廃(すた)る、ってものだ」

おどけたように言う柳哉だが表情は真剣だ。

「……実を言うと、ある程度の予測はついています。そしてその対処法も。ただ……」

「ただ？」

「もしそれが間違っていた場合、最悪、俺は稟と楓に絶交を言い渡されるでしょう」

「！！」

「！！」

驚愕する亜沙と桜。柳哉は言葉を続ける。

「その可能性を限りなくゼロに近づけるために二人からも話を聞きたいんです」

「で、でも稟君からも聞いてるんだよね？」

「正確に言えば稟からしか聞いていない。楓からも聞くけど、それは最後にだ」

楓にそれを聞くのは“対処”する直前だ。でなければ意味が無い。

「でも、ボク達の話を聞いても……」

似たり寄ったりのものでしかない、そう言いたいのだろう。

「いえ、内容はいいんです。ただ、色々な視点から見たいだけの話です」

当事者である稟と楓、巻き込まれる形になった桜、外から見ていた亜沙、そして手紙という形で関わっていた柳哉、この四つの視点から。

「欲を言えば、幹夫さんにも話を聞きたい所ですけどね」

仕事の邪魔になってはいけないから、と笑う。

「……うん、分かった」

「桜？」

亜沙が声を上げる。

「ただし！」

桜が語気を強める。

「どういう“対処”をするのかをちゃんと教えること！　一人で全部背負うなんて許さないからね！」

当時、桜から送られてきた手紙の内容を思い出す。稟や楓はどうして自分に話してくれないのか？　どうして自分を頼ってくれないのか？　どうして自分達だけで背負おうとするのか？　といった内容が数多くあった。大切な幼馴染達が苦しんでいるのに自分は何もできない。いや、何もさせてもらえない。どれだけ苦しかっただろうか。かつての自分を思い出し、苦笑する。母や妹も同じ想いを抱いていたのだろう。

（待てよ？　もしかして“あの感情”の正体はまさか……）

「柳ちゃん？　聞いてるの？」

「ああ、すまない。それと……」

「？」

「ありがとう、桜」

そう言って柳哉は微笑んだ。桜も安心したように笑う。

「もう！　これでボクがいやだって言ったら、ただの空気読めない子じゃない！」

亜沙が怒ったように言う。確かに。

「お願いできますか？」

「桜と同じ条件でなら、ね」

「もちろんです。ありがとうございます、亜沙先輩」

（稟、楓。お前達は本当に果報者だよ）

内心で幼馴染達に語りかける。自分もそんな彼女達と同じ時間を過ごしたかった。しかし、同じ時間を過ごさなかったからこそ、この対処法が取れる。

（ま、俺は俺にできることをやっていこう）

まだ時間はあるのだから。

その八（後書き）

難産のわりに出来が悪いです……。

その九（前書き）

モチベーションが上がらず、投稿が遅れました。申し訳ありません。

その九

その日の夕方、柳哉は稟を昨夜と同じ緑公園に呼び出していた。

「……で、どうだったんだ？」

「まあ、ほぼ間違いないだろうな」

後は楓から話を聞くだけだ、と言う柳哉を少し不満げに見る稟。

「不満か？」

どうやら顔に出ていたらしい。

「……正直に言えば、な」

当時のことを語るのは楓にとって苦痛だろう。稟が不満を持つのも無理はない。

「なあ稟、一つ聞きたいんだが」

「なんだ？」

「お前は楓と恋人になりたいんだろう？」

「……は？」

「……へ？」

何かがおかしい。

「だから楓と恋人になりたいんだろうって聞いてるんだが？」

「いやいきなりそんなこと言われても……」

「……そういうことか……」

柳哉が状況を理解するのと同時に、しまった、とでも言わんばかりの表情が浮かぶ。そう言えば昨夜相談を受けた時にも稟は“楓と付き合いたい”などとは一言も言っていない。ただ内容から柳哉がそう予想しただけに過ぎないのだ。とは言え、柳哉を責めるのは酷、というものだろう。

「……お前は何というか……色々紛らわしいな……」

「いや、どういうことなんだよ」

どうやら稟はまだ気づいていないようだ。

「つまりだ、昨夜お前から受けたのは“恋愛相談”だと俺は判断しているんだが、お前にとってはそうじゃないってことだろう？」

「いや恋愛相談って、どうしてそうなるんだ！？」

「今まで通りの関係でいたいのなら、別に悩むことなんて無いだろう？　何せ、楓の態度が以前と変わらないんだから。故に俺はお前が楓との関係の変化を望んでいる、と受け取ったんだが？」

「！」

ようやく気づいたようだ。柳哉は深いため息をついている。無理もない。

「いやでも……」

「デモもストもあるか。お前はどうしたいのか、もうちょっと考えな。話はそれからだ」

疲れたように言って柳哉は緑公園を後にした。

「……俺は……どうしたいんだ？」

柳哉が去った後、稟の口からはそんな言葉が発せられていた。

＊　＊　＊　＊

「ただいま」

「おかえりなさい……ってどうしたんですか？」

菫の言葉に苦笑する。顔には出さないようにしていたのだが。

「こんなにあっさり悟られるとは、俺もまだまだだな」

「いえ、私とお母さんくらいにしか分かりませんよ？　多分」

「多分かよ」

そう言って妹の頭を軽く撫でる。

「何するんですか」

口調こそ不満そうだが実際はそんなに嫌がってはいない。というのも、柳哉は髪の毛の扱いが上手い。幼い頃から母、玲亜によって髪や肌の手入れを仕込まれているせいもある。そのため柳哉は男性としては珍しく、髪や肌に気を使っており、風呂に入っている時間も長めだ。さすがに玲亜や菫よりは短いが。

「今日は母さんは？」

「遅くなるそうです。日が変わる前に帰れるかどうか分からないそうです」

「そうか。で何を作った？」

「メインは肉じゃがです。後は……」

そんな会話を交わしつつ、兄妹はダイニングに向かった。

＊　＊　＊　＊

緑公園から帰宅し、夕食を摂った後、稟は自室のベッドの上で考えていた。

（俺がどうしたいのか、か……）

柳哉の言ったことはもっともだ。自分が柳哉と同じ立場で昨夜のような相談を受けたら、やはり恋愛相談だと判断するだろう。言われてから気づく自分もどうかと思うが。

（いや、今はそんなことを考えてる場合じゃない）

頭を振って思考を切り替える。今考えるべきなのは“自分がどうしたいのか”だ。

（俺は楓との関係の変化を望んでいるのか？）

“あの後”も態度の変わらない楓。いつも通りの日常を望むのならそもそも変える必要はない。柳哉の言っていたことは正論だ。だがそれに納得できない自分がいる。ならば関係を変えるべきなのか？　変えるとしてもどのように変えるのか？　楓と恋人になるのか？　いやそもそも楓の考え自体が分からない。というかそんな動機で楓と恋人になるなんて楓だけでなくシアやネリネにも失礼だ。

「もしかして……」

唐突に思いついた。関係を変えるのではなく、自分が変わりたいのではないか？　このどこかぬるま湯に浸かっているような生活を送っている自分を。楓やシア、ネリネのように自分に好意以上のものを持ってくれている人達に甘えている今の自分を。そう考えると心の中にあったどこかもやもやしたものが消えていくのが分かった。

（自分を変えていくためにも、まずは……）

時計を見ると、既に日が変わっている。さすがにこの時間に電話

するわけにはいかない。朝一番で電話をしよう。そう決めて眠りについた。

その九（後書き）

前回に引き続き、難産でした。
ツッコミ等有りましたらご遠慮なくどうぞ。

その十（前書き）

いよいよ第二章も佳境に入ってまいりました。

その十

翌日、午前九時。昨日の夕方同様、緑公園に稟と柳哉の姿があった。もっとも、今回呼び出したのは稟の方だが。

「で、結論は出たのか？　やけに早かったが」

「ああ」

そう言って頷く稟。その顔を見て若干苦笑いする。

（心を決めたら後は行動あるのみ、か。まったく、そのあたりは昔から変わらないな）

当たり前の事のように思うだろうが、これを実行できている人は意外に少ない。心を決める所まで行っても、なかなか行動に起こせない、という人も多い。昔から“当たり前の事が当たり前にできる”という大きな美徳を持つ稟がやけにモテるのも当然の事なのかもしれない。事実、柳哉もそんな稟に“惚れた”クチである。断っておくが、稟にも柳哉にもＢＬ及び同性愛な趣味は一切無い。無いったら無い。

「どうしたんだ？」

「……いや、何か変な電波を受信したような気が……」

気にするな。

「まあ、それはいいとして、だ。答えを聞こうか」

「ああ、俺は楓との関係を変えたい。楓と恋人になるためじゃなくて、自分を変えるためにだ」

柳哉は黙っている。何か言いたそうだが、最後まで聞いてからにするようだ。そんな柳哉に内心で感謝しつつ、言葉を続ける。

「思えばさ、俺はずっと甘えてたんだ。このどこかぬるま湯に浸かっているかのような生活に、それを提供してくれる楓や桜、シアやネリネ、他にもたくさんの人達に」

稟の独白が続く。

「ずっとこのままの生活を続けていきたい、そう思う心も確かにある。でも、それじゃだめなんだ。ずっと続いたりなんかはしない。いつかは終わってしまう。このままじゃそれが終わってしまった時、俺は何もできなくなる。自信を持って言える」

稟の口調はどこか自嘲気味だ。無理もない。

「だからこそ、だ。自分を変えるために、まずは楓との関係を変えたい。そして、少しでも楓と対等の立場になりたい。今のままだと、きっとダメになるから。恋人云々の話はそれからだ」

そうして稟は柳哉に向けて口を開く。

「これが、俺の答えだ」

伝えたい事は全て伝えた。後は柳哉次第だ。その柳哉は真剣な表情で沈黙を保っている。稟は柳哉を注視している。

やがて柳哉の表情がほぐれた。

（今のお前の姿を鉢康さんと紫苑さんが見たら、泣いて喜ぶだろうな、きっと）

「へ？」

「いや、なんでもない」

そう言って、表情を改める。

「覚悟は、できているな？」

「ああ」

「後悔するかもしれんぞ？」

「何もせずに後悔するより、何かして後悔するほうがよっぽどいい」

かつて柳哉の父、草司が言った言葉を真似る稟に苦笑する。

「分かった。手を貸そう」

「ありがとう」

「礼を言うのはまだ早いだろう」

「手を貸してくれることに対して、だよ」

肩を竦（すく）める柳哉。

「それじゃ、さっさと済ませるか」
「今すぐにか？」
「ああ。稟もちゃんと準備しとけよ」
「？」
柳哉がやるのはあくまでも手助けだ。最終的には稟自身がどうにかしなければならない。
「……確かにそうだな」
「おいおい、大丈夫か？」
「ああ。というか大丈夫じゃなくてもどうにかするさ」
当てはある。あとは“あの約束”を楓が覚えていてくれれば……。
それから少し話し合った後、柳哉は稟と別れた。

＊　＊　＊　＊

稟と別れてすぐ、柳哉は携帯電話を取り出し、ある人物に連絡をとった。
『もしもし？　どうしたの柳ちゃん』

「桜、すまないが少し頼まれてくれないか？」

『……昨日の事？』

「ああ、そうだ」

『……』

無言。どうやら少し不満のようだ。

『……どうしても、やるの？』

「ああ。さっきまで稟とも話してたんだがな……」

『どうしたの？』

「“男子三日会わざれば活目して見よ”とは言うが、まさか一日足らずでああなるとはな」

『何かあったの？』

「ま、それは稟本人と会った時のお楽しみ、ということで」

『？』

それから少し打ち合わせをした後、電話を切った。

その十（後書き）

第二章終了まであと二～三話ほどでしょうか？
当初は十話程度で収めようと思っていたんですが。

その十一（前書き）

何というか、色々無理があるような……。

その十一

その日の夕方、楓は商店街へ夕食の買い物に出ていた。

「よう楓、買い物か？」

後ろから掛けられた声に振り向くと、見知った幼馴染の姿があった。

「あ、はい。柳君もですか？」

「いや、俺はちょっと暇つぶしに」

そう言って楓の持つ買い物袋を見る。半透明の袋からはじゃがいもや人参、牛乳のパックなどが見えている。

「今晩はシチューか？」

「はい、クリームシチューにします」

少し笑って楓が答える。

「買い物はそれだけか？」

「はい、そうですけど」

「ふむ、それじゃ荷物持ちといきますか」

「え、でも……」

「気にするな。暇つぶしだって言ったろう？　それに、帰り道は同じなんだからさ」

楓はまだ逡巡（しゅんじゅん）している。続けて柳哉は言った。

「男っていう生き物はな、太古の昔から“ええかっこしい”なんだよ。遺伝子レベルでな」

だからかっこつけさせてくれ、と続ける柳哉に苦笑して楓は言った。

「それじゃ、よろしくお願いしますね」

「ん、まかされた」

そう言って楓から荷物を受け取る。

（これが稟だったら、頑として断ってるんだろうな）

とりあえずは成功。これで芙蓉家に向かう大義名分ができた。ちなみに水守家は芙蓉家から歩いて五分ほどの近場にある。楓が了承したのもそういった理由からだろう。

そうして柳哉は楓と共に芙蓉家に向かった。

（もしかしたら、これが楓と過ごせる最後の時間かもしれないな）

楓は柳哉のそんな内心にはまるで気づいていなかった。

＊　＊　＊　＊

「ただいま帰りました」

「お帰り、楓って柳も一緒か」

「何か不都合でもあったか？」

にやり、としか形容のしようが無い笑みを浮かべる柳哉。

「いや、別にそんなことは……」

「ふーん？」

「だからその亜沙先輩や麻弓を彷彿（ほうふつ）させる笑顔をやめろ」

「へいへい」

まったく、とため息をつく稟。そこへ、

『稟、一度部屋に戻れ』

突然、頭の中に声が響いた。

「え？」

「稟君、どうかしましたか？」

「……いや、今何か声が聞こえたような……」

「そうですか？」

楓には聞こえなかったようだ。と、

『稟、これは“念話”と呼ばれる魔法の一種だ。それを使って、今話し掛けている』

また聞こえた。もしや、と思い柳哉を見ると、小さく頷いている。

『言いたい事を頭に浮かべればこちらでそれを拾えるから、そうしてくれ』

『……これでいいのか？』

『ああ、問題ない』

「あの、稟君？　大丈夫ですか？」

はっと気づくと楓の心配そうな表情が目の前にあった。

「ああ、大丈夫だ。ちょっとボーっとしてたみたいだ」

「おいおい、ボケるにはまだ早いだろ」

お前が言うな、とツッコミを入れたかったが、“念話”による会話は楓には聞かれたくないようなので我慢する。

「楓、夕食の準備しなくてもいいのか？」

「あ、そうですね」

そう言って楓は柳哉から荷物を受け取ろうとするが、柳哉はキッチンまで運ぶようだ。

『すぐに部屋に戻りな』

『……分かった。でも何でだ？』

『これから楓にあの時の事を聞くんだが、お前がいたら話し辛くなるだろう？』

それより、と続ける。

『準備はできてるのか？』

『ああ』

『なら稟は俺がいいと言うまで部屋で待機。まあ予習でもやってろ』

『トイレとか行きたくなったらどうすればいいんだ？』

『我慢しろ。そんなに時間は掛からないだろうからな』

そこで“念話”は切れた。しょうがない、と思って稟は部屋に戻ろうとするが、そこでそれに気づく。

「器用な奴だな……」

柳哉が稟と“念話”を交わしながら、同時に楓とも会話を交わし

ていた事に。

＊　＊　＊　＊

「楓、少し話があるんだが」

「何でしょうか？」

買ってきた食材をシンクの上に並べて、いざ調理に取り掛かろうとしていた所へ柳哉が話しかけてきた。

「……」

「？」

少しの逡巡の後、柳哉は口を開いた。

「ある程度の所までは聞いているんだがな……八年前のあの事件の後の事だ」

「！！」

楓の顔に驚愕が浮かび、続いて苦しげな表情へ変わる。

（まあ、当然だろうな）

柳哉の予想が正しければ、それは楓にとっては拭い難い罪の証なのだから。

「どうして……でしょうか？」

その事を証明するかのように震える声で問う楓に、柳哉は言葉を発した。

「光陽町（この町）に帰ってきてから、正確には楓と再会してからかな、お前に対してどうも奇妙な感情を抱いている自分がいるんだ」

恋愛感情ではない、ということは断言できる。しかし、

「意味不明な感情ってのはどうにも気持ち悪くてな、もしかしたら……その事が関係してるんじゃないかと思ってな。まあ、ただの勘だが」

そう言って苦笑する柳哉。

「勘……ですか？」

「ああ。そして困った事に、この手の勘は外れた例（ためし）が無い」

なので話してもらえないか、と言う柳哉。しかし、楓は沈黙している。

（さすがに無理があったか？）

だが、本来の目的を話す訳にはいかない。対処ができなくなってしまう。

「……分かりました」

「……いいのか？　自分で言っておいて何だが」

「はい、それに……」

「それに？」

柳君には知っていてもらったほうがいい、と思いますから、と楓。

「……それは“勘”か？」

「はい、“勘”です」

そう言って楓は少し微笑んだ。

その十一（後書き）

第二章はあと二話で終わります。いや終わらせます。

その十二（前書き）

今日明日で連続投稿して第二章を終わらせようと思います。

その十二

「……なるほど」

楓の口から語られた八年前の事件とその後の出来事を聞いた柳哉が発したのはそんな短い台詞だった。

（予想していたとはいえ、結構ハードな内容だったな。それに……）

話し終えた楓は俯（うつむ）いており、膝の上に置かれた両手は小さく震えていた。無理も無い。言ってみれば、自分の罪状を告白したようなものなのだから。いくら稟が“気にするな”と言ったところで、楓自身の罪の意識が消えることは無いだろう。こればかりは他人がどうこうできるものではない。楓自身の意識が変わらないかぎりは。

（とはいえ、意識を変えるわけにはいかないだろうな）

下手をすればかつての自分と同じことになる。それだけは避けなければならない。そのために……

「楓」

「はい」

「俺は、お前を許さない」

「え……？」

その言葉を発した。

＊　＊　＊　＊

一瞬、理解できなかった。つい半月ほど前、八年ぶりに再開した幼馴染の口から出た言葉が。そしてそんな楓を見た柳哉は再度口を開く。

「俺は楓を許さない。ある程度は自業自得とはいえ、俺の大切な幼馴染を傷つけた楓を許さない」

ちなみにこの“大切な幼馴染”には稟だけでなく桜も含まれる。

「何があろうと許さない。例え稟が許しても、桜が許しても、楓自身が許しても、世界中の全ての人が許しても」

――俺だけは、水守柳哉だけは、芙蓉楓を、未来永劫、許さない――

「！」

柳哉が、決して冗談で言っているわけではないことを理解したのだろう。楓の表情が強張(こわば)った。そして、

「……っ！」

一言も発することなく、リビングを飛び出して行った。すぐに玄関が開く音がした。外に出たのだろう。

（やれやれ。どうやらうまくいきそうだ）

ふう、とため息をついた後、柳哉は携帯電話を取り出し、“協力者”に連絡をする。

「……ああ、うまくいった。方角は……光陽公園の方だな。ああ、よろしく頼む」

短い通話を終えると同時に稟がリビングに姿を現した。楓が出て行った事に気づいたのだろう。内心で苦笑しつつも、厳しい声で言う。

「俺が許可するまで部屋で待機してろ、と言ったはずだが？」

何かを言おうとしていた稟だが、柳哉の思いの外強い口調に言葉を飲み込む。しかし、

「柳、お前、楓に何をした！？」

「答える必要は無い」

「っお前！」

柳哉に掴みかかろうとする稟。しかしあっさりと回避され、体勢を崩したところで組み伏せられる。

「……くっ！」

悔しげにうめく稟。そんな姿を見て柳哉は稟を解放する。

「こんなことをしている暇があるのか？」

楓を追いかけることもせずに。

「お前が言うか！」

「飛び掛って来たのはお前の方だろう？　自業自得だ」

「ぐ……」

確かに。楓の事が心配なら柳哉の事など無視して楓の後を追えばいい。まあその場合は柳哉が力ずくで引き止めていたが。

「……で、行かないのか？」

「……後で詳しく聞かせてもらうからな！」

そう言って稟は芙蓉家を出て行った。故に稟は気づかなかった。

「後はお前次第だ、稟」

柳哉のその言葉に。

＊　＊　＊　＊

時間は少し戻る。

桜は自室で携帯電話を手に、昨日の事とこれから起こる事について考えていた。

（本当に、大丈夫なのかな……）

昨日、亜沙と共に柳哉から聞いた“対処法”。それは下手をすれば楓の傷を抉ることにもなりかねないものだ。当然桜も亜沙も反対した。しかし、柳哉の意思を覆す事はできなかった。

『古くから治療することを“手当て”と言いますが、どういう意味か知ってますか？』

『怪我とかをした所に手を当てて治療するから、じゃないの？』

実際のところは“手当て”という言葉そのものに既に“処置”という意味があるからであって、亜沙が言ったのは違うのだが。

『でもまあ、俺は亜沙先輩が言った意味の方が好きなんですけどね』

『そう。でもそれがどうしたの？』

『要するに、傷を治療するためには傷そのものに触れなきゃならないってことです。場合によっては傷をさらに広げたりする必要がある。手術なんかはその最たる例でしょう？』

『……』

『……』

沈黙する桜と亜沙。

『……心の傷、というものも例外じゃない』

傷というものは、ある程度までなら放っておいても自然に治るものだ。

『しかし、ある程度以上になると、放っておけば雑菌が入ったり化膿したりして悪化する。最悪の場合、命にも関わる』

ましてや心の傷のような目に見えない傷の場合、事態はさらに深刻になる。体の傷の場合、痛みや体調不良などのシグナルがあるものだが、心の傷の場合、本人がそれを隠してしまえば、周囲の人には分からないし、何より、傷の大きさがどのくらいなのかの判別が非常に難しい。“心”と言うものはそれだけ複雑なものなのだ。柳哉は実際には見ていないが、八年前の事件の際には楓が現実を受け入れられず、寝たきりになり、コミュニケーションすら取れなくなってもいる。

『とりあえず話は分かった』

納得はしてないけどね、と付け加える亜沙。しかし、

『あと、これに関しては俺一人でやる』

『なんで？』

続く柳哉の台詞に疑問を浮かべる桜。もっともな話だ。

『らしくないから、だよ。この方法が採れるのは関係者の中では俺だけだからな。桜や亜沙先輩がこの方法を採っても説得力に欠ける。ましてや稟なんか問題外だ』

『……』

『……』

反論できないのだろう。再び沈黙する桜と亜沙。

『今の俺にできるのはこれくらい。後は稟次第』

『……ねえ、一つ聞かせて？』

『何でしょう？』

『それで、楓は幸せになれるの？』

桜も同じ想いなのだろう。柳哉をじっと見ている。

『それは分かりません。あくまでも俺は手助けをするだけですから』

結局の所は本人達次第だろう。

『でも、俺は楓の幸せを願っていますよ。二人と同様に。それに……』

（大丈夫、だよね）

回想しながら桜は想う。稟も楓もとても苦しんだ。その分、二人には幸せになってほしい。……できれば、自分も一緒に。

（って、何考えてるの！　あ、でも……）

神界は一夫多妻制だ。なら楓と一緒に稟の奥さんになれるのではないか？　そんな事を妄想していると、携帯電話が着信を告げる。柳哉からだ。短い会話の後、桜は柳哉の指示通り光陽公園に向かう。そこに楓がいるはずだ。以前はほとんど力になれなかった。今度こそ、と決意して桜は家を出た。

その十二（後書き）

反響が恐ろしい事この上無いです。

その十三（前書き）

すみません。終わりませんでした。
明日こそは！
あと、独自解釈満載です。

その十三

（どうして？）

芙蓉楓は走っていた。

（どうして？）

答えの出ない問いを心に浮かべながら。

（どうして？）

目的も無く。

（どうして？）

ただ、走っていた。

＊　＊　＊　＊

「はあ、はあ、はあ……」

どれだけの時間を、距離を走っていたのだろうか？　呼吸を整えつつ、周囲を見回す。すぐにここがどこなのかが分かった。一昨日、稟と共に来た光陽公園だ。わずか二日前だというのに遠い昔の事のように思える。

「稟、君……」

愛しい人の名を呼ぶ。何故、どうしてこうなってしまったのか？

一昨日、ここで稟に伝えた事が原因なのだろうか？　いや、そもそも何故自分は逃げてきたのか？　頭がこんがらがって考えがうまくまとまらない。

（少し、落ち着かないと……）

そう思って噴水に近づく。水面に写った自分の顔を見て苦笑いが出る。自分では気づいていなかったが、涙で顔が酷いことになっている。流れる水から発せられる冷気のおかげで、少しづつ火照っていた体と頭が冷えていく。それにより、こんがらがっていた思考が回り始める。ついでとばかりに手を噴水の水に浸ける。

「冷たい……」

予想以上の冷たさに驚くが、かえって頭が冷えた。

（柳君……どうしてあんなことを……）

そして湧き上がる疑問。何故柳哉はあんなことを言ったのか？

ただ楓を傷つけるためだけに言ったわけではない事は、柳哉の人柄を考えればすぐに分かる。ならばそれ以外の意図があったのではないか？

「……っ！」

そこで唐突に思い当たった。もしかしたら柳哉は……

「……もしそうなら、柳君は……本当に酷い人ですね……」

そうつぶやき、楓は小さく微笑んだ。

「楓ちゃん？」

「え……？」

振り向く楓。そこには八年来の幼馴染が立っていた。

＊　＊　＊　＊

光陽公園の噴水前で、二人は向き合っていた。

「桜ちゃん、どうしてここに？」

「楓ちゃんこそ、どうしたの？」

「私は……」

どう説明するべきだろうか。とそこでひらめくものがあった。

「桜ちゃん、柳君に言われて来たんですか？」

「え、えっと、それは……」

挙動不審になる桜。その様子に笑みをこぼしながら、自分の予測が正しいことを確信する。

「桜ちゃん」

「え、えっと、何？」

「私は、幸せになってもいいんでしょうか？　そんな資格が私にあるんでしょうか？」

「楓ちゃん……」

不安そうに自分を見てくる楓を、桜は思わず抱きしめる。

「桜ちゃん？」

「楓ちゃん。私はね、幸せになる資格は誰もが持ってるものだと思うよ。それに……」

昨日、柳哉が言っていた事を思い出す。

『俺は楓の幸せを願っていますよ。二人と同様に。それに……』

「柳ちゃんも言ってたよ。『幸せにならなきゃ、生まれてきた甲斐が無い』ってね」

「……そうですか、柳君が……」

やはり自分の予測は正しかった。柳哉は楓を決して許さないことで楓を罰したのだ。罪には罰を。それが世の常識だ。楓のかつての行いは“罪では無い”とされた。法律上では明らかに犯罪だが、被害者である稟が加害者である楓をかばい、さらに隠蔽までしていた

ため、犯罪として立件されることは無かった。
本来、芙蓉楓は心優しき少女だ。土見稟との出会いにより、さらに他人の痛みにも気を配れるようになってもいる。その楓が、稟がついた嘘のせいとはいえ、明らかに罪と分かる行為に手を染めていた。そしてその嘘が暴かれた後も、稟は決して楓を責める事はしなかった。罪を犯したのに罰が与えられない。その事実を幸運だと受け止められればよかったのだろうが、そもそも楓はそんな事ができる子ではない。
柳哉にもそれは分かっていた。だからこそ楓を罰する、という行為に出た。とはいえ、いくら罰されたとはいえ、それで楓の稟に対する罪悪感、罪の意識が消える事は無いだろう。だが、ほんの少しだけだが、楽にはなるだろう。余裕もできるだろう。以前のままの楓だったら、遠からず潰れてしまっていただろうから。

「……本当に、柳君は……酷い人です……」

「え……？」

「だって……私は、楽になってはいけないのに……」

楽になってしまった。自分も幸せになっていいんだ、と思ってしまった。そんな事、許されないと思っていたのに。

「楓！　それに桜？」

「あ……」

「稟君……」

「……えっと、もしかして……お邪魔だったか？」

「「え？」」

思い出して欲しい。今の楓と桜はどんな状態なのか。答えを言ってしまえば、しっかりと抱き合っている状態である。しかも楓の顔には涙の跡も見える。いわゆる“百合の香り”が漂っている状態にも見える。

「「〜〜っ！」」

赤面しつつ離れる二人。シリアスな空気台無しである。

「で、大丈夫なのか？」

「は、はい。心配をお掛けしました、稟君」

「そっか。桜もありがとな」

「う、ううん」

そこで楓が口を開く。

「あの、稟君」

「？　何だ？」

「柳君を、責めないでくださいね？」

「……」

「……」

無言の稟。桜も口を閉ざしている。

「……分かったよ」

やがて根負けしたのか、稟が降参した。若干不満はあるようだが。

「ありがとうございます」

笑顔で感謝する楓。桜も笑っていた。

その十三（後書き）

何か色々と支離滅裂なような……。
精進します。
あと、桜の回想の中で柳哉の言った台詞は“ＲＡＩＮＢＯＷ―二舎六房の七人―”のアンチャンこと桜木六郎太の台詞そのままです。
アンチャンのかっこよさは異常。

その十四（前書き）

重ね重ね申し訳ありません。
明日こそは、明日こそは第二章を完結させます！

その十四

「ごめんなさい、稟君。すぐにお夕飯の準備しますね」

「ああ、別に急がなくてもいいぞ」

「はい、桜ちゃんはどうしますか？」

「うーん」

そんな会話を交わしつつ、芙蓉家に到着。玄関を開けると何やらいい匂いがしている。一同首を傾げつつキッチンへ向かうと、そこには柳哉がいた。

「よう、お帰り」

「柳？」

「柳ちゃん？」

「柳君？　その、もしかして……」

「ああ、そのもしかしてだ」

鍋にはクリームシチューが湯気を上げている。いい匂いの正体はこれのようだ。

「今夜はクリームシチューにするって言ってたろう？　まあ、あくまでも水守家流の味付けではあるけどな」

確かに買い物をしている時にそんな話をした。もしかしたらあの時から既にこの事態を予想していたのだろうか？

「腹減ってるだろう？」

そう言いながら楓がいつもしているエプロンを外し、本人に返す。というか結構似合っていたので誰もツッコミを入れていなかった。

「んじゃ、俺はお暇（いとま）するわ」

「え、あの、食べていかないんですか？」

「そこまで野暮じゃない」

「うん、そうだね」

桜も空気を読み、帰宅することにしたようだ。

「それじゃ、おやすみ」

「はい、あの、柳君」

「ん？」

「ありがとうございました」

頭を下げる楓に苦笑する柳哉。

「まあ、迷惑料ってことで」

「いえ、夕飯のことではなくて」

「？　それ以外で何か感謝されるような事があったか？」

悪戯っぽく笑って言う。まあ確かに、文句を言われこそすれ、感謝されるような事はしていない。

柳哉の意図を感じ取ったのか、楓も笑う。

「私が、勝手に感謝しているだけですから」

肩を竦める柳哉。と、稟の肩を掴み引き寄せる。

「後はお前次第だ」

それだけを言って、柳哉は桜と共に芙蓉家を出た。

＊　＊　＊　＊

帰り道。

「大丈夫そうだったね」

「まだそうと決まったわけじゃない」

後は稟次第だ。とはいえ、あの様子なら余程の事が無い限り心配はいらないだろう。

「でも、桜は良かったのか？」

「え？」

「稟の事」

八年前の時点でも楓と同様、稟に好意を寄せていた桜だ。これをきっかけに稟と楓が付き合い始めたらどう思うのだろうか。

「大丈夫だよ」

柳哉のそんな内心を察したのか、桜は微笑んで言った。

「私はね、柳ちゃんと同じ。稟君だけじゃなく楓ちゃんにも幸せになって欲しいんだから」

それにね、と続ける。

「神界でなら、楓ちゃんと一緒に稟君の奥さんになれるかな、とか考えちゃって……」

若干顔を赤くしながら言う桜に、大爆笑する柳哉。

「……そんなに笑うことないじゃない」

「いや、悪い悪い。しかしまあ、随分と逞しくなったもんだ。褒めてるんだぞ？」

「褒められてる気がしないよ」

若干むくれる桜。柳哉はそんな桜を先程の大爆笑の際に出た涙を拭いながら微笑ましげに見ている。

「ま、その当たりは楓と要相談、だな」

あと、シアとネリネも。

「稟君と、じゃないんだね」

「あいつに拒否権なんてものは無い。特にこの件に関しては」

酷い言い様である。が、妙に説得力がある。まあ、二世界の王からしてあれなのだから。

「それじゃ桜、お休み」

「うん。お休み、柳ちゃん」

八重家の前で二人は別れた。

＊　＊　＊　＊

夕食後、稟はある提案をした。

「花火……ですか？」

「今年は見るだけで、家では一度もやってないし。……どうかな、二人で」

時期的には若干遅いものの、暦の上ではまだ夏だから。そう言って稟が楓に見せたのは昼間の内に購入しておいた花火セットだ。打ち上げ花火なども欲しかったが、川辺などならまだしも、ここは住宅地だ。さすがに近所迷惑になるだろう。もっとも、両隣なら文句を言わないどころか嬉々として参加しかねない。それはそれでいいのだが、今回だけは遠慮したい。

「……そうですね。夏ももうあと少しですし、最後にいいかもしれません。」

特に今年の夏は色々ありましたから。そう言って楓は花火を手に取り、楽しそうに微笑む。

「まあ、確かに色々あったよな」

シアとネリネのバーベナ学園への転入と両隣への引越し、さらに婚約者候補宣言、プリムラの来訪と芙蓉家での同居生活、デイジーやツボミとの出会い、皆と行った海、水守家の光陽町への帰還、そして今回の騒動。本当に色々あった。楓も同じ心境なのだろう。

「それじゃ、先に片付けちゃいますね」

「ああ、俺は準備しとくよ」

「はい」

どうやらうまくいったようだ。花火に誘うには勇気が必要だった。楓が頷いてくれなかったらどうしようかと、内心冷や冷やしていた。

（楓は覚えててくれてるんだろうか？　俺達の約束、その始まりを）

キッチンで洗い物をしている楓の後ろ姿を見つつ、稟は花火の準備を始めた。

＊　＊　＊　＊

「綺麗……ですね」

呟く楓。その表情はうっとりとしており、花火の放つ光に照らされているせいか、どこか色気を感じさせる。

「ああ、そうだな……」

楓の方が綺麗だ、という言葉を飲み込みつつそう答える。よく映画やドラマなどで出てくる台詞だが、まさか自分が現実に口にしそうになるとは思ってもみなかった。

「なあ、楓」

少し心を落ち着けてから、花火に見入っている楓に声をかける。

「はい」

「俺達、一緒にいるよな。約束通り」

「え……」

唐突な稟の台詞に、楓は言葉を失い、目を見開く。それを見て、稟の心に安堵が広がる。楓は、ちゃんと覚えていてくれた。自分と同じ記憶を、約束を。湧き上がってくる歓喜のままに、言葉を続ける。

「あの時と同じだな。夏の夜、この場所で、花火をしながら約束した」

「稟君……覚えて……」

「大事な約束なんだ。忘れようがないだろう？」

そう言って、稟は苦笑した。

幼い頃の夏の夜、自分と楓がこの芙蓉家の庭で、輝く七色の光の中で交わした指切り。忘れるわけがない、大切な記憶、大切な約束。

「忘れているって……忘れられているって……思っていました……」

少し目を伏せたまま、呟くように言葉を漏らす楓。良く見れば、少し震えているようだ。寒さからでは決してない。

「稟君を、あんなに苦しませてきた私との約束なんて、とっくに忘れてしまっているって……」

「いや、むしろあの約束があったから、俺は今ここにいる。というか俺の方こそ、楓は忘れてるのかもしれないって思ってた」

幸いにして、杞憂で済んだが。

「忘れるなんて事……ありません。忘れられるわけが……ないです

から」

頭を振り、稟の言葉を否定する。その声は、弱々しく震えているが強かった。

「良かった」

そう言って稟は、丁度いいタイミングで消えた花火を楓の手から取ってバケツに放り込み、楓を抱きしめた。

「ひゃっ！？　あ、あの……稟君？」

楓が落ち着くまで、しばし待つ。

「なあ、楓。もう一回、約束しよう。あの時と同じ約束を」

「でも……」

「……嫌か？」

「嫌なわけ、ありません。でも……」

体を離しながら楓が言う。

「稟君、聞いてもらってもいいですか？」

「ああ」

頷く稟を見て楓は語り始めた。

その十四（後書き）

いざ執筆を始めると書きたい事がどんどん増えていく……。
精進します。いやほんと。

その十五（前書き）

やっと……やっと第二章終了です。
長かった……。

その十五

「私は卑怯者なんです」

「違う！」

「聞いてください！」

反論しようとする稟だが、楓の強い口調に遮られた。

「私は、自分が許せなかったんです。何も考えないで、ただ稟君のことを恨んで、憎んでいただけでした」

子供だった。そう言ってしまえば簡単なことかもしれない。だが、楓がしてきたことは事実だ。

「私のことを考えて、私のために自分を犠牲にしてくれていた稟君……その稟君をただ拒絶し続けていた私……」

「だけど、楓はちゃんと分かってくれただろう？」

しかし楓は稟の言葉に首を振る。

「私は稟君が好きです。だから、稟君のお世話をしたかったし、し続けてきました。そしてこれからも、稟君が望んでくれるなら、私は稟君のお世話をしていきたい……でも」

気付いてしまった。稟への想いは本物なのに、しかしその裏で違う考えを持つ自分がいることに。

「稟君に尽くすことで、自分を許してもらおうしている自分が。稟君を愛して、稟君に愛してもらえれば、それが自分への許しになるんじゃないか、と思っている自分が。稟君への想いを、稟君の想いを、私自身への許しを得るための道具みたいにしている自分が！稟君に愛されることで、自分を許してもらおうとしている私が！」

それが、自分には許せなかった。自分自身を切り刻むかのような言葉を並べる楓。それのどこが罪なのだろうか、と心のどこかで考える稟。それを口にしようとした時、一昨日の幼馴染の声が甦ってきた。

『もしお前と楓の立場が逆だったとして、楓に“私は気にしていないですから稟くんも気にしないでください”って言われて“分かった、気にしない”って言えるか？』

「……っ！」

言えない。言えるわけがない。同様に自分が楓の立場に立った時、“それのどこが罪なのだろうか”などと考えられるだろうか？　答えは否だ。

「……」

黙り込む稟。

「だから……そんな自分が、愛されてはいけないと思ったんです。だから……愛しても、愛されないようにしてきました」

そうしなければ、一緒にいられないように思ったから。

「ずっと一緒にいたかったから、そんな境界線を作りました。……私は、奪ってしまったから……稟君を信じなかったから……」

だから、これ以上望めなかった。

「怖いんです……稟君に嫌われてしまうことが！　稟君にだけは……嫌われたくないんです！」

稟にとって、自分が少しでも必要でいたかった。不必要だと思われたくなかった。そう言って抑えきれなくなった涙を流す楓。稟の前ではずっと笑っていた。しかし、本当はずっと泣いていたのだろう。自分の本当の想いを、願いを、押し隠しながら。

「本当に、卑怯者ですよね」

涙を拭いながら自嘲気味に笑う楓。

「でも……」

「？」

「こんな私ですけど……稟君を……好きでいても、いいですか？」

当たり前だ、と言おうとしたところを楓に制される。

「稟君に……好きになってもらう資格は、ありますか？」

稟の目が見開かれる。なぜなら……

「私には……幸せになる資格は、ありますか？」

楓が、自ら作った境界線を……

「私は……稟君に許されても、いいですか？」

自ら越えてきたのだから。

「……」

「……」

沈黙する二人。やがて稟がふう、と小さくため息をつき、口を開いた。

「……言わなくても分かってると思ってた俺が馬鹿だったってことかな」

言葉にしなくても伝わる事、というものは確かにある。しかし、言葉にしなければ伝わらない事の方が遥かに多いものだ。

「……だから、ちゃんと言おう。一生、忘れてくれるなよ？」

楓の気持ちを受け止め、自分の気持ちを送り返す。

「楓のやってきたこと。俺は初めから全部許してる」

「稟……君」

「楓、さっきの返事、まだもらってないぞ」

『もう一回、約束しよう。あの時と同じ約束を』

「あ……」

「な？」

「……はい。……はいっ！」

あの時と同じ場所で、あの時と同じことをしながら、あの時と同じ言葉を、……あの時と同じ、約束を。

「ずっと……一緒にいてくれないか……？」

「ずっと……一緒にいてください……！」

＊　＊　＊　＊

翌日、月曜日。

「おはようなのですよ！、お二人さん」

教室に入った稟と楓を待っていたのは、朝からやけにテンションの高い麻弓だった。

「おはようございます。あの、麻弓ちゃん？　どうしたんですか？」

「おはよう。というか、嫌な予感しかしないんだが……」

「ふっふーん。金曜日の放課後あんな事件が起き、翌日、翌々日は二連休、さらに家には当事者達が二人きり、と来れば、ナニか起きたと考えるのが常識ってものでしょう！」

途端、周囲から殺気が放たれる。標的はもちろん稟だ。ちなみに樹は既にエビフライ状態で麻弓の背後に転がっている。おそらく、邪魔だったからなのだろう。“いつもの”が無かったのはそういう理由か。

「言っとくが、お前の考えてるような事は一切無いからな」

「と、土見稟氏は申しておりますが、どうなのでしょうか？　芙蓉楓さん」

「いえ、ありませんよ」

至って普通に答える楓。

「えー？　楓が顔を赤くしながら赤い染みのついたシーツを干してた、とかいうのはないの？」

「ま、麻弓ちゃん！」

「いや、無いから！」

「土見くん、まさか……同性愛趣味とかじゃないわよね？」

妙な火種を撒く麻弓。

「そうなの稟くん！？」
「そうなんですか稟様！？」
「そうなんですか稟君！？」
一気に稟に詰め寄る三大プリンセス。その表情は必死だ。
「いや違うからな！？　俺は女の子が好きな至ってノーマルな男だから！」
「「「ほっ」」」
どことなく赤い顔をしながら静まる三大プリンセス。
「で、本当に何も無かったわけ？」
「くどいぞ麻弓」
「やれやれ、楓も大変ねえ」
「そんなこと、ありませんよ」
「ほほう。本妻の余裕、というやつですな」
懲りずに再度火種を撒く。
「そういうわけじゃありませんけど……」
「けど？」

「私は、稟君を愛していますから」

そう言って笑う楓。その笑顔は、稟ですらそう見たことがない程に、美しかった。

「つ・ち・み・くーん？　楓にあーんな幸せそうな顔させておいて、何もなかった、なんて言うつもり？」

「稟、殴っていいかい？　太陽系を離脱せんばかりの勢いで！」

「断固拒否する！」

というかお前はいつの間にエビフライ状態から脱したのか。

「ん……？」

教室の外が何やら騒がしい。『土見稟！』とか『許すまじ！』とか聞こえてくる。おそらく、というか間違い無く、ＫＫＫの皆さんだろう。救いの手を求めて幼馴染の姿を探す。いた。

「まあ、がんばれ」

……救いの手は、来なかった。

「ああもう！」

半ば自棄（やけ）になりながら教室を飛び出す。それに気付いたのだろう。『逃げたぞ！』『追えー！』と言った叫びが聞こえた。

「いいの？」

麻弓の問い掛けに答える。

「“獅子は我が子を千尋の谷に突き落とす”有名な言葉だ」

我が子じゃないけどな、と言って笑う柳哉。と、そこへ、

「柳君」

「ん？」

「ありがとうございました」

「……もう、大丈夫みたいだな」

「はい、ご心配をお掛けしました」

苦笑しつつ提案する。

「なあ、楓」

「はい？」

「頭、撫でてもいいか？」

「え、と。あの？」

「ああ、別に嫌ならいいんだ」

髪は女の命って言うしな。と笑う柳哉。しかし、

「あの、良ければお願いします」

「ふむ、それじゃ遠慮なく」

柳哉は楓の頭に手を載せ、ゆっくりと撫でる。心地良いのか、楓は目を細めている。そんな二人は、

「私に兄がいたら、こんな感じなんでしょうか？」

「……誕生日で言えば、俺の方が年下なんだが……」

「ふふ、冗談です」

まるで、仲の良い兄妹のようだった。

＊　＊　＊　＊

放課後、稟はシア・ネリネ・楓・柳哉の四人と下校していた。

「ん？　あれって……？」

最初に気付いたのはシアだ。

「お父様、ですね。何かあったんでしょうか？」

芙蓉家の前に佇(たたず)んでいるのは、すっかり見慣れた魔王フォーベシ

イだ。

「やあ、お帰り。お揃いだね」

「魔王のおじさん、どうしたんですか？　まさかプリムラに何か！？」

プリムラが検査のために芙蓉家を出たのは四日前。いつもならそろそろ帰ってくる頃だ。稟達に緊張が走る。

「ああ。そのプリムラの事なんだが……。ここでは何だし、中で話そう」

そう言って芙蓉家に入ろうとする魔王。そこへ声が掛かった。

「フォーベシイ殿。その話には俺は関わらない方が宜しいですか？」

柳哉だ。確かにこの場では唯一の部外者であり、プリムラの“事情”を知らない。何らかの重要な、あるいは特殊な存在である事には気付いているが。魔王は少し逡巡（しゅんじゅん）した後、言った。

「いや、柳ちゃんにも知っておいてもらった方がいいね。」

「分かりました」

揃ってダイニングへ移動する。

「魔王様、あの、リムちゃんは……」

「ああ、心配しなくていいよ。別にプリムラ自身に何かあったわけ

じゃないから」

稟と楓がほっと息をつく。しかし、

「逆を言えば、プリムラの周囲に何かある、ということですか？」

「さすが、鋭いね。柳ちゃん」

「恐縮です。それで、何があった、もしくはあるんですか？」

再び稟達に緊張が走る。

「ああ。よく聞いて欲しいんだけどね」

「「「「「……」」」」」

ごくり、と唾を飲む音が聞こえそうな程の緊張感。

「明日からバーベナ学園に通うことになったから」

「「「「「……はい？」」」」」

「いやだから、明日からバーベナ学園に通うことになったから」

理解したのだろう。心配して損した、と言わんばかりの柳哉。一方稟達四人はまだ疑問顔だ。仕方無い、と言わんばかりに説明する。

「要するに、だ。明日からプリムラを俺達と同じバーベナ学園に通わせることになった、って事。違いますか？」

「いや、違わないよ。ちなみに学年は稟ちゃん達の一つ下になるから」

「「「「「えええーーーっっっ！！？？」」」」」

稟達（柳哉除く）の絶叫が響いた。

その十五（後書き）

次は間章を挟んで第三章に入ります。

その二（前書き）

人物設定その二です。
その一とほとんど変わらません。
そのため、読み飛ばしてもまったく問題ありません。

その二

オリキャラその１

名前：水守（みなかみ）　柳哉（りゅうや）
身長：１７２ｃｍ
体重：６８ｋｇ
誕生日：１月２１日
血液型：Ｏ
髪の色：黒
眼の色：黒
家族：母親・妹（父親は他界）
職業：学生、国立バーベナ学園高等部２年Ｃ組
備考：稟・楓・桜の幼馴染だが八年前の春に親の仕事の都合で光陽町を離れた　幼少時に光陽町に引っ越してきたが当時は体が弱く、体調を崩しがちなうえに人見知りが激しく、独りでいることが多かった
そこで幼少時の稟達と出会い友達になり、また稟達を通じて友達が増え、人見知りはあまりしなくなった
そのことで稟達にはとても感謝しており、いつかこの恩を返そうと思っている
光陽町を離れた後も桜とは手紙で連絡を取り合っていた
八年前の事件（柳哉が光陽町を離れてから約半年後）の際には土見夫妻及び芙蓉紅葉（楓の母親）の葬儀に出席するため数日ではあるが光陽町に戻って来たが、その後の事については桜からの手紙である程度までは知っている
その後も桜とは手紙を遣り取りしていたが柳哉自身に起きた事件や父親の死等によって精神的に余裕が無くなり、疎遠になっていた
顔立ちは十人中六～七人くらいは美形と判断するくらいのレベルで、

かっこいいというより綺麗と表現されることのほうが多い
両手の黒いフィンガーレスグローブがトレードマーク
属性“鈍感”は非所持
年齢にそぐわない落ち着きを持ち、人の心境を察する能力に長け、
観察力、洞察力にも優れる
また、直感等の第六感にも優れる
以前に通っていた学校（風ヶ丘高校）が“文武両道”を信条として
いたため身体能力は高く、成績も学年内で十位以内に常に入っていた
実は神族と人族のハーフであり、神族である母親から高い魔力を受
け継いでいる
幼い頃体調を崩しがちだったのは魔力制御がうまくできなかったた
め（元々体があまり丈夫でなかったことも理由の一つ）
また、人見知りが激しかったのも魔力制御がうまくいかずポルター
ガイスト現象を引き起こしてしまい、化け物呼ばわりされたため

以下第二章より

稟達と出会った頃は女の子に間違われることも多かった
幼い頃から母、玲亜によって髪や肌の手入れを仕込まれており、男
性としては珍しく髪や肌に気を使っている

オリキャラ設定２

名前：水守（みなかみ）　菫（すみれ）
身長：１５７ｃｍ
体重：標準より少し上
スリーサイズ：８２／５９／８３
誕生日：２月１日
血液型：Ｂ

髪の色：紫
眼の色：茶
家族：母親・兄（父親は他界）
職業：学生、ストレリチア女学院中等部3年D組
備考：柳哉の実妹
髪は背中の中ほどに届く長さでそれを蝶をあしらったバレッタ（魔力制御のための魔法具　草司作）で纏めている
柳哉同様、年齢にそぐわない落ち着きを持つ
柳哉のことは“兄さん”と呼び、誰に対しても基本的には敬語で話す
若干辛辣な所があるが、冷たい人間という訳ではない
誰に対しても敬語で話すため若干敬遠されがちだが、意外と社交性に長けており、友人は多い
実はかなりのブラコンだが柳哉はそれに気づいていない
これは柳哉が鈍いのではなく菫の隠し方が巧妙なためである（母親にはバレているが）
だが決して柳哉に対して恋愛感情を抱いている訳ではなく、単純に妹として兄を慕っているだけである（早くに父親を亡くしている事も関係している）
光陽町に住んでいたころに稟達と出会っているがそこまで親しくはなかった
以前は聖祥学園中等部に所属しており、成績も常に上位だった
柳哉同様神族と人族のハーフで高い魔力を持つが、体が丈夫なため柳哉のように体調を崩しがちになる、ということは無かった

オリキャラ設定3

名前：水守（みなかみ）　玲亜（れあ）
身長：162cm
体重：標準より少し下

スリーサイズ：８７／６２／８８
誕生日：１１月２４日
血液型：Ａ
髪の色：紫
眼の色：黒
家族：息子・娘（夫は他界）
備考：柳哉・菫の母親であり、“ＳＨＵＦＦＬＥ！”世界では珍しい“美熟女”なお母様（笑）
髪は肩にかかるくらいの長さで、トレードマークのバンダナをしている（耳を隠すためでもある）
今だ亡き夫を想い続ける一途な女性
夫亡き後、家族を支え続ける良き母親だが、時折はっちゃけるのが玉に瑕
純粋な神族であり、“神隠し”によって人界へやって来た
右も左も分からずに彷徨っていたところを草司によって保護され、その後草司と結婚した
“玲亜”は草司の考えた当て字
“ある理由”により、“開門”後も神界へは戻っていない

オリキャラ設定４
名前：水守（みなかみ）　草司（そうじ）
身長：１８４ｃｍ（死亡時）
体重：７６ｋｇ（同上）
誕生日：６月２１日
血液型：Ｂ
髪の色：黒
眼の色：茶
家族：妻・息子・娘

職業：魔法具職人
備考：柳哉・菫の父親で玲亜の夫
物語開始の三年前、飛行機事故で死去（享年３５）
生前は逞しい体躯を持ち、家族想いの良き父、良き夫であった
性格はかなり軽い所があり、妻と共に悪ノリすることもよくあったが、締めるところはきっちり締める
“開門”以前から玲亜の協力の下で魔法具の研究を行っており、また技術力やセンスにも恵まれ、“開門”後は腕のいい魔法具職人として有名だった
柳哉・菫が使用していた魔力制御を補佐する魔法具も彼の作である

その二（後書き）

次から第三章に入ります。

その一（前書き）

第三章に入ります。

その一

「ま、そういうことだから」

「はあ……」

先程の緊迫した雰囲気とは打って変わって明るい声で言い放つ魔王に稟はため息を返した。無理もない。

「で、当のプリムラはどうしたんですか？」

「ああ、実は今バーベナの制服に着替えているところだよ。もうすぐ来るんじゃないかな？」

柳哉の疑問に答える魔王。そこへ、

「……着替えた……」

バーベナ学園の制服に身を包んだプリムラが現れた。

「わあ、リムちゃん可愛い」

「ええ、よく似合っていますね」

「……そう……？」

シアとネリネの言葉に少しだが顔を赤くしているプリムラ。照れているのだろう。

「サイズとかは大丈夫ですか？」
「その点に関しては問題無いと思うけど、どうだい？」
「……うん、大丈夫……」
そんなやりとりがされる中、
「どうした稟？」
「あ、いや何でもない」
「ふむ、お前さては……」
稟のそんな反応に、柳哉はにやりと笑う。
「見惚れてたろ？　プリムラに」
「そ、そんな事……」
「無いのか？」
「無い！」
そんなにムキになって否定するのは完全に逆効果なのだが。
「それよりもおじさん！　プリムラが学園に通うってことですけど」
話題を変えたいのだろう、魔王に疑問をぶつける。それは柳哉も聞きたいことだったので追求は断念する。シアやネリネ、楓も同じ

だ。

「何か問題でもあるかい？」

「いえ、ただ急だなと」

「私達からすればそんなに急なことでもないのだけれどね」

「どういうことですか？」

魔王曰く、元々今回の検査結果次第で、プリムラをバーベナに通わせるかどうかを決定するつもりだったようだ。

「前回、前々回の検査の結果、今までほとんど制御できていなかったプリムラの魔力がかなり安定してきていることが分かってね。そして今回の検査でわずかではあるものの、魔力の制御ができていることも判明したんだよ」

本当にわずかなんだけどね、と笑う魔王。

「そして協議の結果、この人界に来て多くの人と出会い、触れ合ったことがその理由だと結論づけられたわけだ」

魔法は心の力とも言われる。ならば……

「より多くの人と出会い、触れ合うことで、魔力制御の更なる向上を図ろう、ということになったというわけですか？」

柳哉の台詞に魔王は頷いた。

「それじゃ、先週、リムちゃんが検査に行く前に魔王様が仰(おっしゃ)ったのは……」

「そう、このことだよ。あの時点ではまだ確定事項ではなかったからね」

楓の疑問に答える魔王。

「ずっとそのままなのも何だし、着替えてきたらどうだ？」

と、提案する柳哉。プリムラは頷き、再度着替えるためにリビングを出て行った。

『フォーベシイ殿』

『ん？　何だい？』

突然の柳哉からの念話にも動揺することなく返事をする魔王。このあたりは流石といったところか。

『あの子は、プリムラは一体、何者なんですか？』

『何者か、かい？』

表情にこそ出さないが、魔王は舌を巻いていた。この稟達と幼馴染で神族と人族のハーフであるという少年は、稟達と談笑しながら魔王と念話で会話をしている。しかもノイズが全く入ってこない。普通、念話というものは頭に浮かべた言葉を相手に送るものだ。しかし、通常の会話をしながら念話で会話をする場合、通常の会話として頭に浮かべた言葉が、念話として頭に浮かべた言葉と干渉し合

うことによって、ノイズが発生してしまう。いかにノイズを発生させることなく念話を行えるかは本人の魔力制御能力、さらには思考や意識の分割能力（言ってしまえば脳の分業）に左右されるのである。故に、ノイズが全く発生しない念話を行使できる柳哉の魔力制御能力および思考や意識の分割能力は非常に高いレベルにある、と言える。才能もあるのだろうが、相当の訓練をしてきたのだろう。しかもプリムラを無理の無い理由で退出させた上で、念話による会話を試みるあたり、細心の注意を払っていると言える。プリムラは一体何者なのか、と聞いてきたが、君自身が一体何者なのか、と逆に問いたいところだが、今は横に置いておく。

『別に念話で話さなくてもいいよ。ここにいる皆が知っていることだからね』

『そうですか、それでは』

「フォーベシイ殿。一つお聞きしたいことがあります」

丁度稟達との会話が途切れたところで柳哉が口を開いた。

「うむ、何かな？」

柳哉の意図を汲み、念話のことは口に出さない。

「あの子は、プリムラは一体、何者なんですか？」

「うん？　稟ちゃん達から聞いてないのかい？」

「いえ、訳あって芙蓉家に居候していることくらいしか聞いていません。何らかの重要な、あるいは特別な存在だ、ということは察し

ていますが」

事実、それしか聞いていない。

「あれ？　話してなかったか？」

「聞いた覚えは一切無い。そして記憶力には自信がある」

稟の台詞に若干強めの口調で返す。

「そういえば……」

「お話した覚えは……」

「無かったような……」

ちなみにシア、ネリネ、楓、の順である。どうでもいいが。

「つまり、皆話したつもりになっていた、と、そういうわけだね」

魔王の台詞に柳哉は、はあ、と一つため息をついた。

その一（後書き）

念話および思考や意識の分割能力に関してはリリカルなのは（アニメ版）のマルチタスクと似たようなもの、という設定です。

その二（前書き）

感想でのご指摘を受けて、タイトルを ～The bonds of eternal～ から ～The bonds of eternity～ へ変更しました。

その二

「人工生命体、その第三号……ですか」

「そう、“ある魔法”を研究するためのね」

ユグドラシル計画。魔王の言う“ある魔法”の研究と、そのために必要な強大な魔力の持ち主を生み出す計画。その“ある魔法”は、実用化されれば三世界の有りようを根底から変える程の力を持つという。そしてプリムラはそのために生み出された人工生命体、その三号体だという。

（生命の蘇生か不老不死のどちらか、あるいはその両方ってところか。いつの時代であっても権力者の考える事は大差無い）

「三号体、ということですが一号体と二号体は既に？」

「……よく分かるね」

顔を顰（しか）めながら聞く柳哉に魔王は再度舌を巻く。

「柳ちゃんの言う通りだよ。人工生命体は全部で三体作られた。皆違った方法によるものではあったんだけど、過去の二体はその強大な魔力を制御しきれずに終わってしまった」

つまりは死んでしまった、ということなのだろう。魔王だけでなく他の五人、特にネリネが沈痛な表情を浮かべている。

「まあ、当然の結果でしょうけど」

「おい柳……」

稟が非難するように声を上げるが、無視する。これはあくまでも予想ですが、と前置きして続ける。

「一号体はある程度高い魔力を持つ、おそらく魔族を選抜し、その魔力を何らかの方法で引き上げる」

神族と魔族では魔族の方が魔力は高めだということを考えればほぼ間違い無いだろう。

「そして二号体は元々高い魔力を持つ、こちらもおそらく魔族を複製、いわゆるクローンとして生み出す」

魔王の目が驚愕に見開かれる。魔王だけではなく、稟達も驚いている。

「……柳ちゃん……君は、知っているのかい？」

「あくまでも予想ですが、と言ったはずですが……どうやら当たりのようですね」

ふう、とため息をつく柳哉。ある程度勘が良く、さらにその方面の知識があればこの結論に辿り着くのは決して難しい事ではない。柳哉の場合はそれだけでは無く、身近な所によく似た境遇の人達が居たことも関係しているだろう。

「そして三号体は、おそらくは奇跡の具現なのでは？」

「……ああ、その通りだよ。神族と魔族を越える魔力を持ち、それを扱いきれる器を持った新しい生命体をゼロから作り上げた。いくつもの失敗・偶然・奇跡がたまたま綺麗に混ざり合い、天文学的に低い確率を拾い上げた結果、生まれた」

「つまり、前の二体とは違って無理をしなければ問題は無い、と判断していいですか？」

「そうだね。まあ、それでも下手に暴走でもしようものなら都道府県の一つくらいは軽く吹き飛んでしまうけど」

「起こさせませんよ。そんなことはね」

ごく普通の口調で言う柳哉だが、魔王はその言葉に、不思議とどこか頼もしさのようなものを感じた。で、プリムラ本人のことなんですけど、と続ける。

「一号体は強化された魔力を扱い切れず、二号体はクローンであるが故の細胞の劣化によって、残念な結果になった。プリムラの感情表現が希薄なのもその辺りに理由があるのでは？」

「……！」

ネリネの表情が強ばる。同時に少し顔色が悪いことにも気づくが、あえて気づかない振りをしておく。今自分がネリネに言えることなど無いだろうから。

（恐ろしい子だね……少し、警戒する必要があるかもしれない）

僅かな情報からここまでの推測を立てる。少なくとも十六歳の少

年にしては規格外と言っていい。

『別にプリムラやあなた方に危害を与えるつもりはありませんよ』

「！」

まるで心を読んだかのような柳哉からの念話に思わず息を飲む。

「魔王様？　あの、どうかされました？」

「いや、何でもないよ」

笑って楓に答える魔王。柳哉は素知らぬ顔をしている。

（神ちゃんにも協力してもらって、本格的に調べた方がいいかもしれないね）

魔王としてだけでは無く、個人としても興味の湧いてきた、水守柳哉という少年のことを。

＊　＊　＊　＊

家路に着きながら、柳哉は考えていた。

（あの様子だと、かなり警戒されてるだろうな）

試しに念話で話しかけた時の反応はそう考えるに足るだけの説得力があった。

（少し、やりすぎたかな……）

ユグドラシル計画、そして人工生命体。否応無しに柳哉の知る“彼女達”の過去を思い出す。“彼女達”がこの事を知ったらどう思うだろうか？　そのせいか、少し頭に血が上っていたようだ。無理も無い。柳哉の知る“彼女達”の過去はまさに“凄惨”と表現するに値するものだからだ。

（ユグドラシル計画、か。だがあのお二方が果たしてそんな計画を承認するだろうか？）

確かに一理ある。あんな人体実験まがいの計画を考え、立案するような両王ではないだろう。ただでさえ、非常に家族想いな王様達だ。しかし、それだけで務まる程、王という立場は甘くない。それが国民（この場合は世界民か？）からの要望、しかも多数などであれば無視など出来ない。民あってこそ国は成り立つ。王もまた同じ。

（始めた理由はどうあれ、犠牲者が出ている以上、やめるわけにはいかなくなっている、とか）

魔王は詳しく説明しなかったし、柳哉も詳しく聞こうとはしなかったが、一号体はおそらく魔力の暴走で死んだのだろう。その際、周囲へも甚大な被害が出たのではないか？　制御しきれない巨大な力は恐るべき凶器となる可能性を常に内包する。柳哉や菫も玲亜から受け継いだ高い魔力を上手く制御できず、微々たるものではあるが周囲に被害をもたらしてしまった事がある。ましてや引き上げられ、強化された魔力を所持していたと思われる一号体なら、周囲への被害は柳哉達のそれとは比較にならないだろう。

そして二号体。クローン技術は人界にも存在するが、まだ多くの

問題を抱えている。その一つが複製された遺伝子情報の劣化が速いこと、すなわち寿命が短い、ということだ。おそらく二号体は実験に協力することでその命をすり減らし、結果として予想より早く死に至ってしまったのではないだろうか。

そこまで考えたところで顔を上げる。

「お帰り、菫」

「ただいま帰りました、兄さん」

ストレリチア女学院中等部の制服に身を包んだ妹の姿を確認し、声をかける。

「確か、今日は母さんは遅くなるんだったな」

「はい、新作のお披露目が近いそうですよ」

そうか、と言って黙り込む柳哉。

「何か、ありましたか？」

疑問系ではあるものの、何かあったと既に確信した口調の菫。

「ああ。夕食後、話したい事がある」

「分かりました」

どうやら、とても重要な話のようだ。

「それで、夕飯は何にしますか？」

「ああ、そうだな……」

重い雰囲気を吹き飛ばすかのように軽く質問してきた妹に内心で感謝しながら柳哉は答えた。

＊　＊　＊　＊

「そう、ですか……」

夕食後、兄からを話を聴いた菫が口にする。

「あまり、驚いてないな」

「ええ。何となく、そうじゃないかな、と思っていましたから」

お母さんは隠し事があまり上手ではありませんから、と笑う菫。しかしすぐに真顔に戻る。

「今このタイミングでそれを私に話すのは何故ですか？」

「ああ、むしろこっちの方が本題だ」

そうして兄の口から語られた内容は一種信じ難いものだった。しかし、兄の表情は真剣そのものだ。

「間違っている可能性はある。というか間違いであってほしい。下手を打てば……分かるだろう？」

「確かに、向こうの出方次第では……」

色々と不味い事になる。何より……。

「認める訳には、いきませんよね」

頷く事で同意する柳哉。これは慎重に事を運ばなければならない。

「それで、具体的には……接触は、避けた方がいいですね」

「いや、むしろ接触してしまった方がいいだろう」

何故ですか？　と問う妹に言う。

「別に会うだけが“接触”じゃないだろう？」

「……成程、それならば早いほうがいいですね」

「まあ、そんなに急がなくてもいいが、早いほうがいい」

「丁度いいものがありますよ。少し待っていてください」

そう言って部屋に向かう菫。戻って来た時には一枚の紙を手にしている。

「これです。丁度いいでしょう？」

「まるで図ったかのようなタイミングだな」

その紙に書かれている日時は再来週の水曜日。時間的にも問題は無い。

「よし、これでいこう」

頷く菫。しばらく打ち合わせた後、二人は日課に精を出した。

その二（後書き）

柳哉の知る“彼女達”は、とらハ2及び3をプレイされた方にはすぐにお分かり頂けると思います。
あと後半の兄妹の意味深な会話も今後の伏線になっています。

その三（前書き）

投稿を始めてから二ヶ月。
ＰＶ：５６０００件
ユニーク：８０００件
お気に入り登録数：３１件
ありがとうございます。
これからも頑張ります。

その三

そして翌日の朝、バーベナ学園校門前。

「やっぱり見られてるよな……」

「普通に予想できたことだろう？」

自分に向けられた男子生徒達の嫉妬と殺気に満ちた視線とこれから起こるであろう騒動を思って肩を落としながら言う稟に柳哉が返す。そんな二人の傍にはシア・ネリネ・楓の三人に、今日から通うバーベナ学園の制服に身を包んだプリムラがいた。そんな彼ら五人の耳にも『また土見か……』『なんでいつもあいつばかり……』といった舌打ち混じりの囁きが聞こえていた。

「あはは……まあ、リムちゃん可愛いしね」

「稟君、あの……大丈夫でしょうか？」

「多分、大丈夫……だと思う」

「申し訳ありません、稟様。まだ魔力の制御が納得のいくレベルではなくて……」

「……？」

苦笑いのシア、心配する楓に既に疲れ気味の稟に申し訳なさそうなネリネ。以前柳哉に言われたことを順守しようとしているらしい。プリムラはよく分かっていないようだ。

「ま、しょうがない。今日のところは味方するさ」

苦笑しつつ柳哉が言った。

「昨日はバッサリ切り捨てたくせに……」

「そんなこと言っていいのかな？」

そう言いつつちょいちょいと指差した方を見ると、殺気に満ち溢れた男子生徒の集団が。

「申し訳ありませんでした」

「分かればよろしい」

どうやらあの集団は柳哉が相手をするようだ。

「あの、柳哉さん」

「ん？　どうした？」

「あまり、稟様をいじめないでください」

ネリネには珍しい強めの口調だ。それに驚き、少し考えてから了承する。以前までのネリネなら稟を傷付けようとする者には容赦の無い攻撃を加えていただろう。しかし、そのネリネに柳哉は枷を付けた。ある意味では柳哉の自業自得とも言える。

「あー、そうだな、少しいじめすぎたか」

ポリポリと頭を掻きつつ言う。

「で、そこの連中」

歩み寄りながら声を掛ける。

「今回のあの子の件に関しては魔王陛下の決定によるものであって、稟には一切責任が無い。よって稟に当たるのは筋違いだ」

集団の先頭にいた男子生徒が何かを言おうとするが、柳哉に遮られた。

「それでもなお、稟に当たろうって言うのなら、俺が相手になるが……どうする？」

その言葉に男子生徒の集団は尻込みしている。柳哉は転校してきてからまだ二週間程だが、既に学園生徒の多くにその存在が知られている。その理由は、神族と人族のハーフであり魔法が使えることや、シアのファーストキス暴露話の時等に見せた高い身体能力などによるものだが、やはり最も大きいのは“あの”土見稟と芙蓉楓の幼馴染である、という事実であろう。

「尻込みするくらいならやめといた方がいいぞ。これでも対集団戦は得意でな」

シアのファーストキス暴露話の時、柳哉は実際にそれを見せ付けている。しかも、魔法は一切使わずに。その時にそれを見ていた、あるいは実際に味わったであろう数人が集団から離れていき、それを見てさらに数人が離れる。こうなれば、もはや烏合の衆以下だ。

先頭にいたリーダー格らしい男子生徒も舌打ちをしつつ、校舎に入って行く。

「……助かったよ」

「一時しのぎでしかないだろうけどな」

「……はあ」

ため息をつく稟だった。

＊　＊　＊　＊

その後。

「……」

確かに、実力行使はほとんど無い。

「……」

しかし、それ以外は大いにあった。

「……」

例えば、授業中。

「……」

狙い済ましたかのように投げ込まれる消しゴム弾の雨。

「……」

例えば、休み時間。

「……」

廊下で擦れ違うたびに罵詈雑言の合唱を浴びせる男子生徒達。

「……」

それらはまだいい。まだいいのだ。問題は……

「……稟……」

休み時間ごとに自分の所属する１－Ｂではなく、稟達のクラスである２－Ｃに入り浸っているプリムラの存在だ。

「……稟……」

ちなみに現在、五時限目が終了した所だ。すなわち、プリムラが２－Ｃを訪れたのは本日五回目になる。そんなプリムラだが、早々に親衛隊が結成されたようだ。この学園でも特殊且つ屈強な男達で結成された、まさに最強の親衛隊、だそうである。樹曰く、『まさか柔道部主将、レスリング部主将、そして二次元美少女愛好会会長の三人が堅い握手を交わすシーンをこの目で見ることができるとは思わなかった』そうである。親衛隊名、プリムラ親衛浪士隊“ＰＰＰ”――正式名称“プリムラぷりぷりちー”――もはや何でもあり

である。

「あ、いたいた」

「みなさん勢揃いですわね♪」

明るく元気な声とおっとりとした声。亜沙とカレハだ。

「どうかしましたか……」

「稟ちゃん、何だかヤサグレ？」

ぐったりした稟はどこかヤケになったような口調だ。無理もないだろう。

「リムちゃんが転入してきたって聞いて様子を見に来たんだけど……」

「一年生の教室を覗いてみたんですが、プリムラさん、今日はこちらに入り浸っている、とのお話でしたので」

どうやら三年の方でも話題になっているようだ。

「話題っていうか、黒い噂？　まあ、今日一日くらいはコソコソしてるのがおススメかな」

「治癒魔法は得意ですから、必要でしたら遠慮なく仰(おっしゃ)ってくださいね」

「カレハ、使うならボクがいない時にしてよね……」

「大丈夫ですわ、亜沙ちゃんの前では使いませんので安心してください」

亜沙の魔法嫌いも相変わらず徹底している。というか俺の身も案じてください、と言いたかった稟だった。

「まあ、それはまず無いでしょう」

「ん？　どゆこと？」

「稟のそれは精神的な疲労なんで」

と、朝の事を話す。その脇で、

「治癒魔法の話が出るようじゃねえ……土見くん、短い間だったけど、あなたはいい友達だったわ」

「やめい、縁起でもない」

そんな会話が交わされていた。

放課後。

「疲れた……」

＊　＊　＊　＊

「お疲れさん」

「というかこんな疲れる日に掃除当番って……」

「運が悪かったと思って諦めな」

ぶつぶつと文句を言う稟とそれに付き合う柳哉。今日は二人とも掃除当番だった。本来ならここまで時間はかからないが、前述の理由から遅くなってしまった。既に窓の外の風景は赤く染まっている。

「ほれ、ゴミ捨ては俺が行っとくから、お前は帰りな」

「……いいのか？」

「ああ。見た所もうほとんど帰ってるみたいだしな」

襲われるようなことはまず無いだろう。

「そうか……。ありがとな」

「おう、また明日」

そう言って柳哉はゴミ捨てに向かい、稟は帰り支度を始める。鞄を持ち、教室を出るが、

（プリムラは……もう帰ったかな。皆が見ててくれたとは思うが……）

そう思って足を止める。シアやネリネ、楓あたりが連れて帰ってくれたとは思うが……。

（プリムラのクラスは確か……）

なんとなくだがいるような気がして、一年のクラスへ向かった。

＊　＊　＊　＊

「……まさかとは思っていたけど」

「……稟……？」

果たしてプリムラは、そこにいた。茜色に照らされた小さなその姿はどこか儚（はかな）ささえ感じる。

「……何やってるんだ？　こんな時間まで」

「……稟も、何で、まだ……？」

「掃除当番でな。帰り際に思い立って来てみたんだが……皆と帰らなかったのか？」

「……そう……」

その横顔が少し沈んで見えたのは稟の気のせいだったのだろうか？

「何か用でもあったのか？」

「……今終わった……」

「よし、じゃあ帰ろう。楓もそろそろ夕飯の支度を始めてるだろうし、少しくらいは手伝わないとな」

こくんと頷くプリムラ。

「……楓のご飯、おいしいから好き……」

「よし。それじゃ、ちょっと急ぐか」

「……うん……」

そう言って手を伸ばす稟。その手をプリムラは握り返す。その小さな手の温もりと、信頼を表すようにしっかりと握られた手に、稟はどこか優しい気持ちを感じたまま、教室を出た。

その三（後書き）

ちなみにＰＰＰの名称はノベルス版のものを使用しています。

その四（前書き）

今回も独自解釈満載です。

その四

「稟にプリムラ？　まだ帰ってなかったのか」

校舎を出た所で柳哉が声をかけてきた。

「ああ、ちょっと一年の教室の方にな……」

それだけで察したのか、それ以上の追求は無かった。

「じゃ、帰るか」

「ああ」

こくり、とプリムラが頷く。

「しかし、こうして見ると仲のいい兄妹みたいだな」

稟とプリムラの繋がれたままの手を見ながら柳哉が口を開く。その口調はからかうようなものでは無く、どこか優しげだ。もしかしたら水守兄妹（自分達）を重ねているのかもしれない。

「確かにな」

「プリムラ、稟に“お兄ちゃん”って言ってみな？」

「おい柳……」

プリムラは稟よりも二十センチ以上背が低い。稟と目を合わせよ

うとすると、当然、見上げる形になる。さらに現在、二人は手を繋いだ状態だ。要するに至近距離。故に若干上目遣い気味になる。その結果、

「……お兄ちゃん……？」

「「……っ！」」

年下の美少女に、上目遣いで“お兄ちゃん”と呼ばれる。無表情なのが玉に瑕だが、妹属性を持たない稟であってもどこかクるものがあった。

「……？」

分かっていないのだろう、きょとんとしているプリムラ。

「ま、まあそれはいいとして、だ」

少しどもっている柳哉。若干だがダメージがあったようだ。何のダメージなのかは聞いてはいけない。

「プリムラは今日はうちのクラスに入り浸ってたが、自分のクラスで友達を作ろうとは思わないのか？」

「そうだぞプリムラ」

どうにか復活したらしい稟も乗ってくる。

「……稟が、いるから……」

「そうは言ってもな、この時期、同年代の友達はいたほうがいいぞ？　それに魔王陛下もそれを望んでいると思うぞ。なあ？」

そう言いつつ、稟の肩に手を回して乱暴に引き寄せる。稟が何か文句を言っているが無視。

「……そう……？」

「ああ。プリムラのことも、ネリネと同様に娘と思ってるだろうしな」

「……そう……」

少し間が開いた後、プリムラが口を開く。

「……稟も……」

「ん？」

「……稟も、私に……友達を作って欲しい……？」

「もちろんだ」

でも、と続けるプリムラ。

「……分からない……友達って、どうやって作るの……？」

「それは……」

「……」

稟が言葉に詰まり、柳哉はそんな稟の様子を見ている。目で柳哉に助けを求めるが、柳哉は答えず、ただじっとこちらを見ているだけだ。と、不意に頭に閃くものがあった。

（試されてる、のか？）

柳哉の目を見る。こちらをじっと見ているのには変わらないが、予想が確信に変わった。

（とはいってもな……）

友達はどうやって作るのか？　難しい問題だ。そもそもこれといった答えが無い。十人に聞けば十通りの答えがある。十人十色、人それぞれだ。しかしこの場合、それでは意味が無い。ならばどうすればいいか？

（結局の所、自分の経験を話すしかないか）

「そうだな、まずは……」

「……まずは……？」

「話すこと、だろうな」

「……話す……？」

「ああ、別に何でもいい。好きな食べ物、とか好きな動物、とかな。本当に何でもいい。まずは話すことだ」

それは稟が幼い頃、楓や桜、柳哉と友達になろうとした時に実際にやったことだ。人見知りが激しく、家族や桜以外とはほとんど話さなかった楓と。心を許した相手にはよくなつくが心を許していない相手に対しては消極的になる桜と。そして、寂しがりのくせに人を寄せ付けない雰囲気を放っていた柳哉と。

「……やってみる……」

「ああ、まずはチャレンジだ」

そんな二人を柳哉が優しい目で見ていた。

＊　＊　＊　＊

芙蓉家の玄関前。

「あー、プリムラ」

「……何……？」

「先に戻っててくれるか？」

「？」

「楓には少し遅くなるって伝えといてくれ」

プリムラは首を傾(かし)げていたが、すぐに頷き、家に入っていった。

「場所を変えよう。緑公園でいいか？」

「ああ」

二人の行動を見て察した柳哉が提案し、稟がそれに答え、そのまま緑公園に向かって歩き出す。その道中、二人の間に会話は無かった。

緑公園に到着。稟はブランコに、柳哉はその柵に座る。四日前の夜と同じだ。

「……」

「……」

両者共に無言だが、二人にははっきりとした違いがある。稟はどう切り出そうかを考えており、柳哉はそんな稟を静かに見ている。やがて稟が口を開く。

「聞きたいことが、いくつかあってな……」

「ああ。楓のことと、プリムラのことだろう？」

やはり気付いていた。この幼馴染の察しの良さ、勘の良さはどういうことなのかを聞きたくもあるがそれは置いておく。

「ああ、まずは楓のことなんだが……」

「一昨日の夜、楓に何をしたのか、か」

頷くことで肯定する。

「その前に、だ。あの後どうなったのかを聞いてもいいか？」

稟は少し逡巡(しゅんじゅん)したものの、すぐに話し始めた。

＊　＊　＊　＊

「そうか」

「ってやけにあっさり言うな？」

「まあ、あの様子なら楓はもう大丈夫だろうって思ってたしな」

「ああ、で？」

「大したことはしてないんだけどな」

稟に促され、柳哉も話し始める。

「光陽(この)町に帰ってきてから、正確には楓と再会してからかな、楓に対してどうも奇妙な感情を抱いている自分がいた」

初めは稟に尽くす楓を見た時だった。嫉妬かとも思ったが、ならばその感情は稟に向くはずだ。ならば何なのか。

「意味不明な感情ってのはどうにも気持ち悪くてな、もしかしたら八年前の事が関係してるんじゃないかと思ってな。まあ、ただの勘だったが。それを口実に八年前の事故に端を発する一連の事を聞き

出したわけだ」

そして楓の口からその事を聞いた柳哉は、

「許さない、と言った」

「へ？」

「だから許さない、と言ったんだ。正確には、『俺は楓を許さない。例え稟が許しても、桜が許しても、楓自身が許しても、世界中の全ての人が許しても』

――俺だけは、水守柳哉だけは、芙蓉楓を、未来永劫、許さない――

そう言った」

絶句。

それを聞いた時の稟の表情はまさにそれだった。

「楓はその後すぐに家を飛び出していったよ」

「な……どうしてそんなことを！？」

「少し落ち着け」

「柳！」

「落ち着かないとこれ以上話さないぞ」

思わず大声を上げた稟だが柳哉の台詞に口をつぐんだ。言いたい事は山のようにあるが、それらは飲み込み、心を落ち着けることに専念する。

「……それで？」

「ああ、その前に一つ。楓には二つ、罪の意識があったんだ。」

「二つ？」

一つは言うまでもなく、稟に対する罪悪感。そしてもう一つは……

「許されてしまったことへの罪悪感」

「は？」

「さっきの稟の話だ。お前、楓を許したって言ったろう？」

そもそも楓が真実を知ってから二年余りが経っている。その間、稟は一度も楓を責める事をしていない。となれば、

「楓は稟に許されているという事を知っていたんだよ。あくまでも楓自身、全く意識していない所でな。というか本人さえも気付いていない所で」

「……」

稟、再び絶句。無理も無い。

「……大丈夫か？」

深呼吸を何度かして、気持ちを落ち着ける。

「ああ、続きを頼む」

「ああ。で、楓の『愛しています、でも好きにならないでください』っていう言葉もその二つの罪から来ていると言える」

「でも、前者の方はともかく、後者の方は……」

「許されない事をしてしまった。でも許されてしまった。しかも一切の罰を受けることも無く。しかもその相手が“大好きな稟君”だぞ？　楓が『ああ良かった』なんて胸を撫で下ろすような人間だと思うか？」

思わない。楓はそんな奴じゃない。稟の表情がそう語っていた。

「楓のあの言葉も、もしかしたら自分で自分に科した罰なのかもな」

「楓……」

「続けるぞ。そこで俺がやったことに繋がる」

「楓を許さない、か？」

「ああ」

楓を、楓の罪を、未来永劫許さない。そうすることで逆に楓を救う。何のこっちゃ、と言われるかもしれないが、罪を犯したのに何の罰も無いまま許される、というのは罪の大きさにもよるが意外に

きつく、しかも長期に亘(わた)って続いたりもする。楓のような良心的な“いい子”ならば特に。何らかの罰を受けることで、心が軽くなった経験は無いだろうか？　罰というものにはそういう効果もある。楓が自ら引いた境界線を自ら越えることができたのも、それがあったからと言えるのではないだろうか。

「楓が飛び出していったのも、その辺りが上手く理解できていなかったからだろうな」

そして光陽公園に辿り着き、落ち着いて考えてようやくそれに気付いた、ということだろう。

「なあ柳。もしかして桜が光陽公園にいたのも……」

「ああ、偶然じゃない。桜にはそのためにいつでも出られるように自宅で待機してもらってた」

そして楓が飛び出していってすぐに連絡をした、というわけだ。ちなみに楓がどこに向かっているかは魔法による探知を利用して知った。そして楓は桜と、次いで稟と合流。その後、芙蓉家の庭で再度、稟と“約束”を交わした、というわけだ。

「とまあ、こんな所だ」

「なあ、柳」

「ん？」

口を開いたが、声が出てこない。あれほどの察しの良さ、勘の良さに、さらにこれほどまでに用意周到な計画を立てるだけの頭脳。

自分達の知らない間にこの幼馴染に何があったのか。それを聞きたかったが、何故か聞いてはいけないように思えてしまい、出てきたのはこんな台詞だった。

「……楓に対して抱いていた感情っていうのは？」

「……ああ、それはきっと……」

――同族嫌悪――

「え？」

「俺も以前、楓と似たような事をやっちまった、って事」

そう言って柳哉は立ち上がる。

「そろそろ夕飯の支度も終わってるんじゃないか？　それに、あんまり遅くなると楓が心配するだろう」

「あ、ああ」

確かに、既に空は暗くなり始めている。

「それに、下手をすればあのお二方が動くかもしれないぞ？　今やお前は頭に超がつくほどの重要人物（V・I・P）なんだからな」

「よし、帰ろう」

即決。あの二人なら充分あり得る。

「おう。それじゃ、また明日な」

「ああ、また明日」

挨拶を交わしてそれぞれ帰宅する。プリムラの事を聞き忘れていたことに稟が気付いたのは、就寝前にプリムラが稟のベッドにもぐりこんできた時だった。

その四（後書き）

楓は下手をすれば、鬱病を発症してもおかしくなかったのではないか、と思うのは自分だけでしょうか？
ノベルス版では特に。

その五（前書き）

前半部分はネタ&捏造です。
いや本当に何書いてんだか。

その五

突然ではあるが、バーベナ学園における体育の授業は二クラス合同で行われる。稟達の所属する２－Ｃは隣のクラスの２－Ｄと合同だ。しかしこの時期は水泳の授業があるため、別々に行われる。バーベナ学園のプールは他に比べてやや大きめではあるが、二クラスの合計八十人が入るにはさすがに手狭だ。そのため一方のクラスがプールを使用して水泳の授業、もう一方のクラスはグラウンドでの授業となる。今日は２－Ｄがプールを使用している。

『そんな～、リシアンサス様の水着姿が見られないなんて～』

などという絶望感溢れる嘆きが聞こえてきたのは気のせいだろう。それはさておき。

「速いな……」

そうつぶやいた稟の目には、ちょうど百メートル走のタイムを計り終えた樹と柳哉の姿があった。わずかの差とはいえ柳哉に負けたからか、樹は少し落ち込んでいるようだ。

樹はその明晰な頭脳から“バーベナの頭脳”などと言われている。それだけではなく身体能力でもトップクラスだ。その上ルックスも良く、女子限定だが人当たりもいい、ということで女子生徒からの人気は高く、学園内には親衛隊も存在する。

緑葉樹親衛魔術団、Ｍ∴Ｍ∴Ｍ――正式名称“もっともっと緑葉君”――とある特殊な趣味を持った、主に文系の女子生徒からなる親衛隊である。しかし、学内四大親衛隊とは趣(おもむき)が異なり、樹に近づく女子生徒を警戒したり排除したり、といった行為は一切しない。

では何をするかと言うと、直接的には何もしない。あくまでも直

接的には。彼女達がやっているのはとある薄い本の作成、発行、そして愛読である。ぶっちゃけ同人誌。

主人公は樹であり、その相手役はほとんどが稟だ。内容は純愛から耽美、陵辱まで幅広い。いわゆるＢＬ。そして十八禁。おまえら高校生だろうが、というツッコミを入れる者はいない。少なくとも親衛隊内には。

以前は樹×稟か稟×樹かで争いになり、一時は内部分裂の危機を迎えたが、ある女子生徒の『どっちも素晴らしいことには変わりないでしょ！　共存はできないの？』という名言（迷言？）によって収束。住み分けをすることによって現在に至る。ちなみにその時、その女子生徒の後ろで『まままあ♪』と瞳を輝かせる女子生徒がいた、というのはまったくの余談である。

そして最近では柳哉の登場により、悪友、幼馴染、ライバル、三角関係といったジャンル分けがされており、さらなる発展が期待されている、らしい。

ちなみに稟も柳哉も、そして樹もこの事実をまったく知らない。知ったら知ったで精神に洒落にならないダメージを喰らうだろう。ある意味四大親衛隊より性質（タチ）が悪いと言える。幸いにして彼女達は妄想と現実をはっきりと区別できており（＊必須入団条件）現実の彼らにそれを押し付けるようなことはしない。あくまでも自分達の妄想で楽しんでいるだけである。

……話を戻そう。というか何を書いているのか。

「負けたな、樹」

「ま、今回は勝ちを譲ったってことさ」

「物は言い様、だな」

そう言って柳哉を見る。何やらクラスメイトに熱心に話し掛けられているようだ。

「陸上部の勧誘だよ。一応とはいえ俺様に勝ったんだ。当然と言えば当然だね」

「確かにな。というかあちこちの運動部から引っ張りだこなんじゃないのか？」

「ま、本人には受ける気は無いみたいだけどね」

樹の言葉を証明するかのように柳哉がこちらに歩いて来た。勧誘していたクラスメイトは残念そうに肩を落としている。

「大変だったな」

「ある程度は予想してたがね」

そう言って肩を竦(すく)める柳哉。

「お、リンちゃんが走るみたいだ。これは見逃せない」

トラックのもう半分を使って百メートル走のタイムを計っている女子の方に目をやると、ネリネともう一人の女子生徒がスタート地点で待機していた。計測は二人ずつ行うためだ。合図と共に二人がスタートする。初めのうちはほぼ互角だったものの途中から差が付き始め、ゴールした時にはネリネは三メートル近い差を付けられてしまっていた。

「あー、負けたか」

「まあ、元々勝敗を競うものじゃないしね」
ネリネは体があまり丈夫ではない。実際、今の計測でも、高校二年生女子の平均をかなり下回っている。と、柳哉が口を開いた。
「……何というか、アンバランスだな」
「確かに。あの身長であの巨乳は反則だね」
実際、ネリネが走っている間、男子生徒の視線はネリネの胸に釘づけだった。
「おい」
「いや、まあ確かにそうだが、そういう意味じゃなくてな」
「じゃあ、どういう意味なんだい？」
柳哉は笑って答えなかった。

＊　＊　＊　＊

同時刻、プールにて。
デイジーは考えていた。
（リシアンサス様……）

どうすればリシアンサスと親しくなれるか。放送部に入ってもらえるか。案はいくつかある。

1：直接交渉……これは駄目だった。土見稟という邪魔が入ったためだ。しかもあんな姿を晒してしまった。敬愛する神姫リシアンサスの前で。しかも土見稟のあの対応。許せなかった。ある意味自業自得とはいえ、やはり乙女心は複雑ということだろう。

2：土見稟を介しての交渉……論外。というか何度も交渉のチャンスを潰されている。駄目だ。

3：リシアンサスの周囲の女子生徒を介しての交渉……ネリネはリシアンサスにとって親友と呼べる相手だが、自分の立場上魔族の、しかも王女に借りを作るのはいただけない。芙蓉楓は土見稟と同棲しており、（実際は同居だが）最近は以前にもまして仲が良い。土見稟に情報が行ってしまう可能性が高い。時雨亜沙も駄目だ。生まれとそのコアな趣味から、同級生との付き合いさえ上手くいっていない自分が上級生相手にそれだけの交渉ができるとは思えない。カレハも同様。プリムラはよく分からない。それに下級生に頼るのはどうかと思う。

4：緑葉樹を介しての交渉……本能的な危険を感じる。却下。

（となれば……）

5：水守柳哉を介しての交渉……以前に放送室で会った時は“あの”土見稟の幼馴染だということで警戒していたが、対応そのものは誠実なものと言えた。あくまでもデイジーの中ではの話だが。それだけではない。

（私を見た時、何か驚いていたようですが……）

そのことがある。会長からの注意を受けている時も何かを考え込んでいるようだった。それに今思えば彼の容姿や纏っていた雰囲気

などには、どこか懐かしいものを感じた。それはまるで……

（リシアンサス様と、初めてお会いした時のような……）

これはデイジーのただの勘であり、根拠など何も無い。しかし、あの二人はどこか似ている。そう思ったデイジーだった。

と、視線を感じて若干俯きがちだった顔を上げると、こちらを見ていたであろう授業中の男子生徒が目を逸らすのが見えた。その後もチラチラとこちらに視線を向けている。

（……？　何なんでしょうか）

本日、デイジーはいわゆる“女の子の日”なので水泳の授業は見学していた。プールには入らないので制服姿のままなのだが、体勢が悪かった。現在、デイジーは体育座りでプールサイドから少し離れた所に座っている。そして当然の事ながらプールの水面はデイジーの座っている位置よりも低い所にある。要するに下着が見えている状態なのだが、本人はまるで気付いていなかった。デイジーがその事を知ったのは、授業終了後の男子生徒達の会話を盗み聞いた時だった。デイジーが羞恥で顔を真っ赤にしたのは言うまでもない。

その五（後書き）

デイジーには若干のドジッ娘要素を持たせています。

その六（前書き）

何か内容が章タイトルから外れているような……。
次あたりで本筋に戻ります。

その六

「稟くん稟くん！！」

三時限目の終了後、少し経ってから稟の元へ血相を変えたシアが駆け寄って来た。

「い、いや、どうしたんだよ。そんなに慌てて」

シアがここまで慌てるのも珍しい。

「四時限目の英語の訳、やってる？」

「英語？　いや、今日は当たらないからやってないが……ああ、今日はシアが当たる日か。って前にもこんな会話をした気がするな」

「そうだっけ？」

シアは勉強自体が結構苦手で（麻弓ほどではないが）、その中でも英語は特に鬼門であるらしい。実際、一学期の期末試験では赤点を取っている。

「ともあれ、さっきも言ったように俺はやってない」

力になってやりたいのは山々だが、稟の成績も悪くはないが良いわけでもない。いつも平均の近くを行ったり来たりだ。

「他に頼れそうな奴、と言ったら……」

「緑葉くんはアウトだし……」

真っ先に除外される樹。彼のノートは毎時間、女子の間を飛び交っている。と言っても除外された理由は他にあるのだが省略。

「ネリネは……駄目か」

「他のならともかく、英語はね……」

ネリネは英語も得意だが、そこは王女同士、譲れないものがあるのだろう。

「後は……楓と柳くらいか」

成績優秀な楓は言うに及ばず、柳哉は夏休みの宿題を片付ける際、シアのサポートに就いていた実績がある。実力は確かだろう。

「楓は……いないみたいだな」

楓は何か用事があるのか、三時限目の終了後に教室を出て行き、まだ帰って来ていない。

「となれば！」

そう言うが早く、シアは柳哉の元に向かった。

「柳哉くーん！」

「いや、どうしたよ。そんなに慌てて」

「訳が四時限目で英語なの～！」

「ＯＫ。大体分かったから少し落ち着け」

はいどーどーとばかりにシアをなだめる柳哉。落ち着いた所で英語の訳の講義を開始。

柳哉はすぐに解き方や答えを教えるのではなく、ヒントを出して本人に考えさせる、という形をとる。でないと本人のためにならないから、というのが理由らしい。家庭教師に向いているんじゃないか、とか考えながら耳を欹(そばだ)ててみると、日本語での説明に交じって流暢な英語の発音が聞こえてきた。どうやらこの幼馴染は読み書きだけでなく会話もこなせるようだ。

「助かったッス！　ありがと、柳哉くん！」

「おう。ま、いつでも聞いてくれ」

訳を終え、満面の笑みのシア。それを見て柳哉も笑う。そんな二人を見た稟は、まるで兄妹みたいだ、と口に出す。

「確かにそうですね」

少し驚いて隣を見ると、いつの間に帰って来たのか、楓の姿があった。

「どうしました？　稟君」

「いや、いつの間にか隣にいたからな、ちょっとびっくりした」

「少し、柳君の真似をしてみました」

悪戯っぽく笑う楓。

「……頼むから俺を弄るのを真似るのだけはやめてくれよ」

「うーん。どうしましょうか？」

「楓さん？　ちょっと？」

「ふふ、冗談です」

再度“約束”を交わしたあの日以来、楓は少し変わったように思う。相変わらず家事全般などは自分一人で行っているが（プリムラも手伝うが、あくまでもお手伝いのレベル）、時折、こうして稟をからかったりするようになった。良い意味で（若干だが）遠慮が無くなってきた。良い傾向にあると言えるだろう。その分、稟の負担が増えたとも言えるが、楓が以前よりずっと良い笑顔をするようになり、それを見られるならいいか、と思っていたりする。柳哉が稟を“底抜けのお人好し”呼ばわりするのも無理はない。

「柳君、“皆のお兄さん”みたいですよね」

「ああ、そうだな」

そんな会話を交わすふたりの視線の先には、ネリネも交えて柳哉と談笑するシアの姿があった。

＊　＊　＊　＊

その日の夕方。シアは父ユーストマと共に木漏れ日通りの商店街に買い物に来ていた。

「あ、リンちゃん」

「おう、ネリっ娘じゃねえか」

「シアちゃん、神王様、こんにちは。それともこんばんは、でしょうか」

同様に買い物に来ていたネリネと遭遇。目的地が近いようなので一緒に行く。

「お？　何だありゃ？」

ユーストマが声を上げる。見ると、何やら小さな人だかりができていた。

「喧嘩か？」

どこか嬉しそうに言うユーストマ。“軍神”と呼ばれるだけあって戦いに関しては興味津々だ。

「お父さん？」

「っと、いけねえいけねえ。買い物に来たんだったよな。だからシア、その椅子を下ろそうな？」

若干汗をかきつつ、椅子を振りかぶっている娘をなだめるユース

トマ。ネリネも苦笑い。というかその椅子はどこから調達したのか。

「？　あれは……」

ネリネが声を上げると同時に人だかりの中から男が一人飛び出し、そのまま走り去っていった。そしてすぐに集まっていた人達は散らばっていく。

「あの子は……」

人だかりの中心だったと思われる場所には、二人の少女が立っていた。ネリネはそのうちの一人に見覚えがあった。シアと神王に目配せをして歩み寄る。

「菫ちゃん」

その声にこちらを見たのはやはり、水守菫だった。

菫は『ちょっと待ってください』とジェスチャーをして、側にいる少女に何かを話しかけた。すると少女は何度か頭を下げた後、その場を離れて行った。

「こんばんは、ネリネさん。もしかして、見てました？」

「いえ、人だかりから男の人が出てきたところからしか……」

「そうですか」

聞けば、しつこいナンパ男に付きまとわれていた少女を助けたそうだ。ネリネも菫も与り知らぬところだが、先程のナンパ男は以前、桜をナンパしようとして柳哉に撃退された男と同一人物である。ど

うでもいいが。

「リンちゃん、その子、もしかして」

「はい。紹介しますね。柳哉さんの妹さんの菫さんです」

「始めまして。水守菫です。兄がお世話になっています」

「そしてこちらが……」

「始めまして。リシアンサスっていいます。長いのでシアって呼んでくださいね。あと柳哉くんにはお世話になってます。今日も英語の訳を教えてもらったし」

互いに自己紹介を終える。

「それでこっちが……ってお父さん？」

「あ、ああ。すまねえ。シアの父親でユーストマってんだ。ま、よろしくな」

「神王様？　どうかされましたか？」

首を傾げるネリネ。

「いや、ちょっとな。嬢ちゃんが俺っちの知り合いに良く似てたんでつい、な」

（まさか……本当にそうなのか？）

何とか取り繕ってはいるものの、内心では動揺が未だ収まっていない。目の前の水守菫という少女はユーストマの知る“彼女”の幼い頃と瓜二つだ。

（だが、あいつは死んだはずだ……それに）

もし生きていたとしたら、なおさら辻褄が合わない。“開門”から十年。神界へ戻ってくることは充分にできたはずだ。何故戻ってこないのか？　今までに“神隠し”に遭った人々の一部がそうだったように人界（こちら）で家庭を持ったからか？　しかしそれなら連絡の一つくらいは入れるだろう。事実、“開門”の直後はそういった連絡がいくつかあったのだから。

それとも本当に良く似ているだけの赤の他人なのか？　世の中には自分にそっくりな人間が三人はいる、というがそれなのだろうか？

（……分からねえ。まー坊に相談してみるか）

＊　＊　＊　＊

一方。菫もまた平静を装っていたが、内心では焦っていた。

（まさかこんな形で遭遇してしまうなんて）

あのナンパ男、次に会ったらただじゃおかない、と若干過激なことを考えながら対策を練る。

（どうやら兄さんの予想はほぼ確定と言っていいでしょうね）

三日前、兄の口から語られたあの事実とそれに関連するあの予想。当たっていてほしくはない、そう言っていた兄の顔を思い出す。その想いは自分も同じだ。最悪の結末だけは避けなければならない。両親の想いを裏切ってまであの事実を自分に伝えてくれた兄に応えるためにも、これ以上の失態は許されない。

（敵は一世界の王。相手に取って不足はありません）

態度にも口にも出さないが、それは“●●堇”としての“宣戦布告”だった。

その六（後書き）

最後の“●●菫”の●●に入る文字は何なのか。
明かされるのは大分先です。

その七（前書き）

独自解釈多めです。

その七

「……というわけです」

「そうか……」

帰宅後、菫は柳哉に先程の出来事を説明した。これは自分の失態であり、恥ずべき事だが、内緒にしておいていい事ではない。

「それで、神王陛下の反応ですが……残念ながら兄さんの予測はほぼ正解と言っていいかと」

自分を見た時の神王のあの反応は根拠として充分だろう。

「となれば、近いうちに向こうから何らかの形で接触があるだろうな」

「はい。早ければ来週の頭くらいには」

おそらく神王は魔王にも協力を依頼するだろうし、魔王もそれに乗るだろう。ならばそれくらい早くてもおかしな事はない。

「まず無いとは思いますが、当日迄に接触が無かった場合はどうしましょうか？」

「……それはその時に考えよう、というわけにもいかないか。とりあえず来週中に接触が無ければその時に」

「はい、それから……」

少しトーンの落ちた声で菫は言った。

「申し訳ありませんでした。私の未熟さ故に……」

予定が狂ってしまった。そう言いたいのだろう。柳哉は苦笑する。さすが兄妹、こういう所は自分とそっくりだ。そう思いながら菫の頭をいつもよりいくらか優しく撫でる。

「お前はしっかりと謝罪し、反省もした。なら、後はそれをしっかりと次に繋げていくことだ」

その言葉に菫は微笑む。かつて彼らの父、草司がよく口にしていた言葉だ。それに柳哉が言うと、確かな説得力がある。経験者は語る、ということだろう。

「ただいまー」

と、玄関で声がする。玲亜が帰って来たようだ。

「お帰り」

「お帰りなさい」

今日は三人揃っての夕食になるようだ。

＊　＊　＊　＊

土曜日の放課後、稟に誘われた柳哉は芙蓉家に遊びに来ていた。
バーベナ学園は第二・第四土曜日が休みとなっているが、この日は第三土曜日なので授業がある。といっても昼迄なのだが。

「そういえば柳。前に聞き忘れてた事があるんだが……」

「ん？　何だ？」

「プリムラの事だ」

稟の自室にて、二人は話し込んでいた。

「……ああ、そのことか」

「……？　この話になるとお前、妙に不機嫌になるな？」

前にプリムラの事情を魔王から聞いた時もそうだった。

「むしろそこまで平気な顔ができるお前の方が不思議なんだが……」

「そうか？」

「……気付いていない、というよりはそこまで考えが至っていない、か。」

もう少し自分の頭で考えろ、と言いたくなるが、ここぞという時には頭の回転が良くなるようなので言わないでおこう。

「どういうことだ？」

「それじゃ聞くが、研究所においてプリムラはどういう扱いを受けてきたと思う？」

「どういう扱いって、そりゃあ大事にされてきたんだろう？　おじさん達もそう言ってたし」

「なら、何故プリムラはあそこまで感情表現が希薄なんだ？」

「それは……」

以前神王から聞いた話では『大事にされすぎてあんな風になった』らしい。それを話すと、

「それは無いな」

柳哉は断言した。これは俺の自論だが、と前置きして話し始める。

「そもそも“人間（この場合は神族・魔族・人族の三種族全体を表す）”っていう生き物は皆、感情というものを生まれつき持っている。そして成長していく過程でそれを表現する方法を学んでいく。ここまではいいな？」

頷く稟。

「あんまりこういう表現はしたくないんだが……“普通”に育った場合でも、孤児だったり養子だったりといった“普通じゃない”育ちをした場合でも、程度の差こそあれ、感情を表すことが出来るようになるものだ」

「それって……」

何かに気付いたように言う稟に頷きを返し、続ける。

「そしてそれは“普通じゃない”生まれ方をしている人工生命体も同じ。一号体はただ強化されただけだが、二号体はクローンだ。二号体がどうだったかはもう知ることは出来ないがな」

三号体であるプリムラ。彼女にもちゃんと感情がある。ただそれを上手く表す事が出来ないだけだ。ならば何故、プリムラは感情を上手く表せないのか？　それは……

「周囲の環境が、それを許さなかった？」

「おそらくは、な」

肯定する柳哉。だがそこで疑問が生まれる。

「でも神王のおじさんは……」

『大事にされ過ぎた』と言っていた。それならば感情の表し方をちゃんと知っていてもおかしくはない。

「嘘は言ってないだろうな。もしかしたらお二方がいる時だけ大事にされていて、お二方がそれを知らない可能性もある」

「！！」

驚く稟。柳哉も苦い顔だ。

「ま、根拠があるわけでもない。あくまでも可能性の話だ」

「そう、か……」

「それから、これも俺の予想にすぎないんだがな。一号体はともかく、二号体はプリムラと面識が有ったんじゃないか？　もしかしたら友人と呼べる仲だったかもしれない」

有りうる話だ。奇しくも“普通じゃない”生まれ方をした者同士、面識が有ってもおかしくはない。

「でも、もしそうなら……」

柳哉は以前言っていた。『一号体や二号体の結末がプリムラの感情表現の希薄さの理由なのではないか？』と。プリムラは実験体という立場上、周囲にいるのは基本的に研究員ばかり。しかも研究所にいる以上、友人と呼べる存在など皆無と言っていい。もしも二号体が唯一の友人だったなら？　その死によって感情を封印してしまう、という事も充分に有りうるだろう。

「……」

「稟」

「……」

「おい稟！」

「あ、ああ。何だ？」

何度か呼び掛け、ようやく返事をした稟に苦笑する。

「考えるのはいいんだが……考え過ぎるなよ。過ぎたるは及ばざるが如し、だ」

「ああ、そうだな」

そこでふと気付く。

「前から思ってたんだが……お前、何でそんなに鋭いんだ？　さっきの事といい、楓の事といい」

確かに。稟は与り知らぬ事だが、魔王フォーベシイも柳哉の鋭さには注目している。

「前にも言ったと思うがな……色々、あったんだよ」

苦笑いする柳哉。詳しく聞きたかった稟だが、やめておいた。何故かは分からない。でも……

（柳の奴、どこか辛そうだったな）

そう、思った。

＊　＊　＊　＊

夕方になって、柳哉は芙蓉家を辞した。夕飯を摂って行くよう薦められたが、『お前達の愛の巣にこれ以上長居するわけにもいかないだろう？』と冗談交じりに言って断った。ちなみにその時、楓が

『愛の巣……ぽー』と言って赤くなっていたのは余談だ。

（プリムラ……か）

今日稟と話した内容を思い返す。稟には言わなかったが、プリムラが『大事にされ過ぎた』のは研究対象として大事にされたという意味かもしれない。それならばプリムラの感情表現が希薄なのも納得がいく。そもそも人間扱いされていないのなら、人間らしい感情を表すことなど出来ないだろうから。詳しくは知らないが、かつての“彼女達”もそうだったらしい。だが、今の“彼女達”は……

（プリムラはいっそのこと“あの女子寮”に預けた方が……いやだめか。環境的にはいいが、性格面で悪影響が出かねん。何せあそこは“魔窟”だからな）

その女子寮の一部住人が聞いたら柳哉とてただでは済まないだろう。肉体的にも精神的にも。そんな事を考えつつ、柳哉は帰路についた。

その七（後書き）

“あの女子寮”に関しては、あまり言う事はありませんね（笑）

その八（前書き）

展開に詰まってしまい、Ｅｓｓｅｎｃｅ＋本編全ルートをやり直していたら時間が掛かってしまいました。
申し訳ありません。
そしてその間にユニークアクセス数が１００００件を突破しました。
ありがとうございます。

その八

「……むぅ」

火曜日の朝、２－Ｃの教室にて。

水守柳哉は微妙な表情で、今朝、自分の下駄箱に入っていたそれを見ていた。縦十センチ弱、横十五センチ弱の紙製で色は白。封入口が長辺にあるいわゆる洋型の封筒。表には“水守柳哉様”と書かれており、字は若干丸っこい。差出人はおそらく女子生徒だ。既に封は切られており、その中身は現在柳哉の手にある。

（大切なお話があります。本日の放課後、屋上でお待ちしています、か）

差出人の名前は無く、内容からすると告白のための呼び出しとも取れる。普通の健全な男子高校生なら一体どんな相手なのか、どんな用件なのかと想像力を働かせるのだろうが……

（なーんか、厄介事の匂いがするんだよなあ……）

柳哉には自分が“普通”というカテゴリからは若干外れているという自覚がある。さらに多くの経験から、特に厄介事に関しては非常に勘が鋭い。おそらくこれもそうなのだろう、と判断するが、送り主が女子生徒であろうことから無視するのもどうか、とか考えてしまう。柳哉は基本的には女性に対して誠実だ。それ故に、

（ま、とりあえず行ってみて、それから考えよう）

そう結論し、手紙をしまう。……普段から稟の事を“底抜けのお

人好し”呼ばわりしている柳哉だが、結局の所、稟と同類だということだ。いわゆる類友である。
そして、手紙の内容と自分の思考に集中していた柳哉は気が付かなかった。

（これは面白くなってきたのですよ！）

スクープ大好きなオッドアイの少女に一部始終を見られていた事に。

＊　＊　＊　＊

そして放課後。
今日は掃除当番ではない柳哉は授業終了と同時に屋上に来ていた。どんな状況であれ、女性を待たせるわけにはいかない。まだあの手紙の送り主が女子生徒と決まったわけではないが。

（少し早かったか？）

秋分の日が近いとはいえ、まだ夕方と呼べる時刻ではない。まあ気長に待とう、と決めて柵に手を置き、屋上からの景色を眺める。今の時期、屋上は昼食スポットとしてかなり賑わうが、さすがにこの時間は人気が無い。

（そういえば昼食時以外で屋上に来るのは初めてだな。だからどう、というわけでもないが）

益体（やくたい）もないことを考える事二十分ほどした後、校舎内に続く扉が

開かれた。あえて振り向かず、声を掛けられるのを待つ。手紙の差出人とは違う人物の可能性もあるからだ。

「水守柳哉さん……ですか？」

頷くことで肯定し、ゆっくりと振り向く。そこにいたのは予想外の人物。

「以前にも放送室でお会いしましたが……覚えてますか？」

忘れてなどいない。肩に届くかどうかくらいの紫の髪。そしてその髪の一部を花のバレッタで留めた神族の少女、デイジーだった。

＊　＊　＊　＊

柳哉は内心で焦っていた。その可能性を完全に失念していた。このタイミングで彼女が自分に接触してくるとは！　充分に予想出来たはずだ。

（いや、今はそんな事を考えている場合じゃない！）

内心の動揺を悟られないよう、少し間を置いてから話し掛ける。

「ああ、覚えてるよ。記憶力には自信がある」

「……の割には間がありましたけど？」

「何、予想外の人物だったんで少し驚いただけだよ」

嘘ではない。驚いたのは事実だ。その理由は敢(あ)えて話さない。下手に口にすれば後手に回ってしまいかねない。

「さて、無駄話はこれくらいにして、本題に入ろう。……その前に」

「何ですか？」

「座らないか？」

「……そうですね」

そう言って二脚のベンチにそれぞれ座る。少し間を置き、柳哉が口を開いた。

「で、“大切なお話”ってのは？　雰囲気からして愛の告白、とかじゃなさそうだが」

「……ええ、実は……」

言いよどむデイジーに警戒心を高める柳哉。しかし、

「私がリシアンサス様を放送部に勧誘した、というのはご存知ですか？」

「あ、ああ。知ってるけど……」

予想外の台詞に一瞬思考が停止しかかるが、どうにか持ちこたえる。

「なら話は早いですね」

（そっちかよ！？）

一気に脱力。同時に警戒を解く。良かった。どうやら神王に何か言われて来たわけではないようだ。

「あのー、聞いてます？」

「ああ、聞いてるよ。シアを放送部に入れたいんだろう？」

「むっ、あなたもリシアンサス様を呼び捨てですか」

「本人からそう言われたしな。むしろ下手にかしこまった呼び方はされたくないんじゃないか？」

その理由はシアの立場と性格を考えれば容易に想像がつく。

「それはそうかもしれませんけど……」

「やっぱり不満か？」

「……男の人が呼び捨てにしていいのは、奥さんだけだと思いますから」

「古風だな。まあそういう考えは嫌いじゃないが」

「まあ、土見さんのような慣れ慣れしさがない分、良しとしましょう」

その言葉に肩を竦(すく)める、話を元に戻す。

「で、放送部の件だが……察するに、シアを勧誘するのを手伝って欲しい、とかか？」

「……よく分かりましたね？」

「いや、あの切り出し方でそれ以外にどう解釈しろと？」

「それもそうですね。それで、受けてもらえませんか？」

ふむ、と少し考えてから口を開く。

「何で俺なんだ？　予想はついてるが一応聞いておきたい」

「そうですね……」

そう言って語り始めるデイジー。その内容は以前にプールで考えていたものと同じだ。手抜きとか言わないように。

「とまあ、そういうわけです……って何笑ってるんですか」

「いやまあ、若干一名の扱いの酷さにな……」

流石、歩くセクハラダイナマイツ、といったところか。

「で、どうなんですか？　受けてもらえますか？」

「まあ、力になってやりたいのは山々なんだが……正直言って難しいと思うぞ？」

「駄目ですか？」

「いや、そういう意味じゃなくてな」

少し間を置いた後、口を開く。

「俺はシアと初めて会ってからまだ一ヶ月も経っていないからな。デイジーが思っているほどの影響力は無い。それよりも……」

「それよりも……？」

「やっぱり稟を介したほうがいいと思うぞ？」

とはいえ、稟もシアと出会ってからまだ三ヶ月ちょっとしか経っていない。正確には再会してから、だが。しかし、八年前の出会い以来、シアはずっと稟に対して恋心を抱き続けてきた。それ故にシアに対する影響力は、稟と柳哉では天と地ほどに違う。

「むぅ……」

「まあ、稟に対して思うところがあるのは分かるけどな？　でも、デイジーが思っているほど悪い奴じゃないぞ、土見稟って男はな」

やはり初対面時のあれが尾を引いているのだろう。それを気にしさえしなければ大丈夫だろう。

「……分かりました。とりあえず土見さんに話してみます」

「ああ。悪いな、力になれなくて」

「いえ、きっかけをもらえましたので」
「そうか。で、これで話は終わりかい？」
「はい」
そうか、とつぶやき、校舎内に続く扉を睨みつける柳哉。首を傾げるデイジー。
「で、いつまでそこで聞き耳を立ててるつもりだ？　麻弓」
その言葉が発された直後、扉の向こうからがたん、という音がした。
「おっと、逃げるなよ？　まあ別に逃げても構わんが、その場合、紅薔薇教諭の扱(しご)きが天国に思えるようなお仕置きを受けてもらうことになるぞ？」
さも愉快そうに、しかし地の底から響いてくるような声で言い放ち、ぽかんとするデイジーを置いて扉に近づき、開ける。そこにいたのは……
「あ、あはははは。偶然なのですよ、水守くん」
だらだらと嫌な汗を流している、バーベナのナイチチパパラッチこと麻弓＝タイムだった。

＊　＊　＊　＊

「まあ、大体の想像はついていたが……」

麻弓から事情を聞き出し、ため息を一つ。

「だってねえ、あの土見稟と芙蓉楓の幼馴染が手紙をもらって放課後の屋上に、そしてそこに現れた女生徒、とくればもうスクープの予感しかしないわけでして」

「はあ……」

「……あのー」

すっかり蚊帳の外なデイジーから遠慮がちな声。

「ああ、すまん。会話の内容に関しては他言無用を誓わせるから。問答無用で」

「ええーっ！？」

「……麻弓？」

「うひぃっ！？」

にっこり笑顔の柳哉。しかし目がまったく笑っていない。

「……他言無用を、誓うよな？」

「はいっ！　ぜひとも誓わせていただきます！」

「よし。それじゃ」

健闘を祈る、と言い残してその場を去る柳哉を見て、『彼だけは敵に回すまい』と固く誓うデイジーだった。

その八（後書き）

本編をやり直しながら思った事。
やべえ、原作設定と違う！
こんな作者ですが今後ともよろしくお願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3943v/

SHUFFLE! ～The bonds of eternity～

2011年11月1日02時22分発行